

# 東北学院大学 教養学部論集

第 159 号

2011 年 8 月

〔論 文〕

セース・ノートボームを読む 3) 『儀式』…………… 吉 用 宣 二…… 1

Classical Chaos and Quantum Mechanical Solvability in Inverse Problem

…………… TAKAHASHI Koichi…… 45

〔研究ノート〕

都会の隣人を愛しなさい (2) …………… 吉 田 信 彌…… 67

〔翻 訳〕

カール-データー・オブ著 社会学における個人主義リサーチプログラム

—— その発展, 現状, 問題点 —— …………… 久 慈 利 武 訳…… 75

東北学院大学学術研究会



目次

〔論文〕

- セース・ノーテボームを読む 3)『儀式』……………吉 用 宣 二…… 1
- Classical Chaos and Quantum Mechanical Solvability in Inverse Problem  
……………TAKAHASHI Koichi…… 45

〔研究ノート〕

- 都会の隣人を愛しなさい (2)……………吉 田 信 彌…… 67

〔翻訳〕

- カール・データー・オブ著 社会学における個人主義リサーチプログラム  
——その発展, 現状, 問題点—— …………… 久 慈 利 武 訳…… 75

●印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページからも読むことができます。

<[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_159/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_159/index.html)> にて公開中です。

東北学院大学学術研究会のホームページには

東北学院大学 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/index.shtml>> から,

研究・産官学連携 →学術誌 →学術研究会(紀要, 論集) へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

- |         |              |
|---------|--------------|
| 吉 用 宣 二 | （本学教養学部 教 授） |
| 高 橋 光 一 | （本学教養学部 教 授） |
| 吉 田 信 彌 | （本学教養学部 教 授） |
| 久 慈 利 武 | （本学教養学部 教 授） |

## 【論 文】

### セース・ノーテボームを読む 3)

## 『儀式』

吉 用 宣 二

私は1994年、ドイツに滞在していた時に『儀式』を読んだ。それから、私はノーテボームの本のドイツ語訳が出るたびに買い求め、それらをすべて読むに至った。『儀式』は私とノーテボームの出会いの本である。しかしあの時、一体何が私をそんなに魅了したのか、今ではもう分からない。それから何度か読み、そのたびに私は新たな感銘を受けた。私がここで考えたいことは、『儀式』のその力である。

ノーテボーム論集である『眼の人間』の中に『儀式』について2編の論文が掲載されている。その両者とも「間テキスト性」（「書くことは、すでに存在しているテキストの選択、結合、変換のプロセスとして可視的にされる」van Buuren<sup>1)</sup>）の立場から、様々なモチーフを解説している。そしてそれらのモチーフは「隠された父」（van Buuren）、あるいはVergilの『アエネイス』にならった「父、夢、冥界」のモチーフ（van der Paardt<sup>2)</sup>）である。ノーテボームの父は、母親との離婚後にドイツ軍の空爆で死亡した。そして、その不在の「父」の姿は至る所に見出されるし、何よりもそれらの論文で考察される個々のイメージの解説は興味深いのだが、『儀式』が私を魅了したのは、そのようなイメージの豊かさではない。不思議なのは、その二人の論者が、イメージの探求（その系譜）をし、「父」をめぐる物語を再構築しているのだが、そのすべての前提である文体はいわば自明のもののみなしていることである。それらのモチーフを具体的に統合している文章表現はそれ自体として考察されていない。私は、小説の中のノーテボームのつぶやきのようなものにひどく共感したのだが、それも何よりも彼の文体のゆえである。

私は『儀式』をドイツ語訳で読んだ。オランダ語はドイツ語と親和した言語だが、それでも私の限定された知識でそれらを同一視し、同時にそれを日本語で語ることはできない。だが文学は優れて固有なものだが、同時に固有性を越えて語るものである。あるいは固有性を越えて語る量の過多に文学の価値があると思う。そうしないと、時代という固有性を越えた価値が失われ、古典は文学的価値を失うだろう。いずれにせよ、私は日本人なので、たとえオランダ語で読んだにしても、私という文化的な固有性から逃れられない。私は、そもそも

最初から文化的な固有性を「越えた」,「普遍的な」ところで 一私はそれを文学空間と名付けたいのだが— 読んでいるのである。オランダ文学やドイツ文学があるのではなく, 文学があり, それが様々な言語で実現される。各々の言語の固有性を無視し, 文学の「普遍性」を無反省に前提とすることは許されないが, 私はオランダ語の原書のドイツ語訳を読み, それを日本語で論じることによってすでに, 「普遍的な」文学空間の内部で論じている。

文体は, 何らかの共通分母に要約できるものではない。具体的な文体(文による表現)を見るしかない。だがすべてを引用することもできない。それで『儀式』の諸様相の表現を取り上げる。小説の中の細部はすべてその小説内の磁場の中にあり, この場合「儀式」という極を多かれ少なかれ指し示しているのですべてが「儀式性」を帯びている。あるいはすべての細部が「儀式」を参照指示しているかのように, 全体が構成され, 表現されている。だからどの細部も全体と照応している。「目次」が付せられているが, それはロラン・バルトの『恋愛のディスクール』のアルファベット順の項目のように, 語る際のとりあえずの符牒である。

## 1. アンチ・ヒーロー, イニ

この小説は次のように始まる。

「イニ・ウイントロップが自殺を試みた日に, フィリップスの株価は 149.60 ポイントだった。アムステルダム銀行の終値は 375 に保たれた。Scheepwart Urie は 141.50 に沈んだ。思い出は, 自分のしたいところに身を横たえる犬のようだ。イニがそもそも何かを思い出すとすれば, それはこれだ, つまり株価がどのような水準にあったか, 月が運河の中に輝いていたこと, 彼がトイレで首をつったこと, なぜなら彼は Het Patrol 紙のための星占いで, 彼の妻が男と駆け落ちをし, 獅子座である彼は自殺をすると予言したからだ。その予言は当たった。ジタはイタリア男と駆け落ちをし, 彼は自殺を企てた。Bloem のひとつの詩を彼は読んでいた。しかしどの詩であるか彼はもう知らなかった。犬, このわがままな動物はこの点に関して完全に役に立たなかった」(S. 363)。

ムジールの『特性のない男』は天気図の描写で始まっていた。ここで「株価」は感傷性を欠いた, 乾いた文体のメタファーである。そのクールな, アイロニカルな文体は, 例えば 17 年前の『騎士の死』には見られなかったものだ。イニの自殺未遂も新聞記事のように即物的に語られる。それでいて, 読者を物語に強く引きこむ「事実」が述べられている。ノーテボームを年代的に読んでくると, 彼はこの作品で自分の文体を見出したのが良く分かる。すでに見てきたように, 「どのように語るか」はノーテボームの文学の基本的な事柄である。

『儀式』において「何を、どのように語るか」、その一つの解答を彼は見出したのである。

イニは、物語的には「儀式」の主人公ではない。彼は「儀式」の目撃者である。彼は、「儀式」を司る二人の男の厳密さに対して、ほとんど戯画的な対称点である。イニのこの「自殺」の時点から物語は始まる。彼の現在が語られたあとで、フラッシュバックし、若い、さえない勤め人であった彼を、伯母のテレーズが訪問し、ターツのところへ連れて行く。孤独な、厳格な生活をしているターツは殆どきまぐれから、イニがウイントロップ家の一員として得るべき遺産を貰うようにさせる。ターツの死後、イニは、後にターツの息子であることが判明するフィリップと偶然に知り合う。フィリップは茶道の儀式にしたがって自殺する。イニはその二人のターツの「儀式」に深い衝撃を受けるが、その目撃者にとどまる、私たち読者のように。

狭い意味に於いて「儀式」はこのターツ父子の、極度に規律化にされた生のスタイルのことである。父、アルノルトのそれは、無神論者の個人修道院であり、息子、フィリップのそれは、宗教性を欠いた「茶道」である。儀式とは形式に他ならないが、二人の場合には、どの儀式も持っている記号意味部、「超越性」を欠いている。言わば、儀式のための儀式、形式のための形式のように見える。武士の道德律であった「茶道」も武士的存在様式がなければ、形だけが残る、つまり美学化される。フィリップの母親は東アジア人だが、彼は、西洋文明の人間として純粋な形式を追及している。父のアルノルトの「個人修道院」は神がない。彼らは現代社会を嫌悪し、全面的に否定するが、彼らの形式の器の中には途方もない孤独と不安がある。それは紛れもなく、ヨーロッパの人間があつた当時感じていた不安だろう。それによってイニは彼らに結び付いているのである。

ノートボームは殆どすべての作品の冒頭にモットーを置いている。

「そしてすべての計画に対して、〈そのナンセンスは何を意味しているのか〉という問いが私につきまとう。およそすっかり私を所有する恐れのある、問いである」トオドール・フォンターネ (S. 362)。この問いかけの主体を演じているのが、「主人公」のイニである。判断を保留し、観察し、記録する役目、それはきわめて文学的な位置である。だがそれはもはや自明の位置ではない。だからこの事件の観察者も、乾いた距離を持って描かれている。

ノートボームの小説の書き方は、とにかく一人の人間をある時代のある空間の中に放り込むことである。そのような人物は、明確な輪郭を持った人物ではなく、曖昧な、可塑的な人物であるほうがよい。そうすることでその人物は、世界・時代と浸透し、触媒として出来事を引き寄せる。だが、イニは一人の人間であり、具体的に造形されなければならない。

「イニ・ウイントロップ、すでにかなり禿げており、そのころ、その時期としては長い、癖のある金色の頭髪の房をもっていたが、彼は、彼の多くの同世代の人間と次のことによっ

て区別された。つまり彼は一人で夜をすごすことができなかつたこと、少しお金を持っていて、時々ヴィジョンを持つことによって。さらに彼は時々絵画を取引し、Het Paroolのために星占いを書き、オランダの詩を多く諳んじており、株式と商品市場を正確に追求していた。どのような方向のものであれ政治的確信を彼は心の病の多かれ少なかれ穏やかにされた形式とみなしていた。そして自分自身のために彼は世界の中で、言葉の文学的な意味においてディレタントの場所を取っておいた。彼の周囲の人によって矛盾として理解されたそのすべては、アムステルダムでは、60年代が多く展開すればするほど、いっそう切実に感じられるものとなった。〈イニは二つの世界の中に生きている〉と彼のひどく違った素質をもっている友人たちは言った。友人たち自身はただ一つの世界に生きていた。しかし、—そうあらねばならないならば、命令で—一日のどの時点でも自分自身を憎む準備があつたイニは、ここで一つの例外を形成した。もし彼が一つの野心をもっていたら、彼は自分をだめな人間と見なす準備があつただろう。しかし彼はいかなる野心も持っていなかつた、彼は生を、すこし奇妙に見えるクラブ、人がただ偶然に加わつたクラブ、そのメンバーリストから人が理由を挙げる必要もなく自分を抹消させることができるクラブとみなしていた。彼はすでに、その会合が退屈になりすぎるときにはそのクラブから脱退することを決心していた」(S. 364f.)。

機知に富んだメタファーがちりばめられている。その機知はまたイニの人物を構成する要素である。ターツ父子には「機知」の入る余地はない。

## 女

妻のジタについて、「一つの不実が彼女たちを一つの確実な破局から救うことができるほど、貞淑な女たちがいる」(S. 386)。このようなパラドクスの表現も多い。

「ジタは有史以前のナミビア的な眠りをもつた、そして夜の苦悩の時間が始まると、彼は彼女の全体的な抱擁から身を離し、別の部屋に行き、さめざめと、しかし短く泣いた。彼がその後再びベッドに入ると、彼女の腕が開かれていた、まるでそれらが彼を見ているかのように。それはまるでそこにそれ以上のものが、新鮮な干し草のある温かく柔らかい草原で一杯のエリュシオンの世界全体が開かれたようであった。そこに世界のすべてのイニが眠るために横たえられるような」(S. 369)。

「さめざめと泣いた *weinte bitterlich*」。「これはバッハのマタイ受難曲からの引用で、ペトロに関連する。ペトロは三度イエスを否定し、その都度ピラトの館を出て、さめざめと泣いた」<sup>3)</sup>。ここはオランダ語の原書ではドイツ語で書かれている。それを私は van Buuren の論文からはじめて知った。唐突な印象を与える文だが「裏切り」が暗示されている。女は宗教



性のカテゴリーを借りて表現されているのである。(後に見るように、キリスト教の概念に由来する表現はかなり多い)。女はここでは一つの「避難所 Asyl」, 母胎である。(イニはジタに子供を産むことを拒む。彼は自分の母を求めているのであり、子供の母ではない)。

イニはバーのマダムのリダの部屋を訪れる。その部屋は官能性のメタファーとして読める。「〈そう〉と彼女は言い、一つの奇妙な音をもう一度聞きたかったオウムのように、頭をかしげた。彼女は再び一口飲んだ、そしてイニがその緑色のものが下に滑って行くのを見たとき、彼は興奮がゆっくりと彼のつま先から這い上がってくるを感じた。Crème de mentheの他に、彼を想像できないほど興奮させたその屋根裏部屋までにはまだ果てしない階段があった。そして最後にその空間自体も興奮させた。それはロタン藤の椅子、ネスカフェ、キンセンカ、ヤシの細長い絨毯、そして彼女の父親の額に入れられた写真のある部屋だった。その禿げたリダ頭部は、死者の国から猜疑的に部屋の中を眺めていた、彼女がまたしても手元に持っているのか誰なのかを見るために。イニは、彼がまだ服を着ていない姿を見たことがない誰かをヌードにして見ることを、刺激的だと思った。人が、名もない地区の木製の鳥かごの中で、まったく他人の、衣服を着た、直立歩行する人間をわずかの手の動きによって彼らのもっとも自然な状態に戻すことができるということは、驚くべきことであった。そしてエスプレッソバーで Elsevier をめくっていた未知の女性がベッドの中で隣に裸で横になっているということは驚くべきことだった。そのベッドは、それが何年も前から存在していたにもかかわらず、存在していなかったものなのだ。もし死と盲目とガンに対抗するものがあるとすれば、これがそれなのだ」(S. 371f)。

「部屋」や「写真」は、この小説の重要な小道具である。このリダの父親の写真は「父」のイメージを示す。そして「女」は「父」の対立概念である。それを言うのは、この小説は、イニの父親探しの小説であるからだ。そしてその「父」を演じるのがターツである。

もちろん、それはイニが一人で勝手に持っている「女」のイメージである。「女」たちはそんなイニの思いとは無関係に、謎としてあり続ける。

「彼は写真の展覧会ではじめてジタに会ったことを思い出した。彼女は彼女自身の写真の前に立っていた。彼は彼女を知覚する前に写真を見た。彼は誰が誰を否定しているのかわからなかった、写真の上の女がそこに立っているその女をか、それとも逆か。いくつかの写真—20歳の誕生日のヴァージニア・ウルフの有名な写真、その上で彼女は横を向いている—はあまりに完成されており、写真の上に映し出されている、生きている存在は空想の形象のように、写真に撮られるために創造されたもののように見える。イニはすぐに理解した。彼がその写真の上の女と知り合いになりたいのならば、彼はその写真の前に立っている女に話しかけねばならない。そしてそうした。その写真はいくらか暗い隅にかかっていた、しかしな

んとなくその写真からは吸引力が出ていた。その力は彼に近づくように強いた。一つの力がその写真から出ていた。それはまるで、決して一人の人間のものであることはできなかつたその顔が、あらゆるものから独立して、自らの中に完全に固定されて、すでに何世紀も存在していたかのようなようだった。一つの均衡」(S. 371)。

イニがもっている「女」のイメージと現実の女は一致しない。それが、ジタの写真の場面に刻まれている。

そして「写真」がまたジタがイニを去る契機となる。

「数週間が過ぎ去った。ジタは彼女のイタリア人と会い、彼女のイタリア人と眠り、彼によって写真を撮られた。彼が彼女を写真に撮るときにはいつでも、もう一つの小さな塊だけイニはアムステルダムの空気の中に溶けた。新しい愛は古い愛の火葬である」(S. 376)。

### アムステルダム、世界・時代

文体を論じるためには、個々の場面を引用するしか手段がないのだが、個々のイメージは互いに緊密に結び付けられている。小説内部の個々のモチーフの力のベクトルが形成する意味作用の網の目、それが文体なのだ。そして時代・世界（アムステルダム）こそ、その上で出来事が起こるマトリクスである。アムステルダムの街、運河、天候の描写は、物語の背景ではなく、イニ、いやこの物語のすべての人物たちが封じ込められている空間的、時間的な宇宙である。その混沌とした世界への対立の形で、ターツたちの厳密に形式的な空間が問題となるのである。

「(1480年に)とリーゼンキャンプは言った、(一人の魔女がこの場所を呪い、アムステルダムはカオスと地獄の騒音で没落するだろう)、と言った」(S. 512)。「魚たちは、それで魚たちが以前は死ななかつたもので死に始めた。そして道路の上のますます長くなっていく車の列の中の顔たちはフラストレーションと攻撃の混合物を示していた」(S. 367)。この終末論的イメージは常に背景にあり、それはまたイニの「冥界行」と符合している。

ジタが彼の元を去り、泥酔した彼は自殺を試み、ロープが外れて、死ぬことには至らなかつた。ジタが去ることはイニの女の形象の破産を意味している。それでもってイニは完全に世界・時代の中に投げ出される。「死の空は灰色の雲が一杯にかかっている。葉のないこずえの上を雲が運河に沿って疾走していく。彼は、ベッドの中で目覚める」(S. 381)。

「ウトレヒト通り Utrechtsestraat がカーヴするところで、彼は Handelsblad 紙を買う。彼は Oosterling に行き、ダブル・ブラック・コーヒーを注文し、いつものように、その時はじめて株式報告を開く。文字はいつもよりも大きい、そしてゆっくりと、まるで彼が突然年老いたかのように、そこに書かれていることを読む。(証券取引のための協会の幹部の緊急の

要請によって株式取引は、アメリカ大統領の死と関連して、20時45分から停止された。ケネディ大統領が、重い、恐らくは致命的な傷を負ったという衝撃的な知らせが入って来たとき、相場は急速に下落した」(S. 381)。

「彼がスイスの仲買人によって買わせた金によって、彼は1983年まで、もしその宿命的な写真が一万回、世界のすべての週刊誌の中に現れるならば、すでに1000パーセントの利益を得るだろう。その写真はとても明らかだった。悪しき時代が接近中だった」(S. 382)。

「死の空は灰色の雲が一杯にかかっている」の文に、van der Paardt は、首をつるロープが外れて落下したイニ／墜落するイカロスの神話素を見ている<sup>4)</sup>。私はその後の株式やケネディの暗殺のニュースに時代が有機的に表現されていると考える。

## 2. 若いイニ

序章に当たる『間奏曲』は中年のイニの人物造形である。彼は、その時代・世界の中に投げ込まれている。そして第二部は、フラッシュバックして青年期のイニ、そしてターツとの出会いが語られる。それは再び「写真」をモチーフに語られる。

「彼はこの時期の写真を憎んでいた。〈…〉彼であったところの人物から注意が何によってもそらされることのできない、そのような写真を。そこで彼はただ一人であったから。ポーズをとり、痙攣し、立像を真似しながら、同時に木とか垣根とかに支えを求めて。どんな対象でもよかったが、すぐにその写真の一部を占めるだろうし、そうして彼は一人でそれを占める必要がなくなるに違いなかったもの。というのもそのような写真の上には何が見えただろうか。やせすぎで兵役に不適格とみなされたもの、もっと悪いことに、浜辺で裸になる勇氣をもたないもの、4つの高等学校が放校したものの、彼の後見人と仲たがいし、彼の祖母が気高い心で認めて与えた援助金が削除されたもの、無意味な恋愛に巻きこまれていて、家賃を払うために事務所で日々を過ごさねばならないもの。消え入るばかりのわずかの独立性をもっていた一人の人間」(S. 389)。

このアンチ・ヒーロー性がイニの性格である。それによって、イニは時代・世界の具体的な関数となる。人間たちが彼の中を通りすぎていくのである。

テレーズ伯母は、物語的には「導く人」である。彼女はターツのところばかりでなく、イニの父親の過去、ウイントロップ家の過去へ導く。(評者たちは、ターツが住むドールンを冥界と見ている。後にイニは美術商に Sibylle (古代ギリシャの巫女) の古版画を持っていくのだが、その Sibylle は預言者としてアエネイスを冥界に同伴する。テレーズはこの Sibylle である)<sup>5)</sup>。モチーフとしては確かにそうなのだろうが、具体的にはかなり戯画的に

描写されている。

「車は突進した。彼女は〈…〉するべきことを持ったことがなかった。そして彼女はそれのできるだけ大きな速度でした。この興奮はひょっとしたらこの白いすくむくんだ肉体の中のどこかの進歩的な化学反応によって起こるのだらうと—まるでそこで彼女の血の入った小さな鍋が内部のかまどの上で不断に誰にともなく、煮えているかのように—彼は彼の無邪気さの中で思った。さまざまな色合いの斑点が彼女の顔や首に現れ消えた。定期的に深いため息の一つを出さなければ、彼女は破裂してしまっただらう」(S. 390f.)。

後にイニが正式にウイントロップ家に再び導き入れられる「儀式」がテレーズの屋敷で催されるのだが、そこでイニは、女中のペトラと知り合う。彼女はイニの「女の原型」となる。

### ペトラ

「彼女は背が高く、やせていて、大きな胸と、傾いた喜劇役者の顔をしていて、その顔の中で緑色の眼が笑いを苦勞して抑えていた。イニはただちに彼女に惚れた」(433)。この小説の中で笑う人はほとんどいない。笑いは超越性を意味している。

だがペトラに関して、小説の文体とは異質な言説が述べられる。

「後に(この忌まわしい、勝手きままな〈後に〉、それはすべての物事の命令者であるように見える、そしてその〈後に〉の中にすべての経験が一つのメニューの中のように整理されるのだ)彼はこの突然の、無意味に惚れることに次のような概念規定を与えるだらう、〈肉体的なことはそれとほとんど関係がない。〈…〉それは、誰かが順調であるという本能的な、確実な知である〉。〈順調である?〉。〈そう、彼女が自分を了解しているということ。私は自分自身を了解していない女性の中にひき込まれるように感じることはできない。それからまだ第二の主要柱がある。というのは結局、構築が問題となっているから。人は、彼女が人に好意をもっていることを知らねばならない〉。〈人に好意をもっている?〉。〈そうだ、もし時と場所が合っているならば、出会いには論理がなければならぬ〉。論理、この言葉でどの惚れることも逃げ出すだらう。しかし今まさにそれが問題なのであった。人がそのような人とベッドに入ったのは完全に論理的であらねばならなかつた。それは起こらなければならなかつたがゆえに起こったことを、人は知っていた。ただそれは他の人間に明らかにされねばならなかつた。それは誘惑だつた。経過の確かさはその際に大きな支えだつた。それと、今まさにベッドが問題となっていないという奇妙な矛盾。人が、一度他者になれば、明らかになる事柄。だれもが自分を了解しているということが問題だつた。しかし願望、震え、いつも同じであつた、この奇妙な絶望的な感情、彼女がひどく高く身を起こして歩み、この一つの文を彼女のうっとりさせるように柔らかい方言で言ったとき、彼女が彼女の緑の軽蔑の眼

で彼の方を見たとき、〈このガラスの眼をした老いた伊達男と奇妙なまなざしをもったこのやせた若者、まるで彼が一人も女の姿を見あきることができないかのように〉についておもしろがりながら見たとき、そのとき彼がこのテーブルのところで感じた感情、それらすべては一度あらねばならなかった。それから〈コントロール〉が来た。敬意と友情で満たされた行為が。彼がふたたびそのようなミッションで世界のもう一つの果てまで飛び、一つの線、一つの考えを追求するならば、誰かがかつて彼に残し、今、どれほど費用がかかっても、真実であることが証明されなければならない考えを追求するならば、彼の友人たちは彼を狂ったとみなしただろう。それはそうであったか、そうでなかったか。彼はそこで、この一人の女のもとで、ひとつの人生をそのような型に従って生きる可能性を、もし彼がそれを決意したならば、現実となることができる人生を生きる可能性を持ったか？それが問題であった。それを見つけ出すことは愛の問題だった、しかし彼はそれを誰にも説明できなかった」(S. 433f.)。

これは誰が語っているのか。「後に」のコメントは、小説のメタレベルにあるように見える。イニは、小説の語り手ではないので、これはイニの内的独白として想定されているのだろう。だが私が言いたいのは、現実を思弁することによってたえず現実を逃れる、あるいは現実を越えようとする志向・思考である。形而上学、Meta・Physik、物理世界を越える志向が表現されている。「自分が投げ込まれている現実」について考える志向を、投げ込まれている単独者であるイニは切実に感じる。ここで形而上学として私が述べる概念を、ターツ父子は生の厳密な造形として表した。それが「儀式」の内実である。ここでは「惚れたこと」をこのように考える、その内容が問題となっているのではない。「惚れる」というまさに「投げ込まれる」状況を思考すること、形而上学の構築によって越えようとする思考が問題となっている。その形而上学は様々な事態で、現実を越えるベクトルとなって、小説世界を貫いている。

「〈私はペトラ〉と彼女は言った。この岩の上に、この優しい、湾曲した岩の上に、彼は教会を建てた、とイニは後に思った。それに疑いはなかったから。あの日に女は彼の宗教となった、あらゆるものの中心、本質になった、そこで世界が回転する大きな車輪となった。〈星座はなに？〉」(S. 435)。

「主要人物の名は教父、聖人と連想されている」と van der Paardt は言う<sup>6)</sup>。ペトロは「岩」という意味である。その岩の上にローマのサンピエトロ寺院が建てられた。だがここではペトロは女性化されている。ペトラは「母」に近い。

「〈あなたはまたなんて青白い顔をしているの、坊や〉と彼女は言った。彼女がこの言葉を発音した仕方の何かが彼の眼の中に涙を浮かびあがらせた。彼は、人が彼に親切であること

に慣れていなかった」(S. 448)。

イニにとって避難所 Asyl を与える母。だがペトラが、ペトロの女性化であるように、彼女はキリスト教のシンボリックに回収されるわけではない。イニは彼女と寝るのだが、彼女が口に含んだイニの精液の白さが彼女の口の中にきらめく。後に、「彼女が聖体拝領のベンチの上に膝まずいたとき、彼女は向きを変えた、そして彼は一瞬の間、聖体拝領のホスチアが彼女の舌の上できらめくのを見た」。〈…〉「彼は膝まずいた、僧の手が近づくのを見た(子牛の肉)、きちんと受け取るために、空気を吸いこみ、それから舌を突き出した。その乾いた、軽い物質は一瞬の間彼の舌の柔らかい湿った肉にくっついていたが、それから彼は飲みこんだ。神は彼の内臓への道をとろうとしていた。そこで神は —それは今全く避けて通ることができないように思われた— 精液に変えられるだろう」(S. 457f.)。ここで言いたいのは、ノートボームにおいて現れる様々な「間テキスト」的なイメージ、シンボルは、そのまま踏襲されるのではなく、常に異化されていることだ。一つのイメージが呈示されると、すぐにそれは解体される。その脱構築の作業をするのはイニである。

「女」はしかし母的な存在であるばかりでない。「女」は謎である。

「もし世界が一つの謎であるならば、女たちはこの脈打つ謎を動かし続ける力であった。ただ女だけがこの謎に立ち入ることができた。この世界に何か理解できるものがあるとすれば、それは女を通して生じなければならなかった。男たちの友情は遠くまで進むことができた、しかしそれは物事の分別的な側面でとどまった。幾人かの女たちが追加的に所有していたもの、付録であった。女たちは言葉よりももっと誠実、直接的だった。女たちは媒体だった、しばしば彼は、女たちは彼に、それが可能なかぎり、女であることを許すという感情を持った、彼はそれなしには生き延びることができないだろうという感情を」。〈…〉「女たちは、すべての女は秘密の近くに、秘密の放射領域に達するのに役立つひとつの手段であった。その秘密を、男ではなく、女が管理していた。男たちを通して人は、世界がどのようなかを学ぶ、女たちを通して、世界が何であるかを学ぶのだ」(S. 456)。

それが、イニがペトラとの一夜に「考えた」ことである。

「女」が謎であるならば、そして現実にもっと近い存在であるならば、その対極としてターツの厳密な世界がある。

### 3. アルノルト・ターツ

この小説は「父」の物語である。儀式は父の領分である。そしてテレーズがイニを連れていったターツは、「女」の柔らかさの対極の硬度をもって表される。



「もし時間世界の地図、霊の影の世界の地図があるならば、ドールンはその入口にある。というのは、ドールンへのドライブは、彼の家系の過去への旅、名前と死者への旅であった。世紀の変わり目の頃のティルブルクへの旅、毛織物、代理業、工場主への旅だった」(S. 392)。そのドールンにターツは住んでいる。父の家系への旅の先にターツがいる。

「彼はこの婦人の愛人のもとに何も想像できなかった。彼がアルノルト・ターツを見たとき、なぜだか理解した。そのように見える人間を彼は想像することができなかつただろう、なぜなら彼はそのような人間を見たことがなかつたからである」(S. 394)。このパラドクスの表現はまさにターツという存在の固有性を表している。

その特異性は殆ど戯画的に表現される。彼は10分早いと言って、テレーズたちを家の中に入れたい。「ダ・カーポ。その男は再びドアに立っている。誰もが10分年を取った」(S. 397)。彼はその10分の間、森の中をつまづきながら歩かねばならなかつたテレーズを冷然として見、「こんにちわ、テレーズ、君はなんてようすなのだ」と言い、それから初めてイニの方を見る。「ひょっとしたらそれは一つの眼のためだったかもしれない、その見られたものは、非難の余地なく機能するカメラによって撮影されたような感情をもった。そのカメラは、見られたものを吸い取り、飲みこみ、現像し、永遠に公文書保管所の中に所有した。その保管所は、そのカメラが精神を放棄したとき、はじめて存在しなくなるだろう」(S. 397)。この表現もまた「写真」のメタファーに分類されるだろう。

ターツの空間も鋭い輪郭を与えられている。

「その空間の中に支配していた秩序は、不安を起こさせるものであった。偶然的なものの唯一の形式は犬であった、犬は動いたからである。それは数学の方程式のような空間である、とイニは思った。すべてが均衡しており、すべてが整合していた。一つの花束、一人の子供、不従順な犬、10分早くやってきた訪問者は、ここでは想像できない災難を引き起こすだろう。家具は輝き、白く、カルヴァンの憎しみで満たされたモダニティで一杯だった。無責任な夏の光がリノリウムの上に幾何学的な輪郭を描いていた。この午後二度、イニに不安が忍び寄った。それはどんな感情なのか。まるで一瞬の間人が別の誰かになったかのように、自分の体に順応できず、痛くなるような別の誰かに」(S. 397f.)。

オランダはデ・スタイルの構成主義の生まれたところである。ヘリット・トーマス・リートフィルトの構成主義的な建築は、禁欲的な機能的近代性を表現した。それをカルヴァン的と呼んでいいのかどうか分からないが、その厳密性、抽象性は少なくともオランダのイメージの一つである。そしてイニは(ノートボームも)カトリックである。後にこの厳密な空間はテレーズの(カトリックの)ブルジョワ邸宅と対比される。

「彼の叔母の大きな邸宅のインテリアを描写するために、正しい言葉は、富ではなく、〈お

金のかかった) だった。革張り家具, チェスターフィールド様式の大型ソファ, オランダ絵画派の絵, 象牙製の肉欲的なルネサンス十字架, セーヴルとリモージュ陶器の一族全体, ペルシャ絨毯, 召使い。温める布のようにそのすべてが彼の周囲に巻かれた。〈どのように人間がこの過去の時代のガラクタのあいだで生きることができるのか, 私には謎だ〉とターツは、一度短い間彼らだけになった時、言った。〈いたるところに何かがかくついている、すべてを他の人間たちは美しいと思ったのだ。古代はくさい。すでにとっくにぼろぼろに腐ってしまった何百もの眼がそれを見たのだ。それは人が内部から古物商であるならば、我慢できるだけだ〉。イニはそれに答えなかった。これが軽蔑すべきものであったにしても、すべてが彼と符合している必要はなかった。彼はそれをとても居心地がいいと感じた。同時にそれは権力を、そして外部世界からの境界づけを表現していた」(S. 431)。

イニは、途上にいる存在である。現実世界に開かれている。ターツの観念的な厳密さを求める精神が、逆にイニの曖昧さ、可塑性を際立たせる。

## 父

「父」は息子を教えるものである。ターツはイニに、ウイスキーの味を描写させる。

「記憶。その謎めいた道。というのは次の5分間になが、すべてが起こらなかつただろうか。最初には、まったく文字通りに、一等最初のすぐ近くにあるウイスキーがあった。その後二度と存在することがないであろう、一杯のウイスキーが。次に、彼、ウイスキーを見、飲み、試すときに、人生の中で何度も考えるであろう、その男がいた。この男のことを、そして彼を通して叔母のことを、そして自分のことを。それとともにウイスキーは彼のマドレーヌとなった、人が霊の影の世界に降りていくために持ち上げなければならない、天窗をつかむこと。そしてふたたび彼らはそうして坐るだろう。直立したその男、一方の恐ろしい眼を彼にまっすぐに向けて、ソーダ水を注いだ手は、まだその所有者の近くの憩いの場へと戻る途上だ。彼の叔母、頭を後ろに傾け、あてもなくさ迷ううつろなまなざし、広げられそれから閉じられた脚を伸ばし、あまりに硬くてあまりにまっすぐな椅子の上で。悲しみの聖母 *Mater dolorosa*。彼は自分を見ることができなかつた」(S. 398)。

「数千のグラスのウイスキーを彼は後に飲んだ。モルト、バーボン、ライウイスキー、最良のものと最悪のもの、ピュアーに、水とともに、ソーダとともに、ジンジャーエールとともに、そして時々、突然この味の感覚が再び戻ってきた。煙、そしてもちろんハシバミ。／彼は後に考えた、人生におけるどの重要な時点においても人は、一人のアルノルト・ターツを持たねばならないだろう、最初の不安のとき、最初の屈辱のとき、最初の女のときに人が何を感じ、何の匂いを嗅ぎ、何を味わい、何を考えるのかを正確に描写することを要求する



ターツを。それもその瞬間にすぐに要求するのであって、そうしてその記録は法的に確定力のあるままでとどまり、後の女や、不安や屈辱によって偽造されることができないのである。まさにこの最初のときの名前を挙げての確定 ―煙とハシバミの実― が、あらゆる後の体験のためにリードするだろう。というのはそのときそれらの体験は位置を測定されることができるからである。とりわけそれらが最初のときから離反する程度に従って正確に、永遠に検定されているその最初のときから離反するに従って。その時人は、それらがこの最初の時を凌駕しているか、あるいはそれに劣っているか、それらがまだ煙であるか、ハシバミであるかを正確に確かめることができるだろう。もう一度アムステルダムを初めて見ること、もう一度、人が何年も一緒に生活した愛人の中に入ること、もう一度最初の女の胸に触れ、なで、それに所属する思念を何年間も保持すること、そうしてすべての後の出来事、すべての後の形式が時と共にこの最初の感情を裏切り、否定し、埋めることができないように。アルノルト・ターツは少なくとも一つの知覚を彼のために検定した。他のすべての感覚知覚は彼の思い出の後の層の中で取り返しがつかない形で消えてしまった。混ぜられ、歪められて。最初の胸をなでた彼の手、最初の死んだ眼を閉じた彼の手が、彼の思い出を、彼を、この最初の胸を裏切ったように。その手がもっと老い、歪み、最初の老いのしみを見せ、肥大した脈を獲得することによって。傷んだ、減ぼされた、経験のある45歳の手、死の早い前触れ。その中には以前のもっと狭い、もっと明るい、用心深い手が誤解の余地なく、見出すことができない形で溶解していた。一方、彼はそれを〈私の手〉と名付けていた。それを彼はこれからもするだろう、後の生きた手がその死んだ手を彼の胸の上に置き、一つの手を、かつてそれにたいそう似ていたもう一方の手の中に重ねるまで」(S. 399f.)。

知覚の画定、過去を呼び起こす触媒としてのウィスキーの味の描写、それが、父が教えることである。それは事柄を過不足なく、ぴったりと捉える言葉を見つけることである。それをノートボームは「煙とハシバミ」と表現した。「形而上学」が小説の雑多な世界の中に蒸留され、純粋なアルコールとなる。そのエッセンスのような表現である。

父は教えるが、息子はそれを必ずしも受け入れるわけではない。ターツに対してイニはアイロニーを失うことはない。「君は何になりたいのかね」というターツの問いに対して、イニは「わかりません」と答える。「本来彼は確実に知っていた、彼はけっして何かになりたいと思わなかったし、またけっして何かにならないだろう、と。世界はすでに何かであるところの人々で一杯であった、そしてたいていの人間はそれで幸福であると感じていなかった」(S. 400f.)。

それはイニ、息子の位置である。たとえそれがどんなに見事な、完成されたものであれ、何かの形式に身をゆだねることが出来ない。観察者の場を離れない。

「〈君は部下になるにはふさわしくない〉 … 〈部下〉。その 5 綴りの言葉はこの声にあつては、アクセントの、5 層に段階付けられた、そのつど分離されて包装された服用量を有していた。この男がこの午後に言ったどの言葉もこの空間から消えてはいなかった、とイニは思った。手でつかむことのできるもののようにそれらは家具の間のどこかに積み上げられていた。逃れることは存在しない」(S. 403f.)。

それがターツである。彼のすべてが鑿で刻まれたような明確な輪郭を持ってそこにある。ノーテボームは彼が幼年期に亡くした父をそのように表象した、と思う。そして「父」ターツはかつての公証人として、イニが再びウィントロップ家の一員となるように配慮するのである。

## 儀式

しかしターツは「父」であるが、同時にまた「儀式性」を表している。「儀式」は曖昧な概念だが、それは何よりもキリスト教との関連で画定される。

ターツは厳密に規定された日課に従って本を読む。

「揺るぎのない静寂がそのバンガローに降りてきた。イニはそれがどのような種類の静寂であるか知っていた。彼はそれを以前、トラピスト修道院で、知覚した。ドアをたたく音、がたがたいう音、廊下で重い衣服の弱められた衣擦れ、まるで雪があるかのようなとても低い足音。それから修道院教会への入場、30 分間の共同瞑想のはじめとして乾いた、木製のたたく音。石になったようにして彼は訪問者の廊下から、冷たく高い内陣のベンチの白い、死んだように静かな姿を見下ろした。彼には到達できない考えに没頭している、老いた男たち、若い男たち。〈…〉いま彼はふたたび修道院にいた、ワンマン修道院。この男は僧であり、修道院長だった」(S. 404f.)。

私にとって興味深いのは、ノーテボームの場合、彼が過ごしたカトリックの寄宿舎での生活のイメージが現れることである。ここでは「修道院」という概念が登場するが、それはカトリック修道院制度よりむしろ、精神が取る一つの形を表している。精神（あるいは宗教）とそれが具体的に取り形式（儀式）がこの小説のテーマである。ターツの「儀式」を構成しているのはその規律的な日課と抽象的な空間であった。さらに狭い意味での「思想」（サルトル）が加わるが、それは、森の中を散歩する時のターツの語りの中で表現されている。

「男の居合わせていることはもう知覚可能ではなかった、ただ、彼の前のどこかの、枯葉のせわしいさらさらという音によって推測された。〈サルトル〉、それは、彼の前の波打つ灰色の髪、かなり小さな頭蓋骨、セーム革のコート、マンチェスター綿布のズボンとロシアンレザーの靴の中から聞こえてきた、〈サルトルは、神が存在しないという事実から最終的な

帰結をひかねばならないと言っている。君は神を信じるか〈…〉〈いつから信じていないのだ〉ともみの木と黒イチゴの茂みが尋ねた」(S. 406)。

それに対してイニは思う。

「彼の母の、とても敬虔なカトリック教徒との再婚が彼をこの宗教と直接的に接触させた。しかし彼を魅了したのは、劇場的な外面だった、歌、香、色がとても気に入った、信じることなく修道院に行きたくなくなったほどに。カトリックで彼が気に入った他のことは、他の人々がそれを堅く信じているという状態だった。寄宿舎学校で彼は毎朝6時に、半ば白痴的な神父(Pater) Romualdos のミサの従者として活動した。その神父は授業をするには年を取り過ぎており、時々監督をすることが許されていた。祭壇の前でげっぶを出すその男にとって、実際に、彼が〈ここにすなわち私の血の聖杯あり hic est enim Calix Sanguinis mei〉とささやくとき、少しの赤ワインが突然、血に変わり、〈信仰の神秘 *mysterium fidei*〉の言葉で、すでに二千年前に死んだ男の血となることは、ぴったりだった。その血を、この金欄で包まれた老いた男、祭壇の縁にしがみついているその男は、すぐ後でこの〈記憶のために〉の言葉のために飲み干すだろう。その血の最後の跡をイニは、彼が小瓶の水をその杯の金の底に注ぎ入れることによって取り除くだろう。その杯は震えている、斑点のある老人の手で彼の方に差し出され、その杯の中にはまだ数滴 一神の血、人間の血— が残されていた。彼はそれを言うに言われぬほど神秘的であると思った、しかしそれゆえに人はそれを信じる必要はなかった。彼がこの薄暗い寒い朝の時間に係り合いを持たねばならなかったこの男、小さな畜殺台の前で金の刺しゅうされたヒキガエルのようにあちこち回転しているその男、その彼がそれを信じているならば、その時、それは結局、起こったのだ、たとえこの信仰がただこの半ば軟化した脳の中で起ったにしても。その脳はラテン語の格言を無責任に乱雑にさいころのように振った、たとえイニが甲高い少年の声でこの脳の所有者を神学的に文句なしの秩序に向けさせなければならなかったにしても。しかしそれだけではなかった。それはまた、捧げもの、犠牲を捧げるという観念だった。彼とその老いた僧は彼らの奇妙な二人性の中で—一人は16歳、もう一人は80歳以上だった— 神秘によって周りを取り囲まれた、古風な儀式に従事していた、それらの儀式は彼、イニに深く時の中に沈み戻るといふ感情を伝えた、この惨めな新ゴシックの裏庭地区に囚われて座っているという感情ではなく、昔のギリシアの風景の中、ホメロスの世界に達したという感情を伝えた」(S. 407f.)。そしてその老いた神父は突然、倒れる。「上げられた手は杯から離れた、ワイン、血がミサ用服の上を伝わり、祭壇服を伝わり流れた、祭壇服を、僧の痙攣した手が一気に引っ張った。ろうそく、ホスチア、パテナ(ホスチアの皿)と一緒にひきはがしながら。大きな、撃たれて死んだ動物の叫び声が石の壁に勢いよくぶつかった。その男は、まるでそれを引き裂こうとするかのように、

彼のミサの礼服を指で触った。それから彼は 一ゆっくりと、今なお叫びながら— くずれ落ちた。彼の頭は杯にぶつかり、血が彼から噴き出た。彼が既に死んでいた時、彼は今なお血を流していた。赤が金の緞子の間の輝く絹の鳥の上の赤と混ざった。どれが何であるかは、もう認識できなかった。ワインは血になり、血はワインになった」(S. 408f.)。

小説のテーマから離れても、このような細部の描写は、日本人である私には想像できないものである。ただそれだけでも面白い。かなりサルカスムとともに語られるこの「儀式」はイニが「儀式」に対してもつ矛盾を良く表している。ノーテボームは厳格な寄宿舎学校で教育されたのだが、信仰を持っていない。だが「儀式」への志向は残った。内容・信仰ではなく、形だけが残った。信仰を欠いた儀式。それは明らかにカルヴァンのターツも同様である。ターツは信仰のない修道院、無神論の修道院を形成している。ここで興味深いのは、信仰のない「形式」は、それ固有の力を持って、その器の内容を、つまり「信仰」を求めさせることである。内容と形式は互いに独立した概念ではない。相互に規定し、必要としているのだ。

ターツの森の中での語りは、自然の音、動物の声と混ざり合う。

「神学の議論が飛び交った。二羽のアトリがトリエントの公会議について語った、カッコーは神学大全を確認した。キツツキは 31 条のテーゼの真実を確認した。スズメはもう一度ブルーノに火刑の判決をくださった、スピノザ、キジ、カルヴァン、カラス、スペインの神秘主義者の理解できないくうくうなく音、ちゅんちゅん鳴き、があがあ鳴き、ごぼごぼ音をたて、くっくと抑えた音をたてながら、鳥たちは森と野原で教会の歴史の血みどろの二千年を歌った。〈…〉二人の信仰のない者たちがここで菩提樹の下で走り回っているこの瞬間でさえも。サルトルで頭が一杯の男と、無で頭が一杯の男と」(S. 409f.)。

ターツの言葉に対する距離はこのように表現されているのである。アイロニーがイニの立場である。

## 形而上学

ターツの世界は、反の世界である。無神論、反時代、反世界、反世俗。それを彼は次のように述べる。

「〈君は山を見たことがあるかね〉。イニは否定した。〈それでは君はまだ生きたことにならない。山々は地上における神の荘厳さだ。少なくとも私はそれを信じる。—ただ高山の上で— スキーヤーは他の人間たちと区別される。彼は高い、彼は孤独だ。ただ二つのものが存在する。つまり彼自身と自然だ。彼は他の世界に住み込み au pair 生活をしている〉。〈…〉〈人間のことを私はたいして評価していなかった。たいていの人間は意気地なしだ、順応主

義者で、頭が混乱しており、お金のハイエナで、互いに汚しあっている。それを君は山の上では我慢する必要がない。自然は動物と同様に清潔だ。私はこの犬を他の人間すべてを合わせたよりもっと愛している。動物は整然としている、good for them。戦争が終り、私たちが、何が起こったのか —裏切り、飢え、殺害、絶滅、すべて人間の仕業— を知ったとき、私は人間を本当に軽蔑した。個人ではなく、殺し、嘘をつき、不安に満たされて自分の死に向かって走っていく種を。動物はストレートだ、動物はスローガンを持たない、だれか他の人のために死なない、彼らに属しているもの以上のもののために死なない。近代の虚弱児社会の中でつづきの順位（序列）はタブー視されている概念だが、しかしわれわれが発展史の中に現れる前に、序列は優れた効果をもっていた。私はもう充分だった。私は公証人の仕事を放棄し、背後のすべてを焼却した。妻と関係を断った。すばらしい。私はカナダに身を移した。そこで私はロッキー山脈の火事の見張りになった。何ヶ月間も私は山の頂に坐っていた。私の下の至るところに無限の森の風景があった。それを私はじっと見つめた。私が煙を見たとき、私は報告しなければならなかった)」(S. 410f.)。

「〈ある日私は思った。その —そのように言いたいのだが— 客観的な荘厳さによって神の観念を呼び起こす風景は、もちろん同様にその不在を喚起することもできる、と。神は人間の姿の比喩に従って作られた。ある時間の後で誰もがそれに気づいた。決して何かに気づかない奴らを除いて。しかし私は人間を軽蔑している〉、ここで声の調子をわずかに高めて。それはこの言葉に一つの刃物で切り取られた独立性を与えたので、それは解き離されて、内容を詰め込まれて、彼らの間の空間の中にぶら下げられたままとどまった、〈自明なことに私の人格も含めて。私自身があますことなく嫌なのだ。どんなに私が山や犬を愛しても、私は犬や山の姿の神を想像することができなかった。そうして神の考えは私の人生から消えていった。傾斜を滑り谷の中に降りていくスキーヤーのように。君はそれを想像できるかね。遠くから見るとそのような人間の姿は黒い、それは白いカタツムリのカリグラフィーのように刻まれる。そこに描かれる、長い優美な運動、神秘的な解読不能な文字、そこにあり突然もう存在しない何か。その人物はまなざしから消えてしまい、書きながら自分を使い果たしてしまった、そしてその何ももう残されていない。神もまたそうなのだ。私は世界ではじめて孤独になった、しかし神は私に欠けてはいなかった。神はひとつの回答のように聞こえる、それは、そんなに頻繁に回答として用いられるその言葉の有害なところなのだ。神は、問いのように聞こえる名前をもたねばならなかっただろう。私はこの世界で孤独であることを求めなかった。それを求めるものは一人もいない)」(S. 412f.)

このような言葉は小説の中では時代・世界のカテゴリーに分類されるのだろうが、さながらノーテボームの名調子を感じる。この世界、時代での「居心地の悪さ」の表明だろう。そ



してこのような言葉をターツが語ることが出来るのは、ターツの人物造形、背景の描写が綿密にされているからだ。

この小説は、このような硬度のある言説に対して、イニの脱力的な言説が対置される形で進行する。それもここでは、サルトルに対して、学校時代にパリ帰りの学生が実存主義について語った時、持ちこまれたゴロワーズとカマンベールの形で語られるのである。

「人が投げ込まれている意味のない世界、もし人が自分自身からそれに意味を割り当てなければ、無意味なものであった、現存在。それは今なお教会のように聞こえた、それには胡散臭い、ほとんど知覚されない、殉教の匂いがくっついていて。それはゴロワーズの味や匂いによって表現されるのが一番だ、とイニは考えた。その味は、強く、苦く、他の何とも比較されえない。気分には何か危険なものを持っている匂い。苦く小さな棘とともに舌に引っかかっているタバコ、ビリヤードのチョークのように青い、この不恰好なパック。それでもって人は不安を煙のように吐き出すことができる。しかし彼はこの言葉をこの男に対してけっして言わないだろう」(S. 414)。イニのアイロニー的な位置が見事に表現されている。だがそれだけではない。

「このスキーの名人はいったい哲学でもって何を始めるのだろうか。彼は何をこの小さな、斜視の学者と関係していたのか。その学者の写真は今定期的に新聞や雑誌に現れていた。思考、それは一体何なのか。彼はたくさん読んだ、しかし彼が読んだもの、彼が見たもの、映画、絵画、それを彼は感情の中に移し変えた、そしてそんなふうになりに言葉で表現されることがないこの感情、この感覚、印象や観察からできたこの形のない何かは彼の思考法であった。人はその時言葉と一緒に身をくねらせることができた。しかしその表現されないものは今なお優位を保っていた。後にも、明晰で正確な答えを持ちたいと思う人々、あるいはそれを与えることができるかのように振舞う人々との交流においてある種の不快感が現れるだろう。すべてのことにおけるまさに謎めいたものが面白いのだ。そのとき人は秩序をもたらそうと試みてはいけないだろう。それでも人がそれをするならば、不可避的に何か失われるだろう。人が正確さと方法でもってそれについて考察することによって、秘密はもっと神秘的になることができるということを彼はまだ知らなかった。彼は彼の感情のカオスの中に在宅しているように感じた。それをきちんと清潔にカードボックスの中にカード記入するためには人は成人していなければならないだろう。しかしそのとき人は突然、確定され、完成し、本来もうすでにすこし死んだのだ」(S. 414.)。

これはイニの位置である。自分を宙ぶらりんにしておくこと。一つの回答を求めないこと。自分を開いたままにしておくこと。「途上である」ことに耐えること。それは作家の立場である。それは森の中でターツの声を聞きながら、イニが「いったいどれくらい多くの緑の色

があるのだろうか」(S. 415) と思うことに示されている。あるいは、ターツがサルトルについて語る時、「この男には、一緒に語ることでできる人間が欠けている」(S. 416) とイニは思う。

イニはターツの存在に圧倒されながらも、彼を観察している。その厳格な生の形式化は不安の現れである。

「時は —それをイニはあの日に学んだ— アルノルト・ターツの人生においてすべての物事の父である。彼は一日の空っぽの危険な平面をいくつかの境界を付けられた分野に分けていた。どの分野の始まりと終りにも据え付けられている、境界の印が、彼の一日を容赦なく、厳格につかんで、規定していた。イニがもっと老いたとき、彼は、アルノルト・ターツを統治していた不安が時間ごとにその 10 分の 1 税を要求していたことをきっと知っただろう。我々が人生の時に歩いていく、あの目に見えない要素の中の、一時間、半時間、4 分の 1 時間、恣意的に記された断面。それはまるでだれかがこの無限の荒野の中で定められた一つの砂粒に関して、それがただここで食べ読むことができると命じたかのようにだった。この命令によって画定されたどの砂粒も強制的な力でもってそれに資格がある活動を要求する、そして 10 ミリ離れるとすでに仮借のない運命が支配している。10 分遅すぎたり早すぎたりして来るものは、歓迎されない。オブセッションによって駆動される秒針は最初のページをめくり、ピアノの最初の楽譜を鳴らし、今のように時計が 7 つ打つ音でゲーラシュの鍋を火にかけるのだ」(S. 419)。

形式は、不定形な内容を型にはめるものである。漠然と流れる生を形にする。その時初めて生は可視的になる。だがそれは制限である。この永遠の矛盾は、後にイニの「ディレッタントイズム」の考察に続いている。この小説は観念小説である。観念がこのように具体的に表現されていることが私に強い印象を与えたのだ。だが時の形式化は不安の現れであるだけではない。修道院においても厳格に日課が決められている。厳密な日課に従って生活したカントにとって、良き習慣は道徳と同義であった。モラルはつねに当為 Sollen として「命令」される。私が言いたいのは「超自我」としての父のことである。

「アルノルト・ターツは、〈父を持たないとき、それはどのようなのだ〉と尋ねた。この男は、人が答えを与えることができないことを質問する。だから彼は答えなかった。父を持たないこと、それは正確に、人が何か他のものを持たない場合と同じことだ。それについて何も言えないのである」(S. 420f.)。

イニの父は女中と関係し、後に彼女と結婚した。「母親は、その助けによって大人たちが世界を彼らの趣味に従って整えるあの神秘的な陰謀によって消えた」(S. 421)。イニは、父親のもとにとどまった後で、母親のところに送られた。「この冬の終りに父は Bezuidenhout

の空襲によって死んだ。その知らせは少年を大きな誇りで満たした。いま父はほんとうに戦争に参加したのだ」(S. 421)。「父の墓を彼は見たことがなかった。そして彼が初めてそれに興味を持った時、墓はもうなかった。それは平らにされた、と誰かが言った。〈除去する〉という言葉に対するまったく特別な変種。そしてそれが彼の記憶に残った。彼の父は除去された。黄ばんだ戦争写真の上に彼は、はげになり始めていて、鋭い顔立ちをもったひとりの男を見た。中世後期からの悲しげな書記。しかし母は、彼が酒場のテーブルの上でジプシー音楽に合わせて踊ったと語ったことがある。それが彼の父の思い出だった。そしてただ一つの結論が存在した。つまり彼の父は本当の死者であった」(S. 421f.)。

父は不在であるがゆえに、さまざまなとろに現れる。小説を一つのモチーフに還元することはできないが、「父」は優勢なモチーフの一つである。

だが、イニは何かのイメージ・思考が示されると、必ずそれを異化する。ターツ=父もそうである。

「それが、彼が世界で一人であることを意味しているならば、それは真実だった。彼もまたその見解だった、そしてそれは彼に素晴らしく気に入った」(S. 422)。学校時代の同級生の両親の姿。「それと彼はなにも関係がなかった、同様に彼の人生の中に迷い込んできたこの男とも。彼は彼らに立ち入りを許さなかった。結局その結果になった。それはまるですべてがスクリーンの上で演じられているかのようにだった。彼はなるほど観客席に坐って注意深く物語を追っている、とりわけ、ここの男のように心を奪うような俳優が演じているときには。しかし本当にそこにいること、それを彼はできなかった。彼はたとえ俳優に共感したとしても、ただ一人の観客のままだった。人がなにも言わなければ、物語はひとりでにやってきた」(S. 422f.)。「今、それはアルノルト・ターツだった、その世界への関係が挫折した男、それゆえに高い鋭い調子で世界を退けた男だ、まるで彼が世界の命令者であるかのように」(S. 424)。

このターツの孤独は何よりも彼の住む家によって刻印されている。

「彼らが庭の道を下っていくとき、イニはその家を振り返って見た。彼のその家での滞在の間よりもっと多く、彼は、その男が自分に有罪の判決として下したそのファナティックな孤独を感じた。あらゆる可能な形の苦悩があった。後の再構成がもたらしたように、イニがかなりの苦悩を後にしたに違いなかったにしても、彼の年代の人間に、苦悩の〈生の状態 *Etat cru*〉がいまほど明らかにされるといことは奇妙なことであった。事件としての苦悩ではなく、自分で求めた、もう撤回できない罰としての苦悩。もう撤回できない、なぜなら他のだれもそれに関与していないから、そんなに羽のようにスポーティに彼の前を歩いていくこの男は世界記録をポケットに入れている運動家のようにまったく誤解の余地なく自分



に関して自分の中で苦しんでいた。当時それを正確に説明することはできなかったが、イニは、彼がここでは死の悪臭と、人が一度一ひよっとしたら不幸に、あるいは単に不注意から一そこに迷い込めば二度と戻る道を見出せない、そのような領域と関係しているのだと知ったのだ」(S. 425)。

## 死

ターツの住むドールンは冥界として想定されていた。イニがターツの家を外から見て思うのは「死」である。ターツの室内は、幾何学的な美しさを持っている。それは純粋な形式だが、生はそのような形式には収まらない。生は動き変化し流れあふれる。生が儀式化されれば、それは本来のダイナミズムを失う。いずれにせよ「儀式」の構成要素として「死」が考察されなければならない。「死」は「儀式」が本来的に参照指示するものである。

ターツの家を離れた後、イニはその出会いを振り返る。

「私は地上での私の時間を終わりまで生きる、それは他に仕様がなからだ、それは正しい」(S. 416) とターツは言う。たとえ無意味にこの世界と時代の中に投げ出されたにしても、そこから自分の意志で出て行くことはしない。もちろんそれはターツにとって逃避であり、精神の弱さを意味するからなのだが、ターツには、キリスト教的な自殺のタブーが有効なのである（一方、イニは、ジタの駆け落ちの後、自分の星占いに従って自殺を試みる）。そしてターツが考える死の形は次のようなものだ。彼は冬のスイスに小屋を借りる。

「私は、所有者がただ夏の間だけ住んでいる、人気のない農家を借りる。人間たち、そこの人々もまた虚弱にされており、甘やかされている。だれも一人であることはできないし、そう望みもしない。彼らは冬と孤独に敢然と立ち向かう心の準備ができていない。最初の雪が降るとこの谷は完全に遮断されてしまう。ただスキーで行くことができるだけだ」(S. 427)。

彼は二週間ごとに、小屋からスキーで食料を取りに行く。途中で転倒し、骨折すればどうするか。

「もちろん凍死する、とイニは思った、その時来た答えを覚悟していなかった。〈すると私はアルピニストの緊急信号を上げる〉。あらゆる前もっての警告なしに、その招待した人は〈助けて〉と叫んだ、まるで部屋の中にその宿命の谷の中と同じぞっとするような静けさが支配しているに違いないかのように、魔法で呼び出すように手を上げ、黙って、しかし口を開いて3まで数え、もう一度叫んだ、〈助けて〉、1, 2, 3, そして〈助けて〉。彼の顔はその際に赤くなった。まるでそのガラスの眼が叫ぶことの恐ろしい力によって押されて空っぽになったかのように見えた。イニは自分の前の、その歪んだ、助けを求めて叫んでいるカーニ

ヴァルの仮面を眺めた。彼はそんなに無防備な顔を見たことがなかった。彼は恥ずかしさと憐れみを感じた、彼が他の人々の親密な行為の際に感じる恥ずかしさであり、すでに何年も折れた脚で氷結した、見捨てられた谷に横たわり、それを伝えることのできる誰も持っていない人に対する憐れみだった。〈私はそれをいつも三回する、もう力をもたなくなるまで、その間に3まで数える。その響きは山の中でとても遠くまで伝わるだろう〉。〈それを聞く誰もいなかったら?〉。〈その時この響きは存在しない。ただ私だけがそれを聞いている。それはしかし私のために規定されているのではない。もしその響きが決定されている未知の誰かにそれが届かなければ、その響きは存在しない。その後すぐに何も無い。人は硬くなり、感覚は混乱し、人はもう呼ぶことはなく、死につつまる〉。誰かがイニ・ウィントロップに自分の死の詳細をまったく正確に話したのは、それが初めてだった。その死は数年後に起こることになった」(S. 429f.)。

「死」の詳細がこのように語られることはあったのだろうか。誰もが自分固有の死を死ぬ。死の個別性をノートボームはこのように表現したのだと思う。

#### 晩餐の儀式

この出会いで、ターツの存在は、精密な輪郭を与えられ、刻印される。それは静止した結晶のようで、これ以上付け加えることを持たない。次の場面はターツが公証人の資格でテレーズの邸宅に赴き、イニが凍結されていた遺産を手に入れるように手配する場面である。物語的には、イニの身分の保証とペトラとの出会いがあるのだが、そこで一番面白いのは、ターツと、イニのブルジョワの伯父のいとこであるカトリックの枢機卿との晩餐の際のやり取りである。私は、そのような枢機卿とカルヴァンの、極め付きの無神論者が食事の時のような会話をするのか、(たとえそれが虚構であっても)想像できない。それを描く(虚構する)ために、ノートボームはこの場面を挿入したとさえ思う。ノートボームを読むまで私は、オランダ人は殆どみんな、カルヴァンの、厳格なプロテスタントであると思っていた。でも実際にはかなりの数のカトリック教徒がいる。私はカトリックとプロテスタントの差異について殆ど教科書的な知識しか持っていないのだが、ノートボームを読むと、カトリックであることがもっと具体的に了解される。

「二つの皮膚とひとつの眼をもった男、運命の道具のように彼の人生の中に入ってきた人、彼に現れた人。イニはこの〈現れた〉の言葉に、特別な意味を与えずにはいられなかった。カトリック教徒にとって〈巡礼の地〉FatiMa とルルド Lourdes 以来この言葉に固有であった意味を」(S. 426)。イニは信仰を持っていない。にもかかわらず、カトリックの信仰概念は、日常のレベルで妥当している。カトリックの「儀式」志向は生き続けている。

そのカトリック性は、ターツの登場によって戯画的に表現されている。ターツはテレーズの邸宅を見て言う。

「ここにあるのはオランダのバイエルンだ。カルヴィニストはここにはふさわしくない」(S. 432)。〈…〉「大きな川の北側ではすべてのオランダ人はカルヴィニストだ。多すぎる、長すぎる、高価すぎる、それは我々にとってなんでもない」(S. 433)。

そのターツに聖職者は「神」談義を挑み、それをイニは酔っ払いながら聞いている。

「〈あなたは母なる教会を離れられたとか、ターツさん〉と侍従は尋ねた。〈…〉〈私もまたただ人間の耳を持っています。あなたが侮辱できるのは、神の耳です〉。ターツはなにも言わなかった。イニはそれを想像しようと試みた。神の耳。誰知ろう、ひょっとしたら神は、全体が耳なのだ、宇宙空間を漂っている、大理石製の巨大耳。しかし神は存在しなかった。ただし教皇は存在している、それは確定していた。そしてこの珍しい鳥は侍従、秘密侍従であった。しかしそれは本来何か。彼自身が秘密であるならば、それを誰も知らないだろう。そのとき彼はひょっとしたら秘密の小部屋の主であった。ヴァティカンの中の秘密の部屋、ピウス 12 世 Pius XII の白い、同様に鳥のような姿が滞在し、ここに入り、この男が立ち入り許可をもっていたところ」(S. 439)。

「〈神の子の罪の犠牲のことを言っておいでかな〉〈…〉〈あらゆる宗教は、常に最初の問いであるところのいつも同じ問いに対する、偽りの回答です、つまり我々はなんのために地上にいるのかという問いへの〉。〈神に仕え、それによって天国に入るために〉、誰かが一つのボタンを押したかのように叔父は言った。大きな胸がふたたび現れ、グイヨンに Probe Ser-cial を小さなグラスの中に注いだ」(S. 440)。

「それであなたは生きることができますか」と枢機卿がターツに尋ねると、「この日初めてイニはターツが笑うのを見た。灰色のトーンは少し彼の顔から消えた。〈それで私はすこぶる快適に生きることができます。いつもではないが。大地は、石、植物、星、すべてはそれで生きている。私は、〈…〉、ふむ、全ての現存しているものの仲間だ〉。〈…〉〈私は —我々みんながそうだが— 万有の仲間だ。人間の尺度がなにも意味していないこと、現実において何もより大きくもより小さくもないということから出発するならば、我々は、人間も物も、同じ運命を持っている。我々は一つの始まりをした、そして終りをするだろう。そしてその間に我々は存在したのだ。ゼラニウムと同様に万有も。万有はあなたよりもすこし長く存在するだろう。しかしこのわずかの違いは、あなた方が互いに相違していることをもたらさない」(S. 441f)。

このような言葉に私はノーテボームの肉声を聞く。この言葉は、イニが初めて会った時のターツの言葉と矛盾するように見える。もちろん神の否定を述べているのだが、一方、世界

は肯定されている。とにかくこの論争の途中でテレーズが泣き出し、ターツが彼女を少しも愛していなかったと眩き始め、ターツが彼女を叱ると、酔った伯父がターツに殴りかかり、その拳を聖職者が受ける。テレーズはペトラによって連れ出され、伯父は酔いつぶれて横たわっている。そして聖職者は言った。

「〈ターツさん、このはかない地上で我々が一致を見出すのはただわずかのものだけでしょう。しかしそれについては、我々は一致しています。つまり私のいとこは、模範的なポートワインでもてなしています〉。彼らはワインを掲げ、互いの健康のために飲んだ。イニは深い暗い味が胃の中に押し寄せるのを感じた、誘惑的で、神秘に周りを取り巻かれて。〈…〉〈聖 Cyprianus はあなた方ではなく、私に教えました、—それは 2 世紀のことです—、教会の外には救済はないと〉」(S. 443)。「〈閣下、私は最初に、あなたに感謝をする義務があります、あなたは私のために決められていたパンチを受け止められたのですから。あなたは、私が他の頬を差し出すことができた前に、私の一つ頬だった。あなたは一つの力強い頭蓋骨をもっておられる、そしてあなたの思考能力は少しの損傷も受けなかった、というのは、あなたの思考はいつも同じ教義にもとづくルールを走っているのです。昔から走られていたルールの上を。しかしあなたが理解していないのは、私がすでにそのルールの外にいるという状況です。私はあなたの列車がすでに数千回も走りすぎていくのを見ました。私には灰色の白内障のように見えるあなたの視覚の中では私は有名な無垢の、迷った者でしょう〉」(S. 444)。

「〈信仰の神秘〉と Teruwe 閣下は言った。〈私の帽子の神秘〉とターツ。〈私は今私の洗礼を受けていない犬を見つけることにしましょう〉と言って立ち上がった」(S. 446)。

聖職者と無神論者は、「神」に対して正反対の立場をとることによって、互いに親和している。そしてイニは、彼もまた酔っているが、酔ったブルジョワの伯父に対しても距離を取っている。中間というよりも、どこでもないところにいる。この場面の真に超越した次元にいるのは、すべてを面白がっているペトラである。「岩」であるから。様々なテーマ群が集中的に、アイロニーをこめて、見事に表現されている。

#### 4. フィリップ・ターツ

##### 鳩

物語はターツの死で終わることも可能だろう。だが、本来、物語は決して終わらないものだ。物語は、ある事件の因果関係を語ることで、とりあえず「終わる」。だが事件の因果関係は、かなり限定された要素の流れを再構成したものである。私達はただ終わるものだという観念を持っているだけである。そしてその観念に従って、物語は終わる。終わらない物語

は物語ではないから。

『儀式』の場合、その因果関係の流れはもっと明白である。ターツには息子がいた。そしてその息子は、父の「儀式」をもっと徹底して考え、実行する。「儀式」がもっともその形式性を露わにするのは、「死」である。ターツにはまだキリスト教的な自殺のタブーがあった。息子のフィリップにはそのようなタブーはない。彼の儀式は、まっすぐに死に導いている。

先に進み過ぎた。その論理の性急さは、ノーテボームの文学の理解の助けにならない。この小説の中の恐らくどの細部も「形而上学」に向けられている。恐らくと言うのは、私はそのすべての細部を、その「形而上学」の志向性に関して解読できないからだ。だが、解読できる細部が存在しているので、小説は、すべての細部が形而上学（「儀式」と言っても良いだろう）を志向していると推測させる。そう思わせるように、この第三部は、鳩の記号を送りこむ。だが、それらの細部 一つつまり本来は「形而上学」を志向しているもの— がそれ自体として緊密に形成されていて、テーマとの関連を見失わせる、あるいはテーマを二次的なものと思わせるのだ。この迂回あまりにも魅力的で、本来のテーマは口実であるように見えるほどだ。ノーテボームは何よりも言語を用いて語ることをしたいのであり、テーマは言わばどうでもいいのだ。そしてこの「フィリップ」は、その表現の可能性の観点では必然的である。テーマ的には、少しの変異を持った反復であるのだが、語り（表現の）観点では、新しい領域である。

だから私達はフィリップに出会うまで長い「迂回」をしなければならない。

「イニ・ウイントロップは思った、何度も繰り返されるかなり無意味な現象が、世界とは人がいい加減に出会うのが最良な唯一の宇宙である（なぜなら生を耐え抜く他の可能性はないから）ということの証明を提供しようとしている、そのような日があると。人が何度も不具の人間に出会う日があった、盲目の人々の日、左の靴以外に、道端に横たわっているものを何も見ないそのような日があった。それはまるでこれらすべてが何かを意味しようとしているかのように見えた。でもそれらはそれをできなかった。それらはただぼんやりした不快感を残した。まるでまだどこかに一つの暗い、世界に関する計画があり、その計画にぎこちない仕方で、彼の現存在についてひとつの推測を伝えるのが成功するかのように。彼が、彼がそのような人間がいることを知らなかった、フィリップ・ターツに出会うことになった日、それは三羽の鳩の日であった。死んだ、生きている、そして気絶した鳩の」(S. 463f.)。

イニは40歳になった。

「あの輝く6月の朝、状況はそのようなものだった、Heerenstraat から Prinsengracht へ行く橋の上で一羽の鳩がまっすぐに彼に向かって飛んできた、まるでそれが彼の心の中に穴を開けたいかのように。その代わりに鳩は、Prinsengracht から来た車にばしんとぶつかった」

(S. 464)。

鳩は聖書の象徴学では、精霊である。「その霊は、マリアのところに行くためによりにもよってこの姿をとったのだ」(S. 465)。彼は鳩が好きではなかったが、その死んだ鳩は一人の女の子を彼にもたらした。彼は彼女と一緒に、鳩を埋葬することにする。

「彼は彼女の速く走る音を聞いた、そして彼女が自転車の荷台に飛び乗るのに気づいた。ショーウィンドーの中に彼は、幸福のように見えるものの束の間の反映を見た。女性用自転車の上の中年男、荷台にジーンズと白いスニーカーの女の子」(S. 466)。40歳になったイニが持つ幸福のイメージはこのようなものである。

「このミニマルな死におけるなにかが〈…〉彼らと一緒にした。いまなにかが起こらねばならなかった。〈…〉彼は Nassaukade に沿って自転車で走った。女の子は重くなかった。彼の奇妙な人生において彼の気に入ったのはそれだった。朝起きたとき彼は、女の子を荷台に乗せて自転車で走り回ることを知らなかった、おそらくしかしこの可能性があるということを知っていた。それは彼になにか克服することのできないものを与えた、と彼は思った。彼は彼らに向かってやってくる車の中の男たちの顔を見た、そして彼は、彼の人生、この生のナンセンスは正しいことであるということを知った。空虚、孤独、不安、それはその不利益を持っている、しかしまたそのための損害賠償もある。そしてここにあるそれがそうなのだ。〈…〉「何も言わずに彼女は先を歩いて行った、終わろうとしない数の階段の踊り場。アムステルダム乱婚は、とりわけ人が若い世代に向かう場合には、階段と関係しなければならなかった。彼は静かに羽のようなスニーカーの後ろから上った。そして彼の呼吸を整え、上に着いても喘がないようにした。この上は、とても上にあつた、天窗のある小さな部屋。植物、りんご箱の中の本、エルヴィス・プレスリーのポスター、雑誌 *Vrij Nederland*、息を奪うような小さなスリッパ、白と明るい青色のそれ、開いた窓の前の一つの紐の上に。メランコリーと混ぜられた幸福の概念は、クリシェだ、と彼は思った、この部屋とこの部屋の中の私自身と同様に」(S. 467f)。〈…〉「彼女の眼は真剣さへと切り替えられていた。しかしそれはその底を見ることができる真剣さだった。構造の下部構造をもっていない真剣さ。彼女はまだ悩んでいなかった。それは偶然ではなかった、人は悩むことを拒否することができた。彼はそれを学んだ。それを人は今日では大規模にしているのである」(S. 468)。〈…〉「彼女は果てた、モーターの欠陥なしに。それ自体は、彼が見出したように、とても魅力的なものをもっていた。彼自身の業績は小さなイギリスの風景の中の大きすぎる車に似ていた。数年後にアメリカの自動車産業の半分はそのようなアナクロニズムで没落するだろう」(S. 468)。

このアイロニーが老いと言うものである。若さに対して無理している中年男の様子がおかしいが、ここで言いたいのは「老い」である。中年の定義の一つは、今まで無反省に生きて



きた人生を振り返ることである。それは同時に自分が死に近づいていることを知ることだ。鳩の死は、イニの若さの死である。陽光の中一人の若い娘を自転車に乗せて走る、幸福のイメージは、老いを知る生の最後の輝きである。アルノルト・ターツとの出会いが冥界行として表現されていたように、これから第二の冥界行が始まる。天候も夏の終わりを告げるだろう。

#### ベルナル・ローゼンボーム

イニはこの後で、友人のベルナル・ローゼンボーム Bernard Roozenboom, 有名な芸術商の最後の子孫に会いに行く。このベルナルは直接的には物語に結びつかない。フィリップに出会うのは、ベルナルの友人の東洋美術商のところである。ベルナルの存在はもちろんテーマに関連するのだが、私にとってこの「細部」はそれ自体が一つの小説である。何よりも、アムステルダムに歴史ある美術商人（ルネサンス期の版画の専門）を私は想像することさえできない。（彼にはモデルがいる。友人の中世の古書の専門家で、ノートボームは、中世オカルト関係の書物の蒐集家であるウムベルト・エーコを紹介している）このような人物を純粹に想像力で作り出すことは不可能である、と私は思う。ここはただ引用するだけが私には残されている。それはベルナルの店の描写で始められる。

「たいていはただ一つの芸術作品だけが展示されていたショーウインドー、イタリアルネサンス期のデッサンあるいは16、17世紀のネーデルランド派の最盛期のあまりよく知られていない巨匠の小さな絵画、それは訪問者を誘い込むよりは、むしろ脅し、追い払うのに熱心であるように見えた」(S. 462)。「ベルナルのような店においては一人の買い手が半年分の売上げを償うことができた」(S. 472)。ローゼンボーム語録とでもいべき言葉、「〈私を必要とするものは、すでに私を見出すだろう〉と彼は返事した。〈これらすべての成り上がり者たち、金持ちになった経営者、心の専門家、歯医者たち〉、ここでその調子は果てしない軽蔑を証言していた、〈彼らは〔現代〕芸術を求める。〔ギャラリーで〕。私が提供するものを買うためには、人は予感をもたねばならない。しかし一般的な意味での予感ではなく、ある一定のものの予感だ。そしてそれは今日ではそんなに与えられていないものなのだ。世界にはたくさんのお金がある、そして怠惰なお金は何も知らない〉」(S. 462)。

反近代的な排他性がベルナルの店を特徴づけているが、その空間はまた「冥界」として構想されている。

「友のところに行くためには人は三つのドアを通らねばならない。外のドア、最初のドアのところには彼の名前が金文字で記されていた。〈イギリス文字で〉とベルナルは言った。〈…〉「第二のドアの磨きあげられたノブに触れると、優美な小さな鐘の音が響いた。

すると人は第二の空間に立っていた（〈それを君たち，ローマ的な考え方をもつ人たちはリンボと名付けている，あるいはそれはすでに煉獄の炎か〉）。〈…〉「ある時間の間隔の後で怠惰な影が，その遠方にあり，人の膝にまで以上に及ばない窓の後ろで動いた。（〈私は冥界に住んでいるが，私は誰も探していない〉）」。〈…〉「本棚は革張りの，索引本で一杯だったが，彼はそれを見る必要がなかった，彼はすべて知っていたからである」（S. 473）。

私たちはすでにターツのミニマルな，強迫的な空間，テレーズの邸宅のブルジョワ空間，リダや「小ハトちゃん」の屋根裏部屋を見てきた。また後にフィリップの同様にミニマルな空間が登場するだろう。それらはすべてその住民の生の形である。ベルナールは，その排他的な，反時代的な特異性においてこのような空間に住まねばならない。

そのベルナールの容貌は，

「イニが Kees Verwey によって描かれた，Lodewijk van Deysse の肖像画を見る前に，彼は，ベルナール・ローゼンボームが，彼がシャルリュス男爵のもとに想像している人物のように見えるという意見だった。シャルリュス男爵には，彼が〈古代イスラエル人〉と名付けるものとの類似性を所有していることが気に入らなかったにもかかわらず。〈…〉そしてその際に，ブルーストと彼の読者以外に誰もその男爵を見たことがなかった，もし，ただ言葉だけで成立していて，しかし人が見ることができる存在であることが可能であるとすれば。なんであれ，もしだれかが本当に陰険な老いた男 —シャルリュスも van Deysse のどちらも彼の仕方ですらであった— を研究するならば，それこそベルナールだった。懐疑，傲慢さと距離がこの顔の中に共同作用しており，彼が友人や敵に対して利用する，刺すようなアフォリズムをもっと傷つくものにしてきた。それは経済的な独立，鋭利な知性，大きな読書量と頑固な独身性によってさらに強化された特性であった。彼がロンドンで仕立てさせた衣服は，ただようやくと言った風に鈍重なかなり農民的な姿を包み隠していた。彼の姿全体は，ある挑発的な仕方ですら過ぎ去った時代のおいがした（と彼自身が言ったのだ）」（S. 474）。

シャルリュス男爵は，ブルーストが虚構した人物である。ここで，ノートボームがシャルリュスをベルナールを表現するために用いているのは，そのベルナール自体が一つの虚構であることを示唆している。ベルナールも，「かつて語られた」ことを反復している。そしておそらくそれゆえに，ベルナールの容貌が具体的には殆ど描写されていないにもかかわらず，ベルナールの姿が明確に刻印されるのである。

ベルナールは美術商である。美術と商売という絶対的矛盾がここで考察される。イニは 17 世紀に由来する，深い緑色に輝いていた，クリスタルのガラスの水差しを愛していた。「お金自体の観念は，彼がもっと年を取ったので，もう多くのことを言わなかった。常にお金でとどまるお金は，腐り，どこかで匂いを発しながら散らばり，カビをはやし，繁殖し，同時



に空洞にされた。互いに不愉快な仕方では止揚しあう、成長と病気のプロセスであり、それと交流する誰もが多かれ少なかれ襲われるガンである。ここベルナルの国有地では、お金はいくらか高貴な要素と混ぜられている。それは飲んべえや臆病者の滑り台ではなく、天才と権力を表現する物体の静かな世界であった、そこではお金は知、愛、蒐集衝動、犠牲とそれらに属している、眩惑されたナンセンスの後ではじめて現れた。眼を閉じて彼は、彼の友人の事務所の上方にある広間を眼の前に見た。高い棚の中には、ベルナルの高度に専門化されたコレクションの心を決定している、無数のデッサンがある。これらのデッサンもお金を表現しているが、そのお金価値が任意の状態によって破壊されてもなおも残る何かをも表現している。他に、ベルナルの私的な蒐集品が蓄えられている、秘密の部屋がある。彼はそれをほとんど誰にも見せない。しかしイニは、一たとえ彼のシニカルな友人がそれをけっして発言しなかったにしても—それが彼の人生の意味を形成していることを知っていた。彼がそうして所有するように、彼は、自分の周囲のこれらのすべてのものの静かな力を感じていた。それらのものは神秘的な仕方では彼ととくに過ぎ去った人間や時との間に結びつきを作り出した」(S. 476)。

このようなお金をめぐる考察は、たとえば何か論文の形で読めば、何気なく読み飛ばしていたと思う。ターツの場合も、ノートボームは様々な思索を、それを述べるにふさわしい人物を造型し、その人物に語らせている。それは文学的な手法による語りであり、それゆえに一層、その思索自体が輝きをもって現れるのである。

イニがベルナルのところへ来たのは、見つけた版画の鑑定のためだ。

「〈もし君が少しばかり優れた才能を持っていれば、私が手に持っているものが何であるか知るだろう〉とベルナルは最後に言った。〈私が少しばかり才能を持っているので、君はそれを手にしている〉。〈ブラヴォー。それにもかかわらず君はそれが何であるのか知らない〉。〈いずれにせよ私は、それが何でないのかを知った〉」(S. 476f.)。

このように、互いのエスプリを試すような会話が始まり、ベルナルはその版画 (Sibylle) の鑑定をする。

「そして彼は、ローマ時代のペディメントを漫画のように解読できる人間であり、個々の使徒にどのシンボルが属しているか知っている人間であり、ルネサンス絵画においてギリシア古代への暗示を認識し、キリスト教のイコノグラフィーに関して、どの属性がどの聖人についているかを知っている人間であった」(S. 490) とイニについて書かれているが、それはノートボームに妥当する。彼のかなりの数の美術評論 (特にスペインのロマネスク芸術) は私にとっては美術史家 (但し、自分の感動を言語で表現できる学者) のものであるように見える。いずれにせよ、相当な美術史・図像学的な知識が小説世界を有機的に構成、強化し

ていることに、私は驚く。

「〈Baldini について私たちは本来何も知らない〉とベルナールは言った、彼はこの〈私たち〉でもって世界的な知の集積を自分の周囲に積み上げた。そしてその集積からイニは締め出されていた。〈私たちもまた知らない〉とイニは言った。そして待った。すぐに値切ることが始まるにちがいがなかった。友人において美しいところは、人が彼らを知っており、そんなにはやく彼らによって失望させられないことである」(S.s. 477)。

ベルナールはさらに本を引っ張り出してきた。

「〈注意なさい、良き友よ〉と彼は言った、〈数キロの手堅い愛、というのはこの名作は稀なるものの添加物でもって準備されたのだから。無限の忍耐と、偉大な知、とりわけ愛。Frits Lugt, 自分の金を時間に変えた、一人のとても豊かな男、錬金術の精髓。見てごらん、すべての収集家の標識。それはすでに全く素敵だ。というのはそれを我々の小さな芸術商人は見なかったのだから〉。〈…〉イニはその本のタイトルを読んだ、『デッサンと版画の蒐集の標識』(Les marques de Collections de dessins et d'estampes) Frits Lugt 著, アムステルダム, 1921 年刊」(S. 480)。

イニが持ってきた版画上の記号がその本に記載されていないと言うイニに、ベルナールは言う。「〈その時軽蔑すべき世代が語っている。Lugt の中にはすべてがある〉。彼は正しかった。その昆虫の脚は様式化されていた、互いに向き合って置かれた R, それは、〈男爵 C. Rolas du Rosey (1862 年没), プロイセン将軍, ドレスデン〉だった」(S. 480)。

古い版画がどのような蒐集家の手を経てきたかを調べた書物が存在している。この本の存在は、どの学問も一つの果てしない宇宙であることを予感させる。恐らく日本の骨董の世界も同様に緊密な、排他的な世界なのだろう。ベルナールにとって版画は「儀式」に他ならない。それは現在と関係がない。過去の完結した、絶対的な静寂の世界。それと同様に、このベルナールのエピソードは小説とは独立してある。小説内の小説と言ってよい。絶対的な細部である。

それでは物語が静止してしまうので、フィリップに達するために、イニは浮世絵も持ちだす。

「本当に君は何と言う奴だ。君は選び出すことができない。それは優れた才能の不足だよ。だから君はがめつい取引をする人なのだ。それはすべてを美しいと思う人間だ。そのために人生は短すぎる。人は、それについていくらか理解しているものを本当に美しいと見出さねばならない。選び出さないものは、泥沼の中で没落していけだろ。だらしなさ、注意力の不足、何についても本当に予感を持たないこと、ディレッタンティズムの泥だらけの側面だ。20 世紀の第二の半分だ。どんなものに対してももっと多くのチャンス。もっと多くの人間

はもっと多くのことについてもっと少なく知っている。ある可能な限り大きな平面について知を振りかけること。スケートで走ろうとするものは、氷を割って落ちる。ベルナール・ローゼンボームかく語りき」(S. 481)。

あるいは、ノーテボームかく語りき。ニーチェが近代を断罪するように、ベルナールも現代を全否定する。そしてこのディレッタンティズム、精神の浅薄さに対する批判は深い。ベルナールに対してはイニのいつものアイロニーも働かない。それどころか、後にその浮世絵の鑑定に行ったリーゼンキャンプのところで、彼はフィリップに楽茶碗の講義を受けるのだが、その時イニは思う。

「彼ははじめて何かあるものに対して年を取り過ぎているという感情を持った。〈…〉しかし個々の対象に対してそんなに多くの知が必要であるという観念は、彼を突き放した。そのために彼はもう一つの人生を必要とするだろう、もう一度生まれなければならないだろう。というのは彼の一回的な誕生はこの出来事の時点と場所によってこの見知らぬ世界からの彼の境界を定めたのである。彼の関与なしにすでに選択が行われた、そしてその選択に彼は自分を支えなければならなかった。ベルナールは正しい。たとえそれが可能であっても、人が拒否しなければならなかった。彼が40年を後にしている今、彼はもうピアニストになりたいと思うことはないだろう。彼はもう日本語を学ばないだろう、それを彼は確実に知っていた、同時にこの確実さは悲しみで一杯の感情を彼の中に浮かび上がらせた。彼には今、生がついにその制限を行使しているかのように、それによって死が可視的にあるかのように思われた。すべてが可能であったということは、正しくなかった。ひょっとしたらかつてすべては可能だった。しかし今はそうではない。人は、人がひょっとしたら意図せずに決心したところのものであった」(S. 489f.)。

ここにも「古い」のモチーフが現れる。そして「儀式」はこの「古い」に対する形を与える試みなのだ。それをイニと同年齢のフィリップが過激に見せるのである。

そうして私達はすこしフィリップに近づくのだが、再び「迂回路」として鳩が登場する。

## 鳩

「外で彼はふたたび太陽の光の中に来た。すべてがだれもが幸福の中に浸されたように見えた。近年、取り壊された要塞の外観を帯びてきた街は、輝いているように見えた。光がRokinの水の中に踊っていた。彼はSpuiの方に曲がり、遠くにBegijnhofの木々の明るい緑色の輝きを見た。そのとき第三の鳩が現れた、そしてその鳩は、彼がまだ鳩がするのを見たことがないことをした。つまり鳩は芸術作品を作ったのである。とりわけそれがふさわしいように完全な帰依でもって。というのは鳩は力強い飛行でまっすぐに、その後ろにグランド

ピアノやチェンバロが不動の姿勢で未来の天才を待っている Bender のショーウィンドーに向かって飛んでいったのだ。その衝突は激しかった。一瞬の間鳩は永遠にその窓ガラスにくっついたままであるかのように見えた。しかしそのとき鳩は、墜落しないために、その場で絶望的に羽ばたき、その後すぐにもう操縦可能ではない飛行機のように向きを変えた。残されたものはひとつの芸術作品であった、ガラスの上にもさしく人の高さにアムステルダムの路上のごみと埃の中にスケッチのようにその鳩の完成された姿が描かれていた。羽と羽、大きく広げられた翼が。その衝突はこの鳩の本質のないドッペルゲンガーを埃のガラスの中に刻印したのだ。これらの鳩は彼に何を言おうとしたのか。〈…〉その鳩はともかく、その死んだ同類に対して対立関係にあった、再びよろけながら空の青の中へ跳ね上がった、ただその霊だけを「一埃の形の中であれ— 後に残して」(S. 482)。

この鳩は何を意味しているのか、とイニは小説の中で問う。そして彼は回答を与えない。私は小説が、その回答を読者から望んでいると思う。読者は自分が読んできたことから、自分の回答を与えるだろう。それが小説を読むということなのだ。小説は謎を出すだけである。それを解くのは読者の仕事だ。あるいはそれを解くのは読者の仕事であると小説は読者に思わせるのである。

### 楽茶碗

フィリップとの出会いは、いきなり、その属性とともに現れる。東洋美術の店、「死の静けさの、ブロンズのブッダが Spiegelgracht をこえて絶対的な避けられない、どこにもないところの中を凝視していた」(S. 482f.)。〈…〉「突然彼は、彼の注意がどこか別のところに吸い寄せられたように感じた。それはとても強く、まるで一つの自然法則が作用し、彼の惨めな肉体を強制し、その靈感を与えられたものから離れ、別のショーウィンドーに数歩行くようにさせたかのようなようだった。そこでは小さな、極東のように感じさせるやせた男が世界を失ってその中を凝視していた。／この男と同様にまた、彼が観察していた物体も、彼の人生において一つの役割を演じることになった。しかしそれは他方のものなしに考えられないので、彼は、その皿——というのはこの皿を彼らはあの重要な瞬間と一緒に観察していた——、その皿は、この男の道を介して彼を自分に引き寄せたという見解に至った。その皿は全く孤独にそのガラスケースの中に立っていた、そのケースの底面はある不定な緑色の色合いの絹で張られていた。その皿が載っていたその小さな台も、背景や側面の内壁と同様に緑色だった。／黒い皿。しかしそれでもって何も言われていない。静寂をあらわしているものがいくつかある、しかし他のものは強力である。しかしその力がどこに基づいているのかははっきりしない。ひょっとしたら美に。しかしその言葉は美的な概念ニュアンスを持っている。力と矛

盾しているように見えるニュアンスを。完全性、しかしこれはおそらく不当に、対称性と論理の観念を呼び起こす。それらはまさにここで欠けているものである。それはだから一枚の皿であった、そしてこれは当然のことながら丸い、しかし人は、それが完成された丸みを所有していると言うことはできなかった。それは至るところ同じ高さではなかった。内壁 — いや、人はそんな風にそれを言うことができない — 内側と外側は輝いていた、しかしなにかざらざらしたのももっていた。それがどこか別のところに、あるいはいくつかの別の物体の間に立っていたならば、ひょっとしたら人はそれを一人の才能のないわけではない、デンマークの陶工の作品とみなすことができただろう。しかしこの制限されない力のポジションの中ではそれが話題になることはできなかった。それはその台の上に立っていた、黒く、かすかに輝きながら、ざらざらとして、Poids — それは自然の重さを意味していた — にとって、すべての外見によれば、狭すぎる足の上に立っていた。人が〈重さ〉と言いたかったならば、それでもってまた正しいことが言われたことにならないだろう。皿はそこに立っており、存在していた。それはただ意味論である、しかしそれを他の言い方で言えるだろうか。それが生きていたと。ふたたび貧困の証明だ。人はせいぜいのところ、その皿は、あるいはその鉢は、 — あるいは人はその孤独な物体をどのように名付けようとしたのであろうか — まるでそれが存在しているかのように、あるいはそれが人間の手によってではなく、自発的に生成したかのように見えると、ひょっとして容易に言うことができただろう。この皿は文字通りに〈それ独自 sui generis〉である。それは自分自身を創造した。それは自分自身を、そしてそれを観察する人々を支配する。人はこの皿に対してたやすく不安を得ることができるだろう」(S. 483f.)。

この「皿」は楽茶碗（黒楽）である。後にフィリップは、千利休の最後の茶会の儀式の後で自殺する。物語的には楽茶碗はその「儀式」のために導入されるものだが、私はこの描写に注目したい。楽茶碗は、たとえばマイセン磁器などの人工的な美の極みを求めたものとは全く異なる。おおよそ西洋の美のカテゴリーでは捉えることのできない陶器である。(あるいは日本人である私は、西洋人に日本の陶器は分からない、という思い込みにとらわれている)。その他者性をノートボームはこのように表現した。彼は謎を解明しようとするのではない、謎を謎として残しながら、謎を西洋的な論理で損なうことなく、包み込もうとしている。楽茶碗の登場は、後に出てくる川端康成の『千羽鶴』、あるいは彼が何度か訪問をした日本での見聞から来たのだろう。だが何よりも、ここではこの絶対的な他者性を言語によって表現しなかったのだと私は思う。言語表現の可能性を試みること、その挑発的なテーマとして楽茶碗はある。

そしてバルナールのところと同様に、美と商売の矛盾が再び触れられる。

「そこで彼はアジアに、あるいはもっとよく言えば、アジアの実体のない、崇高な抽象化の中にいた。それに対する完全な対立は、彼の方に向かってきた、背の高い男であった。というのは、彼はわずかの、しかし極度に洗練された形で展示されているオブジェに日常的な現実性の仮象を伝えていたからだ、それによって、それらがまた販売可能であることが納得できるものとなった。イニははじめて、芸術の販売がどんなに奇妙な仕事であるかを理解した」(S. 484)。

その楽茶碗の商談が日本人の客と成立する。最も世俗的な金銭によって媒介される聖なるもの。

「その二人の顔は、イニが良く知っている表情、ただ一つのことを意味することができた表情を示していた。両党派の、その物体について商談がまとまった、その物体でもって彼らはそんなに対立した目標設定を迫っていたのだが、両者は何かを受領するだろう、日本人はその皿を、商人はお金を。洗練された教養と心情が、彼らを感じていたに違いない激しい欲望を弱めていた。今来たものは、他のなによりもむしろ聖別行為に似ていた。一つの小さな鍵でリーゼンキャンプはそのショーウィンドーを聖櫃のように開けた」(S. 491)。

「今、イニはその皿を初めて正しく見た。灰色の銀河のようにもっと明るい、もっと粗い点の一本の道がその黒い内側の深い闇の中を通っていた。誰があえてそこから飲もうとするだろうか。正確にそれらの上方にかかっていた、天井灯が皿の底に反映していた、しかしそれはまるでこの皿が、それにそんなにたっぷりと供給される光を戻したくないように見えた、まるでその皿が光を、そこから皿が作られていた深い黒い土の中に貪欲に引き止めておくかのように見えた。この日に二度彼は、彼が鳩を埋めた土を考えた。そして今、この明るい太陽の光の中に災いが混じった、その災いは彼の隣の不動の男と関係していた、その日本人の買い手の堅いまなざしや彼のまわりのすべての沈黙し閉ざされている対象物と関係していた」(S. 492)。

### フィリップ

その皿の描写はフィリップという人間に重なって行く。フィリップは、その「皿」を望んでいたが、お金がなかった。「最初、日本人はその皿を投売りした。それからやってきて、それを持って帰るのだ」(S. 493)。

そのフィリップがアルノルト・ターツの息子であることをイニが知るのはその後である。フィリップの母は東アジアの人であった、そして父は彼らを捨てた。聖人が家族を捨てるように。イニは、父の不在をフィリップと共有している。フィリップの存在も、父の場合と同様に、その空間によって暗示される。フィリップはアムステルダムのスラム街に住んでいる。



「フィリップ・ターツの宇宙は、少なくとも父親のそれと同じくらい頑固なものであった。そこに導くものは何も、どこに人が到着するのかを人に推測させなかった。De Pijp 地区の荒廃 —それはあの年月においてすでに、後に都市全体をつかむことになった廃船化の先ぶれとして、貪欲な糸状菌のように 19 世紀に建てられた通りをむさぼり食っていた—、その荒廃との対立は言葉の真の意味で息をつかせぬものであった。父親と同様に上も周囲も見ないこの小さな男の後を、イニは半分崩壊した車の残骸、悪意に満ちて輝くごみバケツ、二列に駐車している配達用トラックの間を色のない失われたドアへと迷いながらついて行った。そのドアの後ろには陰しい、暗い階段があった。もっと高いところに置かれている階段は下からは見られなかった。イニはまるで、彼が巡礼に、贖罪行に赴いたかのように思われた、それはアルノルト・ターツと彼自身の過去とすべての点で関係していて、この沈黙し、やせこけた東アジア人、彼の内側に向けられた僧の頭とは何の関係もなかった。／彼らが最後に入った空間は、とても明るく、一見すると完全に空っぽに見えた。そこはすべて白かった、そこで人は世界から遠ざけられ、ある荒涼とした寒い山岳風景の中に、あるいはもっとうまく言うと、再び、山の中高くの修道院にいるように見えた。ここではオランダについては少しも話しにならなかった。その後ろに何も見えなかったいくつかの白い、垂れ下がっている厚手のカーテン 〈…〉、シーツで覆われ、だから担架のように見える、一枚の板のような、低い木製のベッド。明らかだった、このターツも一人で生きていた。ここには、空間と静寂を邪魔する犬さえいない。ほとんど知覚できないが、香の匂いがした」(S. 495)。

後にイニは竜安寺の石庭の絵ハガキをそこに見出す。

「本来この部屋は、三個の石のある小石の平面と同様に、もしだれもそこに、この住民でさえ、滞在していなければ、もっとも良く効力を発揮するであろう。それを見るために、だれもいなければ、とイニは思った。この平面、あるいはこの庭は、人がどう名付けようとも、万有のように自らのためだけに、住人あるいは観察者もなしに存在することができた」(S. 498)。

フィリップがイニに貸した、川端康成の『千羽鶴』のペンギンブックス版に掲載された川端の写真の描写が面白い。

「異常に高い額から銀色に輝く髪が後ろに波打っていた。壊れやすい肉体は黒い伝統的な衣装の中に包まれていた。彼がその本を後ろからめくっていたとき、彼は同じ男を今度は完全な大ききで、ノーベル賞であるに違いなかったものの受理の際の姿で見た。なぜならば彼の前に老スウェーデン国王が立っていたからだ。王は彼の薄い、拍手喝采する老人の手を全く特別にひどく前や上の方に保っていた。彼らの感激が実際に本物であるということを表現したいと思う、しつけのよい、教養のある北方の人間の流儀に従って。人はここで、作家が



側面から写真を撮られているので、彼の姿がどんなに果てしなく小さく繊細であるのかが見ることができた。彼はそこに白い靴下と奇妙なサンダルをはいて前かがみに立っていた。そして彼が受け取ったばかりの物体を痙攣的につかんでいた。一つの長い緑色の衣装の上方に彼は、膝まで及ぶ一つのコートを手につけていた。イニはそれが着物であることを知らなかった。そして、髪の毛がその小さな、内面に向けられた顔の中からどんなに高く上に波打っているか、再びイニの注意を引いた。彼の前に、そして栄誉の台座の高さによって部分的に彼よりも低く立っていた皇女や王子たちは、彼らの幅の広い顔の上に、啞然としていることの一つの不安げな変種として描写されるであろう表情をもっていた」(S. 499f.)。

スウェーデン王族と川端の対比が面白い。ノーテボームは鎌倉の川端のお墓の訪問記も書いているが、ここでは少しアイロニーが感じられる。イニは厳格な形式化に対して常に懐疑を表明したが、それがスウェーデン王室の描写の中に暗示されている。さらに、私は「写真」のモチーフと写真を言葉で表現することをノーテボームがしたかったのだと思う。そしてその描写が彼にとって認識であるのだ。

フィリップの存在を表現しているのは、彼が言葉で話す内容ではない（それは〈無〉などの、かなりステレオタイプに見える東洋の知恵である）、そうではなく、彼の空間や彼の身ぶり、衣類である。例えば、フィリップの座り方。

「フィリップ・ターツは再び床に腰を下ろした。人はそれをこのように名付けなければならなかった。彼が自分の肉体を折りたたみ、一つの静かなまっすぐな滑走運動の中で、自分自身の中を通り下降するその仕方を。その際に彼は、その上に緑茶の入った二個の茶碗が載っている、漆塗りの盆を同じ運動の中で音もなくアシの敷物の上を下ろしたのである。／彼をもてなす人は飲んだ。イニはまつげを通して彼を観察した。この顔も内向的であった、しかしそれはカーテンを降ろした東洋ではなかった。ここで彼は、完全に自分自身の中で生きている人と関係していた。この部屋におけるこの男の観念は彼には不気味に思われた。彼は一緒に来なかったらと思った。彼らは黙って飲んだ。〈君は一体何をしているの〉とイニは最後に尋ねた。もし人間が座布団の上で向かい合って座っているならば、敬称の〈あなた〉は廃止されなければならない。その他に彼らは、彼にそう思われたように、同年齢であった。〈お金の達するために、という意味かね〉。それは非難のように聞こえた。〈ええ〉。〈…〉そしてこのフィリップ・ターツは、僧のように頭を剃っていた、この顔の中に形式に関してあるものは全て二倍強く表現された。頭を剃っている人間は、髪の毛から来る穏やかにする力を自分から奪う。鼻、口、エモーション、すべてが無慈悲にも露呈される。しかしこのターツの顔の中ではすべてが鍵を掛けられ、閉ざされていた」(S. 500f.)。

## 形而上学

フィリップは難解な「形而上学」を語るのだが、その言説を小説の世界に収めるには、それだけの人物造形がされていなければならない。「形而上学」を語る人には、それだけの精神的体格が必要である。その造形が、フィリップの住居や身ぶりの描写によって為されているのだ。こうして〈フィリップかく語りき〉が可能となる。

テーマは「形而上学」である。イニはそれをキリスト教の概念で解釈するしかすべを知らない。「Stabilitas Loci, それは瞑想的宗派の根本規則の一つです, 人は, 彼が入る同じ場所にとどまる」とイニ。「ここでは自分自身を失う」とフィリップ。「イニは聞こえないようにうめいた。70年代。彼らが教会のドアを後ろで閉めたと思ったら, もう彼らは物乞いのように誰かのグルあるいはSwamiの足元にひれ伏している。ついに彼らは美しい空っぽの宇宙の中で独りになった。その宇宙は自作のレールの上を機関手のいない列車のように突進し, そのすべての窓から人が助けを求めて叫んでいるのだ」(S. 501)。

「〈私の救済〉。一秒のためらいもない, 〈私の夢〉, 〈私の救済〉」(S. 501)。〈…〉「それは結局一人のターツだった, そしてどのターツも最大の率直さで〈…〉, 他の人間たちが愛しながら避けたがる言葉を使用した。ターツたちは, 地面から1メートル上に生きていた, そこではこれらの言葉が自然な生活空間を持っていた。ひょっとしたら彼らは飛ぶことさえできた」(S. 502)。

イニはアルノルトに対して距離をとることで自分の位置を確認した。フィリップもその強烈な存在によって, イニの位置を明確にするように強いる。

「彼がWetering公園に近づくと, 大きな, 韻律に従って朗読する呼び鈴と泣き出しそうな, 常に繰り返される歌を聞いた。クリシュナ宗派の, オレンジ色のドレスに包まれた頭を剃ったメンバーたちのグループが牛のように鳴き, ベルを鳴らしながらゼブラゾーンを横断した。揺れながら, 通り過ぎる人たちを見つめることを拒否した, 白い, ひげを剃っていない顔をして彼らは彼の方にやってきた。いつものように彼は憎しみを感じた。人間はそんなに恥知らずに一つのシステムに身をゆだねるべきではない。彼が半時間もたたない前に考えたことが, さらにげしく彼の中に浮かんできた。人間はこの世界で一人であることはできない。人間がユダヤ教徒とキリスト教徒の惨めな神を墓に運んだそのすぐ後に, 彼らは赤い旗をもってあるいはオレンジ色のだらしのない服装で道路を行進していた。明らかに中世は終りを見出すことはできなかった。彼はターツのことを考えた, どんなに楽に彼は彼の東アジア的な顔を持ってここに参加できるかを考えた。フィリップは彼のワンマン宗教を〈…〉彼の自分で建てた修道院でひとりで体験していた。De Pijp地区の荒涼の中の隠者Anachoret。イニは, 友人の作家とOosterhoutのベネディクト派修道院を訪れたことを思い出した。決

して話し好きではなかったその作家は数時間もあちこち見て回り、それから一人の老いた僧に、彼が一体ここから出たいと思うことはなかったのかと尋ねた。その問いはその僧を少しも驚かせなかった。その答えはすぐに出てきた、〈最後に私は1929年に出たいと思いました、暖房が切れたときに〉。それについて彼らは心から笑った。それから今度は僧が作家に尋ねた。〈そしてあなたは？　ここはひょっとしてあなたが訪れた最初の修道院ではありますまい。あなたは修道院に入りたいと思わなかったのですか〉。しかしこの答えは、打ちのめすように単純だった、イニはいつもそれを思い出した。〈私の修道院は世界です〉と作家は答えた。それについて今度は僧が笑い、自分はそれを理解すると答えた。〈私の修道院は世界です〉。しかしターツは自分の中から一つの修道院を作り上げた、—彼が自分で言ったように—一死に至るまで自分を瞑想するという唯一の目標と共に。しかしそれは何かの東アジア的な教義に基づくことはほとんどできなかった。犠牲がささげられるとすぐに、人は再びゴルゴダに到達してしまった。そしてこのターツは明らかに誰かを殺すことなしに、たとえそれが自分であっても、救済されることはできなかった」(S. 505-507)。

この作家の答えは、ノートボームの立場であろう。ターツたちの「儀式」は、確かに美しく完結している。だがそれは、閉ざされている。ターツたちに対する距離は、イニの「途上にある」という立場である。それは世界に無防備に曝されることであるが、そこに踏みとどまらなければ、儀式は文字どおり死の儀式となるだろう。この「途上にあること」を東洋美術の商人リーゼンキャンプは「人は生きるために哲学を必要としない、あるいは何かの事柄の信奉者である必要はない」と言う(S. 509)。この認識はしかし、ターツたちの厳密な儀式化を前にしてはじめて可能になるのだ。

一方でフィリップは「哲学」を必要としていた人間である。それは眠れぬイニが朝4時にフィリップを訪れる時に、語られる。私には「寒山詩」を想起させるフィリップの空間とフィリップの具体的な姿は、彼が語るどんな抽象性に対しても奇異の念を起こさせることがない。

「私は、神は非常に私でなければならず、私は非常に神でなければならないと言う。それは消耗させるほど一つであって、この〈彼〉とこの〈私〉は唯一の〈在る Ist〉であり、この〈在ること Istigkeit〉の中で永遠に一つの同じ作品を作り上げている。しかしこの〈彼〉とこの〈私〉、つまり神と魂が唯一の〈ここ〉、唯一の〈今〉であることができない限り、その〈私〉は共同に作ることもできないし、〈彼〉と一つになることもできない」。〈…〉「あらゆる可能な理由から—出自、状況、そして寄せ集めの全体—もう一緒に進まず、そしてはっきりと、彼がもう一緒にやりたくない」と表明する一人の人間。そのようなものが存在している。私は唯一の人間ではない。東洋が私に与えたものは、私の自我 Ich は唯一無二のものではないという考えだった。私の自我は、それが消えるならば、とても多く消えるのでは

ない。それはそんなに重要ではない。私は世界を邪魔し、世界は私を邪魔する。私が両者を同時に廃棄するとき、はじめて調和が達成される。そのとき死に行くものは、私の名前を持っている、ひと束の関係であり、その関係が自分自身について所有している、制限された、つねに変転する知である。私はそれを悪いと思わない。私が忘れてしまったことは不安である。それは少ないことではない。それ以上のことを私はできなかった。〈…〉しかし私はそれで満足している。私が達成したことは、否定的である。私は不安を持っていない。私は静かに溶解することができる、一瓶の毒が大洋に溶解するように。それは大洋に何も害をなさないからだ。その毒は重荷から解放されている。それはもはや毒である必要がない」(S. 520f.)。

「人間は、自分の髪を梳く、惨めな哺乳類である」(S. 521)という「スペインあるいは南アメリカの詩人」の詩句が、イニの反応である。私たちは『騎士の死』の中でアンドレが「不安」の中で没落したことを知っている。もしアンドレが生きていれば、ターツ父子のような人間になっていただろう。だから、その「不安」がないということは些細なことではない。人間の最も根源的な不安は死への不安であるならば、「死」を不安なしに受け入れることである。この言葉はおそらくノーテボームが世界・時代に対してもっていた居心地の悪さを極度の形で表現したものであろう。しかしイニは生きている。フィリップの厳密な「哲学」を鏡のようにして、彼は自分の立場を測定する。

「70年代は物憂げに時代の中をころがっていった。それは世界が一同様に彼自身も、彼が住んでいた都市も— ゆっくりと次第に崩れていくように見えた」。〈…〉「時間の終わりは近くまでこちらにやってきた。そして彼はそれが悪いとは思わなかった。大洪水は人の方に来る必要はなかった、人はそれに自分で参加しなければならなかった。そして政治家、経済関係者、国家全体が自分の工業製品の糞の山の中に沈むのを見ることは、彼に大きな喜びをもたらした。彼の友人たちは、そのような態度は軽はずみで、ニヒリスティックで、陰険であると、説明した。彼はそれは正しくないことを知っていた。しかし彼は彼らに反論しなかった。彼は、他のたいていの人たちと反対に、新聞、テレビ、救済教義、他の哲学によって、この世界は〈それにもかかわらず〉、それが一度存在したがゆえに、まったく許容される世界であるという教義に改宗されなかった。それについて人は決して一致しないだろう。ひょっとしたら愛しく、貴重である、しかし許容されるものでは決してない。この世界は数千年存在したばかりだ。そして何かが根本的にうまくいかなかったのであり、それはふたたび前から始まるべきだろう。彼が日常生活の中で示した、対象、人間あるいは自分に対する忠実さは、この認識をすこしも変えなかった。宇宙は、世界なしにまったくうまくやっていた、そして世界は、人間、物、イニ・ウイントロップなしにやっていた。しかしアルノルト・ターツと反対にイニは出来事を静かに待つことができた。結局さらに千年が続くこと

ができた。彼はホールの中にすばらしい席を持っていた。その作品は時々、戦慄的だったが、それから再び抒情的になり、迷いの劇、情愛的で、野卑で、わいせつだった」(S. 523f.)。

現実を肯定するのではない。ターツたちのように全否定するのでもない。アイデアを見据えつつ、「嗤わず、嘆かず、呪わず、ただ理解せよ」(スピノザ)、それがイニの考えである。

## 死

最後に残されているのは死の儀式である。フィリップは、イニとの出会いから5年後に、願っていた楽茶碗を手に入れる。

「その皿は、死んだ葉の色、すべての死んだ葉をあわせた色をしていた。甘く苦く堅くやさしい、砂糖漬けにされたショウガの輝き、過ぎ行くものが発情し、燃え上がるようすを持っていた。それは幅広く、ほとんど不恰好であり、人間の手で作られたのではなく、灰色の有史以前に生じたもの。あの黒い皿がまだ脅かすものを持っていたのなら、この皿はそのような解釈をはるか後ろにしていた。物が、現存するために、人間によって見られなければならないという考えは、ここではふさわしくなかった。物にとってニルヴァーナのようなものが存在するとしたら、この楽茶碗は永劫の昔の前にすでに入ってきたのである」(S. 525f.)。フィリップはその皿を買った。「彼らが再び現れて来たとき、ターツの顔はある空虚な、失われた表情をもっていた。彼は持ちたかったものを持った、とイニは思った。イニは経験から、それが必ずしも快いものではないということを知っていた」(S. 526)。フィリップの立場はもちろん矛盾している。本来、形式・儀式は、人間が生きるために作り出したものである。死の儀式も、再生や、残された人たちの生に向けられている。フィリップの場合、儀式が審美化されている。儀式のための儀式。イニは思う。「彼は狩人とその狩人が追回している獣の何かを持っている、狩人と同時に犠牲者だ、と」(S. 526)。

フィリップはイニとリーゼンキャンプをお茶に招待する。その描写では、私にはカトリックの儀式との対比が興味深い。

「日本にいる二人のイギリス人、そこに来ることになっている物事を待ち焦がれながら。膝まずけ！彼はどれほど多くそれをしなかつただろうか。堅いベンチに、角石の上に、冷たい祭壇の階段、大理石、金の刺しゅうのあるクッション、寄宿舎の寝室ホールベッドの前で、告解の席の暗い洞窟の中で、罰のために、他のものが食べている間、修道院食堂の隅で。聖なる処女の前、聖なる心の前、神聖な秘蹟の前、洗礼盤と棺のわきで — いつもこの二つに折られた姿勢、屈辱と尊敬の念を表現することになっている、肉体の中のこの不自然な折れ。彼は見回した、それはどこに見出されたか。中年の二人の紳士、アムステルダムの De Pijp 地区の冬の嵐に苦しめられている屋根裏部屋の中、ゆらめく炎の前で一緒に膝ま



ずきながら。ターツが入ってきた、正確には彼の幽霊的な仕切りの厚手のカーテンの後ろから現れた。こんど彼は、長い錆色の礼服の上に、短い着物を着ていた — ノーベル賞受賞者がその消えてしまった本の中で身につけていたもののような — , Albe (カトリックの礼服) の上に Casula」(S. 531)。「衣服のこすれる音, お湯の沸騰する音, 嵐の吼える音, しかし沈黙はとても強制的に統治していたので, まるで, その機能をイニが知らなかった対象物が能動的にその静寂に関与しているかのように思われた。まるでそれらのものが沈黙し, それらの完成された形式によって, これがあらかじめ理解された沈黙であることを表現しているかのように見えた」(S. 532)。「〈これを私の思い出のためにせよ〉」(S. 534)。

この「儀式」のしばらく後で, イニたちはフィリップの部屋の中に楽茶碗が粉々に壊されているのを発見した。失踪したフィリップは, 運河の中に水死体として発見される。そしてフィリップの火葬。

「〈礼拝は行われぬ〉とベルナルは言った。そして突然イニは, ベルナル・ローゼンボームが一度だけ狼狽するのを見たことを思い出した, それはフィレンツェだった, 4年前。彼らは Doney でふんだんに昼食を食べた, それから当てずっぽうに街を歩き回った。思いもかけず, 彼らは一つの印象深い, それほど大きくない建物の前に立っていた。〈見てごらん, シナゴグだ〉とベルナルは言った。そして彼らは中に入った。フィレンツェの教会の華麗さの後で, そのインテリアは快いシンプルさをもっていた。男が一人だけいた, 彼は死んだように静かに自分の前をじっと見ていた。隣の教会の鐘がその完全な時を打った, 正確に5時に, 完全な装飾の男が入ってきて, 坐った, 彼もまた前をじっと見た。イニはベルナルが言うのを聞いた, 〈おお神よ, 今日はサバトだ, 礼拝は行われぬ〉。彼がベルナルを問うように眺めた時, 彼は言った, 〈もし10人の成人した男がいなければ, Gazzan は始めることができない〉。死んだように静かなままであった。〈どれくらい彼らは座ったままでいるのかね〉。〈一時間〉と返事された。この時間の間, ベルナル・ローゼンボームがますます小さくなるように彼には思われた。二人の旅行者が中に入り, 驚いて外へ出た。一時間後 Gazzan は立ち上がり, 消えた。彼らも外へ出た。ベルナルはそれについてひと言も失わなかった。イニもまた。しかし, それはただ, 彼が何を言うべきか知らなかったからだ。黒いスーツの一人の男がリーゼンキャンプのところに来た, そして彼に何かを尋ねた。リーゼンキャンプは頭を振った。ノー, 誰も何かを言おうとしなかった。カチという音で, テープが回った。バッハの第三組曲。その曲が終わる前に, 棺はすでに沈んだ。人がそれをそう名付けることができるのならば, 儀式全体は5分間続いた。そして世界はフィリップ・ターツを清算した。彼らが外へ出たとき, 死者は灰色のぬれた雪のように彼らのコートの肩にしとしと降ってきた。欠けていた唯一のものは鳩だった」(S. 540f.)。



「その夜イニは二人のターツの夢を見た。一人は凍え、一人は溺れ、彼らは彼の寝室の窓辺に無意味な野蛮な陽気さの発作の中で現れた、腕を互いに組み、聞こえないほどにわめきながら。イニは立ち上がり、窓辺に行った。窓の後ろには揺れ、骸骨のような、きらきらする氷で覆われた木々の枝以外になにも見えなかった。それゆえに誤解の余地なく二つの世界があった。二人のターツが滞在していた世界と、二人が不在であった世界と。そして幸運にも彼はまだ後者の世界にいたのだった」(S. 541)。

死の儀式はフィリップが自分で司った。火葬は必要ではない。ここで火葬が描写されるのはベルナルのフィレンツエのシナゴークのエピソードのためだろう。だがこのエピソードは何を意味しているのか。その礼拝は必要な数の人間がいなかったので行われなかった。儀式はそれ自体として存在するのではなく、それを満たす人間、内容が必要である。形式と内容の弁証法を述べているのか。そしてあれほど反時代的に超然としていたベルナルはどうして狼狽したのか。自分のユダヤ人としての出自を忘れていたことに狼狽したのか。これはフィリップの「火葬」の儀式のそっけなさを強調するために描かれたのか。どの小説も多数の細部によって組み立てられている。それが小説世界の三次元性を構成する。物語的に統合されない細部は、まさにそれゆえに物語そのものをあらわにする。人はそれを謎として捉え、そして自動的に、それを解釈すること、つまり物語に編入することを要請されているように感じる。そしてそのような疎遠な細部があっても、びくともしない小説世界があり、それはつまり文体の力なのである。

「これを私の思い出のためにせよ」とフィリップの茶会の描写にある。それはイタリックで書かれていて、テキストでは誰が言ったのか分からない。同様の言葉は小説の中では三度言われる。カトリックの寄宿舎学校でイニが従者を務めた、老神父 (Pater = 父) のミサの中 (「私の記憶のために」 S. 407), そして小説の最後に引用される岡倉覚三の『茶の本』の中の千利休の最後の茶会の時の言葉, 「利休は客人の誰にも思い出のための品を与えた」(S. 542)。すべて死にゆく者の儀式の際の言葉である。この小説は父の物語であると思う。ノーテboomは父をこのように記憶した。そして表象した。「記憶」が文学なのである。

『儀式』 — “Rituale” — のドイツ語訳は全集版による。Cees Nooteboom: Gesammelte Werke Band 2. Romanen und Erzählungen 1. (Aus dem Niederländischen von Helga van Beuninger und Hans Herrfurth). Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2002. ここからの引用は、本文中にページ数を記した。

注

- 1) Van Buuren, Maarten : Und weinte bitterlich. Der abwesende Vater in Cees Nootbooms „Rituale“. In : Der Augenmensch Ces Nootboom. (Herausgegeben von Daan Cartens). Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1995. S. 83.
- 2) Van der Paardt, Rudi : Keinen Vater auf dem Rücken. Vergilische Motivik in dem Roman „Rituale“. In : ebd. S. 101.
- 3) Van Buuren : S. 89.
- 4) Van der Paardt : S. 108.
- 5) Vgl. Van der Paardt : S. 102.
- 6) Van der Paardt : S. 99

Rituale

Ich habe den Roman „Rituale“ 1984, als ich im West-Deutschland war, gelesen, was mich dazu veranlasste, die gesamten Werke von Nootboom zu lesen. Im vorliegenden Aufsatz geht es darum, zu untersuchen, was mich so angezogen hat. Die Aufsätze, die ich über den Roman gelesen habe, behaupten, von dem Begriff Intertext ausgehend, dass Nootboom aus einem Archiv der geschriebenen Texte schreibe, und untersuchen die einzelnen Motive und Symbole. Ihre Entzifferungen der religiösen und mythologischen Motive und Symbole sind zwar anregend, aber beide setzen einen Stil (Ausdrucksweise) voraus, in den alle Motive eingewebt sind. Und über diesen Stil will ich nachdenken.

Dieser Roman ist ein Roman der Ideen Das Ritual ist die Form, deren Bedeutungen darin behandelt werden. Das Leben ist amorph, und der Mensch sucht nach der Form, die dem Leben entspricht. Das ist der Stil. Aber die Form droht, das eigentliche, dynamische Leben starr zu verfestigen. Es dauert nicht lange, dass die Form dem Inhalt entspricht.

Es sind Arnold und Philip Taads, die hier das Ritual leisten. Arnold, der der Geliebte von Inni's Tante Thérèse war, verhalf Inni, das eigentlich ihm zugesprochene Erbe zu behalten. Was ich hier betonen möchte, ist die Gestaltung der Personen. Arnold lebt einsam in dem Ein-Mann-Kloster, das er selbst gegründet hat, in dem eine absolute Zeitordnung herrscht. Die Darstellung der Wohnungen trägt zu der Gestaltung und Charakterisierung der Personen wesentlich bei. Arnold wohnt in einer modernen, minimalen Wohnung ; Philip wohnt in einem Zimmer, das an die Zelle eines japanischen Zen-Priesters erinnert. Die Darstellungen des Dachzimmers der Frauen sprechen beredt über die Bewohnerinnen. Amsterdam zeigt das Chaos, der Geschäftsraum von Roozenboom (und Doorn, der Wohnort von Arnold) deutet die Unterwelt an. Philip

ist nicht nur durch sein minimales Zimmer, sondern auch durch seine Gebärde gekennzeichnet. Deren strikte Gestaltung ermöglicht es, ihre Metaphysik auszudrücken, die sonst zu der Romanform nicht passen würde.

Die Taads versuchen, der amorphen chaotischen Welt zu widerstehen, indem sie strenge Rituale bilden, was eine Kehrseite ihrer Angst ist. Je strenger ihre Form wird, desto chaotischer wird die Welt und die Zeit. Inni ist in die Welt geworfen, er hat Sinn für das Ritual, das von seiner katholischen Erziehung übrig geblieben ist. Es ist eine Vorliebe für das Ritual ohne Glauben. Inni ist durch das Ritual fasziniert, aber er kann nicht selbst eine Form finden. Oder er nimmt den Standpunkt des Dilettanten ein, der es ablehnt, sich auf die eigene Form festzulegen. Sich für eine Form entschieden zu haben heißt, sich gegen die Welt zu verschließen. Und in der Welt liegt das Geheimnis. Aber die Gefahr des Dilettanten, (jedermann ist ein Dilettant des Lebens), zeigt Roozenboom, der ein ästhetisiertes Leben ganz in der Welt der Vergangenheit lebt. Die literarische Gestaltung von Roozenboom ist wunderbar, und seine verneinende Rede gegen die Moderne erinnert an Nietzsche: 'Also sprach Roozenboom'. Die Gestaltung der Person Roozenbooms ermöglicht es, diese Art von Diskursen in dem Roman zu formulieren. Auch die abstrakten Reden von den Taads werden durch diese sichere Gestaltung ermöglicht, d.h. als integrale Bestandteile des Romans.

Auf jeden Fall teilt Inni die Fremdheit gegen die Welt mit den Taads, nimmt aber nicht definitiv Abstand von der Welt und zieht sich nicht zurück. Die Welt selbst sei ein Kloster, so heißt sein Gedanke.

[Article]

# Classical Chaos and Quantum Mechanical Solvability in Inverse Problem

TAKAHASHI Koichi\*

**Abstract** We present a classically chaotic model in two-dimension whose Hamiltonian is  $C_{3v}$ -symmetric and is bounded from below. In its quantal version, the ground state wave function and the energy eigenvalues of the Hamiltonian for low quantum numbers are exactly known. Excited energy levels with higher quantum numbers are calculated by numerically solving simple algebraic equations. The energy spectrum does not depend on the model parameter which is relevant to the  $O(2)$ -breaking. Schrödinger equation for the excited states is reduced to a set of recursion differential equations. The energy eigenstates are easily constructed by solving this recursion equation. The level statistics is Poissonian and the level-crossings are observed. We finally note the occurrence of the spontaneous symmetry breaking in the  $O(2)$ -symmetric model.

Keywords : Hénon-Heiles potential, Quantum chaos, Inverse problem

## 1. Introduction

The Hénon-Heiles (HH) potential, which was first presented to analyse astrophysical stability problem of galaxy, has arrested much attention in the field of deterministic chaos because of its conceptual simplicity (Hénon and Heiles 1964). It is a one-body potential of two degrees of freedom that is autonomous and non-singular, and has  $C_{3v}$  symmetry of the point group. Geometrically, the HH potential has a hollow surrounded by convex foats of walls, a similarity to the Sinai's billiards, in which exponential separation of the classical paths is known to take place through repeated elastic collisions with fixed spheres (Sinai 1970). Non-integrability, the necessary condition for chaos, is realized by the  $O(2)$  breaking. Surely, the HH model has excited interests on chaos in conservative systems with a non-trivial potential.

On the other hand, whether the system inherits some chaotic nature after quantization has been an intriguing question because the Heisenberg's uncertainty inhibits precise determination of orbits in phase space. Phenomenologically, there are several criteria for 'quantum chaos' (Weissman and Jortner 1981): avoided crossing of energy levels, avoided contour crossing in wave function, irregulari-

---

\* Department of Information Science, Faculty of Liberal Arts

ties in spatial and temporal behaviour of wave function, etc. Of course, whether a quantum system with these features is worth to be said chaotic is questionable. For instance, some authors claim that quantum chaos does not exist in such a quantized classically chaotic system as the Arnold's cat map because of the absence of enough complexity in physical quantities in the classical limit (Ford et al. 1991; Ford and Mantica 1992. However, see Belot and Earman 1997). More pertinent problem to be addressed is therefore *by what generic quantal features the classically chaotic quantum systems are discriminated from the classically integrable quantum systems*. This may be what Berry aimed by advocating *quantum chaology* (Berry 1989a). The problem addressed in this way can be extended to the quantum field theory, since we know even a well-known renormalizable quantum field theory exhibits chaos in classical dynamics (Takahashi 2010).

In the context of chaos, it is natural to give an attention to randomness in any sense observed in the quantal system. According to the random matrix theory, the randomness of the Hamiltonian is specifically manifested by the Wigner distribution of the energy levels (Wigner 1951, Mehta 2004). Such a classically chaotic system as the kicked rotator is in fact known to leads via quantization, to a system with a (pseudo) random Hamiltonian (Fishman et al. 1982, Grempel and Prange 1984). Another important question then naturally arises : whether the classical chaos always implies quantal Wigner distribution, which is remaining unsolved.

Several authors sought signatures of chaos in the quantized system of the HH-type by diagonalizing the Hamiltonian in terms of a large set of the wave functions of the unperturbed harmonic oscillator (Pomphrey 1974, Noid et al. 1980, Weissman and Jortner 1981, Pullen and Edmonds 1981a, Park 2001). In the HH-like model, Cremers and Mielke (1999) employed the 'flow equation' that makes the Hamiltonian diagonal by continuous unitary transformation. Pomphrey (1974), Noid et al. (1980), Pullen and Edmonds (1981a) and Park (2001) have observed the avoided level crossings that give rise to the Wigner distribution for the level spacings and are usually regarded as the sign of quantum chaos due to the non-integrability and/or the sensitivity on the coupling of the underlying dynamics (Wigner 1951, Pechukas 1983, Yukawa 1985, Gaspard 1990).

Nevertheless, something worrisome has been left aside : the original HH potential and many HH-type potentials do not have the global minimum and there remains an insecurity about the meaning of eigenvalue or eigenfunction, especially near the escape energy. This casts a doubt for the meaning of the level statistics. To the author's knowledge, no bounded and tractable  $C_{3v}$  symmetric potential models have been known so far.

A physically well-defined model calculation was performed by Pullen and Edmond (1981b). They

utilized a bounded  $C_{4v}$  symmetric potential that displays chaos in classical mechanics. In its quantum mechanical version, they observed level repulsions. Their result seemed to provide an example of a quantal criterion for the classical chaos.

Studying continuous potential models is important in relation to molecular or atomic physics but not an easy task, as long as chaos is concerned. The traditionally employed diagonalization method needs a very large number of base functions to approach the true eigenfunctions of the Hamiltonian, even if symmetries are taken into account. In addition, a large mixture of the base functions generally obscures the meaning of the quantum numbers associated to the constructed eigenfunction.

In the circumstance described above, for the pursuit of ‘quantum chaos’ in the potential problem, it will be worthwhile to proceed on an inverse route. Namely, adopting a certain function with required properties as a candidate of a wave function, we may find a Hamiltonian that yields the presumed function as an exact eigenfunction of that Hamiltonian. Its energy eigenvalue may also be known exactly. Remaining (excited) energy levels will then be found by solving a set of treatable equations. The associated eigenstates will be constructed as an infinite series of angular momentum states that are calculated recursively.

The core ingredient of the calculation method presented in this paper is a perturbative expansion in some combinations of model parameters and is distinct from the semiclassical approximation that has so far widely used to bring about steady developments in the field of quantum chaos. One of them is due to Berry and Tabor (1977) who showed that, in the regular systems, the generic distribution of the level spacing is Poissonian. On the other hand, there seems to be a widely pervaded expectation, but with no proof, that the quantum level spacings for the classically chaotic system should obey the Wigner distribution. Quite interestingly, our model, solvable for the energy spectrum, will show an opposite property : classically the system exhibits chaos, and after quantization, its energy spectrum obeys the Poisson distribution.

In this paper, we proceed the way similar to solving the inverse problems : we first assume the form of the wave function with a required symmetry property for a spin-zero particle trapped in a potential and then construct a two-dimensional Hamiltonian that is bounded from below,  $C_{3v}$ -invariant and exhibits classical chaos. We elaborate the method of solving the Schrödinger equation and inspect the properties of the solutions by paying attention to the energy spectrum and the pattern of the wave function with *low* quantum numbers.



## 2. Bounded $C_{3v}$ -symmetric model

The Schrödinger equation for a particle moving under the influence of the potential  $V$  in two-dimension (the coordinate is  $\mathbf{q} = (q_1, q_2)$ ) is given by

$$i\frac{\partial}{\partial t}\Phi = H\Phi = E\Phi, \quad (2.1a)$$

$$H = -\frac{1}{2}\left(\frac{\partial^2}{\partial q_1^2} + \frac{\partial^2}{\partial q_2^2}\right) + V(\mathbf{q}) \quad (2.1b)$$

$$\equiv \Pi^*\Pi + V(\varphi^*, \varphi),$$

$$\varphi = \frac{1}{\sqrt{2}}(q_1 + iq_2), \quad \Pi = \frac{1}{\sqrt{2}}(p_1 - ip_2), \quad (2.1c)$$

where  $H$  and  $E$  are the Hamiltonian and its eigenvalue,  $\Pi = -i\partial/\partial\varphi$  and  $\Pi^* = -i\partial/\partial\varphi^*$  are the momentum operators conjugate to the newly introduced spatial coordinate variables  $\varphi$  and  $\varphi^*$ , respectively. The asterisk denotes the hermitian conjugate. The quantization condition reads (we choose the natural unit  $\hbar=1$ )

$$[\Pi, \varphi] = [\Pi^*, \varphi^*] = -i. \quad (2.2)$$

$V(\mathbf{q}) \equiv V(\varphi^*, \varphi)$  is the one-body potential. The potential of the classical HH model takes the form (Hénon and Heiles 1964)

$$V_{\text{HH}}(\varphi^*, \varphi) = \varphi^*\varphi - (\sqrt{2}/p)i^p(\varphi^{*p} + (-\varphi)^p), \quad (2.3)$$

with  $p=3$ . In this case, the second term on the r.h.s. of (2.3) is proportional to  $3q_1^2q_2 - q_2^3$ . The point group symmetry  $C_{3v}$  that involves the reflection  $R$  with respect to  $q_2$  axis, i.e., the interchange  $\varphi \leftrightarrow -\varphi^*$  are obvious. On the other hand,  $O(2) \sim U(1)$  invariance under the global phase change of  $\varphi$  is broken. Irrespective of this breaking, we shall see later that the ‘angular momentum quantum number’ is useful to label the wave functions.

For the wave function, we substitute the function of the form

$$\Phi = Ae^{f(\varphi^*, \varphi)}, \quad (2.4)$$

to the eigenvalue equation  $H\Phi = E\Phi$ , where  $A$  is the normalization constant. We obtain

$$(-\partial_*\partial f - \partial_*f\partial f + V)\Phi = E\Phi. \quad (2.5)$$

(Here and hereafter, abbreviations  $\partial \equiv \partial/\partial\varphi$ ,  $\partial_* \equiv \partial/\partial\varphi^*$  are used.) This implies that if the potential is of the form

$$V = \partial_* \partial f + \partial_* f \partial f + E_0, \quad (2.6)$$

then the function (2.4) is a solution of the eigenvalue equation (2.5) with the energy eigenvalue  $E_0$ . We would like to find  $V$  that is derived from a function  $f(\varphi^*, \varphi)$  through (2.6) and resembles  $V_{\text{HH}}$  as much as possible. In other words,  $V$  should be  $C_{3v}$ -invariant, be bounded from below, be a polynomial in  $\varphi$  and  $\varphi^*$  with as low a power as possible. This procedure resembles solving the well-known inverse problems that aim to find the cause from the effect and are employed in a wide range of research fields (For a review, see, e.g., Groetsch 1999, Samarskii and Vabishchevich 2007). For our purpose, however, we will not need any of the detailed knowledge of the highly technical and complicated the methods. Once  $V$  is found, we will directly solve (2.5) to find the excited states by a simple approximation method.

We adopt the following form for  $f$  as the simplest one

$$f(\varphi^* \varphi) = a(\varphi^* \varphi) - \frac{b}{p} i^p (\varphi^{*p} + (-\varphi)^p), \quad (2.7a)$$

$$a(x) \equiv a_1 x + \frac{2a_2}{p+1} x^{(p+1)/2}, \quad a_2 < 0, \quad (2.7b)$$

where  $p$  is a positive integer in order for the wave function to be single-valued. There are three parameters  $a_1$ ,  $a_2$  and  $b$  that are supposed to be real in this paper. This implies  $f$  is also real. We write the corresponding wave function (2.4) as  $\Phi_0$ . For the normalizability of  $\Phi_0$ ,  $a_2$  must be negative. With this choice for the form of  $f$ ,  $\Phi_0$  consists of infinite number of states with the angular momenta equal to integer multiples of  $p$ .

From (2.6) and (2.7), the potential takes on the form

$$V = E_0 + a_1 + \frac{p+1}{2} a_2 (\varphi^* \varphi)^{(p-1)/2} + a_1^2 \varphi^* \varphi + 2a_1 a_2 (\varphi^* \varphi)^{(p+1)/2} + b^2 (\varphi^* \varphi)^{p-1} - b(a_1 + a_2 (\varphi^* \varphi)^{(p-1)/2}) i^p (\varphi^{*p} + (-\varphi)^p) + a_2^2 (\varphi^* \varphi)^p. \quad (2.8)$$

$V$  is bounded from below for arbitrary  $p > 0$ . We readily see that  $V$  with  $p=3$  is the preferable one to construct an HH-type potential. We restrict ourselves to this case hereafter. All of  $a_1$ ,  $a_2$  and  $b$  contribute to the breaking of  $U(1)$ , which is recovered by setting  $b=0$ . For  $p=3$ , the number of the types of ‘interactions’ is four, while the number of the independent control parameters is three. The effect of this restriction on the number of the control parameters may manifest itself as a special pattern of the energy spectrum. We will come back to this point later. For convenience, we require  $V$  to vanish at the origin. This implies  $E_0 = -a_1$ . In the most part of this paper, the parameters are fixed as  $a_1 = a_2 = -1$ ,  $b = 1$ .

Note that, while the wave function  $\Phi_0$  depends on all the three parameters, the energy  $E_0$  is independent of  $a_2$  and  $b$ . This is also understood by examining the identities :

$$\frac{\partial E}{\partial a_1} = \int (\varphi^* \partial_* f + \varphi \partial f) \Phi^* \Phi d\varphi d\varphi^*, \quad (2.9a)$$

$$\frac{\partial E}{\partial a_2} = \int (\varphi^* \partial_* f + \varphi \partial f + 2) \varphi^* \varphi \Phi^* \Phi d\varphi d\varphi^*, \quad (2.9b)$$

$$\frac{\partial E}{\partial b} = i^3 \int (\varphi^2 \partial_* f - \varphi^{*2} \partial f) \Phi^* \Phi d\varphi d\varphi^*. \quad (2.9c)$$

These are derived from the Hellmann–Feynman theorem together with (2.6) and (2.7). Inserting the form (2.4) for the wave function into (2.9b) and (2.9c) and noting  $\partial f \Phi_0^* \Phi_0 = \partial(\Phi_0^* \Phi_0)/2$  etc, we see that the r.h.s. of (2.9b) and (2.9c) identically vanish for  $\Phi = \Phi_0$ , while the r.h.s. of (2.9a) is equal to minus one.

Fundamental properties of the classical dynamics described by the above Hamiltonian are as follows. There exists seven fixed points in the phase space with zero momentum. Their spatial coordinates are O (0, 0), A (0, 0.3088), B (0.7071, 1.2247) and those obtained by rotations  $2\pi/3$  and  $4\pi/3$  of A and B about the origin in the  $q_1$ - $q_2$  plane. Their total energies are  $E_o=0$ ,  $E_A=-0.0189$  and  $E_B=-1$ , respectively. Eigenvalues of the Jacobian matrix associated with each of these equilibrium points are  $\lambda_o = \pm 1$  (doubly degenerated),  $\lambda_A = \pm 1.435$ ,  $\pm 1.188i$  and  $\lambda_B = \pm 2.449i$ ,  $\pm 4.243i$ , respectively. B is stable, while O (saddle) and A (saddle-centre) are unstable.

There exist regions in the parameter space where classical chaos is observed. The critical energy for the transition from regular to chaotic motion may be  $E_c \approx 0$ . In Fig. 1 we present an example of the Poincare sections of various classical orbits with  $E=0.2$ . We readily admit a sea of chaotic motions surrounding islands of regular (i.e., quasiperiodic) motions.

In Fig. 1, we also present the Poincare sections for  $a_1 = a_2 = -1$ ,  $b=0.1$  and  $E=0.1$ . (The pattern for  $E=1$  is quite similar to that for  $E=0.1$ , which we do not display here.) Being obviously distinct from the result for  $b=1$ , we see that the pattern of the chaotic orbital motions is sensitive to the parameter  $b$ .

For a later use, we show an example of the almost periodic orbit in real space in Fig. 2. The energy is chosen as  $E=46.862$ . (In a two dimensional autonomous system, the orbit that smoothly closes is periodic because of the energy conservation. The orbit in Fig. 2 is ‘almost’ periodic in a sense that finer tunings of the initial condition will improve the orbital pattern toward perfect periodicity.) For the classical orbits in the HH model, Noid and Marcus (1977) have noted two types. One is the ‘precessing’ orbit that keeps  $C_{3v}$  symmetry as a whole. The other is the ‘librating’ orbit that breaks

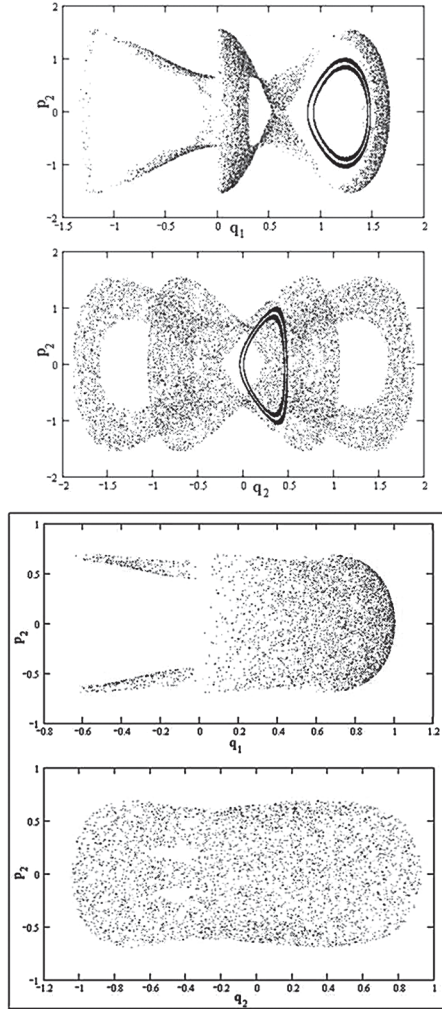


Fig. 1 The Poincaré sections at  $p_1=0$  of orbits with various initial conditions under the potential (8). Upper panel:  $a_1=a_2=-b=-1$  and  $E=0.2$ . Two sheets are superimposed. Lower panel:  $a_1=a_2=-1$ ,  $b=0.1$  and  $E=0.1$ .

$C_{3v}$ . The orbit shown in Fig. 2 corresponds to the former. It is easy to examine by numerical calculations that this orbit is surrounded by dense chaotic orbits.

### 3. Eigenvalue equation

Now let us go back to quantum mechanics and try to seek energy eigenvalues and eigenfunctions of the system (2.1). We write the wave function with the energy eigenvalue  $E$  as

$$\Phi = e^{\mathcal{Q}(\varphi^*, \varphi)} \Phi_0. \quad (3.1)$$

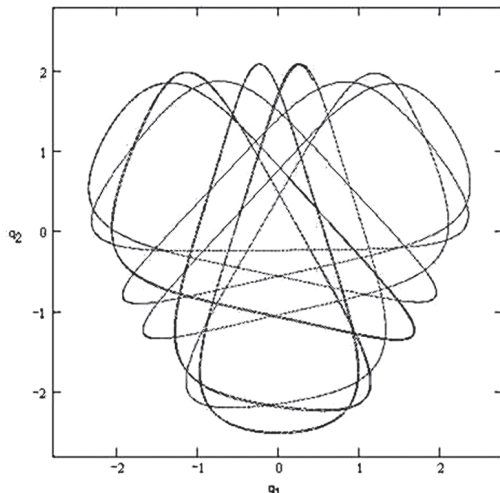


Fig. 2 Unstable (almost) periodic orbit in the time interval  $0 \leq t \leq 1000$  for  $E=46.862$ . The model parameters are  $a_1=a_2=-b=-1$ . Initial condition is  $q_1=2.057555\dots, q_2=p_1=0, p_2=7.218357\dots$

Substituting (3.1) into (2.5), we have

$$\partial \partial_* Q + \partial_* Q \partial Q + \partial_* f \partial Q + \partial f \partial_* Q + \varepsilon = 0, \quad (3.2)$$

where  $\varepsilon \equiv E - E_0$  and  $\partial f = (a_1 + a_2 \varphi^* \varphi) \varphi^* + i^3 b \varphi^2$ .  $Q$  may again involve the states of unlimitedly higher angular momenta via the coupling with  $\varphi^{*p} + (-\varphi)^p$ -term in  $V$ .

For a later convenience, we introduce functions

$$c_{j,k} \equiv (\varphi^j \varphi^{*k} + (-\varphi^*)^j (-\varphi)^k) / 2, \quad s_{j,k} \equiv (\varphi^j \varphi^{*k} - (-\varphi^*)^j (-\varphi)^k) / 2. \quad (3.3)$$

These are products of a power of  $|\varphi|$  and trigonometric functions.  $c_{j,k}$  and  $s_{j,k}$  themselves are eigenfunctions of  $R$  with the eigenvalues  $+1$  and  $-1$ , respectively. Operation of  $c_{0,p}$  in the potential  $V$  on  $c_{j,k}$  and  $s_{j,k}$  increases their indices by  $p$ , e.g.,  $c_{0,p} c_{j,k} = (c_{j+p,k} + c_{j,k+p}) / 2$ . Together with the  $R$  invariance this suggests that the generic eigenstates involve the terms  $c_{j,k}$  ( $R = +1$ ) or  $s_{j,k}$  ( $R = -1$ ) where  $j$ 's (and  $k$ 's) are all equal modulo  $p$ . Furthermore, eigenstates will be doubly degenerated except for  $j=k$  for which  $s_{j,k}$  identically vanishes. Hereafter we restrict ourselves to the case of  $R = +1$ .

Our ansatz for the functional form of  $Q$  is

$$Q(\varphi^*, \varphi) = \alpha(x) + \beta(c_{0,p}) / p + \ln Y_{j,k}(\varphi^*, \varphi), \quad (3.4a)$$

$$Y_{j,k}(\varphi^*, \varphi) = \sum_{j' \geq j, k' \geq k}^{\infty} x^{-j'} L_{(j',k')}(x) c_{j',k'}, \quad x \equiv |\varphi|^2. \quad (3.4b)$$

Summation in (3.4b) is done over all integers  $j'$  ( $\geq j$ ) and  $k'$  ( $\geq k$ ) such that  $k' = k, j' = j$ , modulo  $p$ . Extracting a factor  $x^{-j'}$  in front of  $L_{(j',k')}$  in (3.4b) implies  $j' \leq k'$  in order for a pole-like singularity

in  $Y_{j,k}$  not to appear at  $x=0$ . By writing  $Q(\varphi^*, \varphi)$  in the form (3.4), each of  $\alpha$ ,  $\beta$  and  $L_{(j',k')}$  has been assumed to be a polynomial of  $x$ . In particular,  $L_{(j',k')}$  should not behave as an exponential function ; such a behaviour is expected to have been absorbed into  $\alpha(x)$ .

Note that the decomposition of  $Y$  in the form (3.4b) is not unique because of the identity  $c_{j,k} = x^r c_{j-r,k-r}$  that holds for arbitrary integer  $r$ . In other words, the set  $\{x^r c_{j,k}\}$  is overcomplete and there are some arbitrariness in the functional form of  $L_{(j',k')}$ . We are going to derive a tractable sequence of equations that determine  $\alpha$ ,  $\beta$  and  $L_{(j',k')}$  by making use of this freedom. Since the highest power of  $x$  in  $f$  is two,  $\alpha(x)$  may be at most quadratic in  $x$ .  $\beta$  is a function of  $c_{0,p}$  only. Substituting (3.4) into (3.2), multiplying  $Y$  on both sides of the equation and equating the coefficient of  $c_{j',k'}$  to zero, we have (see the Appendix, where formulae useful for this procedure are given)

$$\begin{aligned} L''_{(j',k')} + \left( \frac{k' - j' + 1}{x} + 2(a' + \alpha') \right) L'_{(j',k')} + \frac{(a' + \alpha')(k' - j') + h}{x} L_{(j',k')} \\ = -(a'(2b + \beta') + a'\beta') \frac{1}{2x} (x^p L_{(j'-p,k')} + L_{(j',k'-p)}) \\ - \frac{2b + \beta'}{2x} \left( x^p L'_{(j'-p,k')} + L'_{(j',k'-p)} + (k' + p)x^{p-1} L_{(j'-p,k')} + \frac{j'}{x} L_{(j',k'-p)} \right), \end{aligned} \quad (3.5a)$$

$$h(x) \equiv \varepsilon + \alpha' + (\alpha'^2 + 2a'\alpha')x + \frac{1}{4}(p\beta'' + \beta'^2 + 4b\beta')x^2. \quad (3.5b)$$

A single (double) prime on functions  $L$ ,  $a$ ,  $\alpha$  and  $\beta$  stands for the first (second) derivative of the function in terms of its variable :  $\alpha' = d\alpha(x)/dx$ ,  $\beta' = d\beta(c_{0,p})/dc_{0,p}$ , etc. These equations look like a perturbative expansion of  $L_{(j,k)}$  in terms of  $b$  and  $\beta$ . The advantage of our method is manifested in (3.5) : it is the recursion differential equation that enables us to determine higher-mode amplitudes of any step from those just one step before. The price one has to pay is that the differential equation is second-order at each step of calculation. However, the equation is linear. In addition, it is easily checked that the equation has normalizable solutions that is consistent with our assumption only when  $\alpha(x)$  is linear in  $x$ , i.e.,  $\alpha' = \text{constant} \equiv \alpha_1$ . This makes the problem quite simple.

We first consider the case of minimum indices on the l.h.s. of (3.5a),  $j' = j$ ,  $k' = k$ . In this case, the r.h.s. vanishes, and we have

$$\begin{aligned} L_{(j,k)}'' + \left( \frac{\ell + 1}{x} + 2(a_1 + \alpha_1) + 2a_2 x \right) L_{(j,k)}' + \left[ \frac{\varepsilon + \alpha_1 + \ell(a_1 + \alpha_1)}{x} + \ell a_2 + \alpha_1^2 + 2a_1 \alpha_1 \right. \\ \left. + \frac{1}{4}(8a_2 \alpha_1 + p\beta'' + \beta'^2 + 4b\beta')x \right] L_{(j,k)} = 0, \end{aligned} \quad (3.6)$$

where  $\ell \equiv k - j$ . The equation (3.6) will have various types of solutions depending on the parameters. We will show that, when  $xL_{j,k}$ -term on the l.h.s. of (3.6) is absent, the solutions can be poly-



mials as was assumed below (3.4) and reveal particularly interesting properties. Hereafter, we restrict ourselves solely to this case.

$xL_{j,k}$ -term is eliminated by requiring  $\beta' = \text{constant} \equiv \beta_1$  and

$$\beta_1 = -2b \pm 2\sqrt{b^2 - 2a_2\alpha_1}. \quad (3.7)$$

Let the degree of the polynomial be  $n$ . Then, writing  $L_{n,\ell} \equiv L_{(j,k)}$ , we rewrite (3.6) as

$$L_{n,\ell}'' + \left(\frac{u_0}{x} + u_1 + 2a_2x\right)L_{n,\ell}' + \left(\frac{v_0}{x} + v_1\right)L_{n,\ell} = 0, \quad (3.8a)$$

$$u_0 = \ell + 1, u_1 = 2(a_1 + \alpha_1), \quad (3.8b)$$

$$v_0 = \varepsilon + \alpha_1 + \ell(a_1 + \alpha_1), v_1 = \ell a_2 + \alpha_1^2 + 2a_1\alpha_1. \quad (3.8c)$$

We expand the solution as  $L_{n,\ell}(x) = \sum_{r=0}^n \zeta_r^{(n,\ell)} x^r$ . Substituting this into (3.8), we have a recursion relation (dropping the suffices  $n$  and  $\ell$ )

$$(2a_2(r-1) + v_1)\zeta_{r-1} + (u_1r + v_0)\zeta_r + (r+1)(r+u_0)\zeta_{r+1} = 0. \quad (3.9)$$

Note that, for  $b = \beta' = 0 = a_2$ , our system is nothing but the two-dimensional harmonic oscillator and (3.9) implies  $L_{n,\ell}(x)$  to be the Laguerre's polynomials (See, e.g., Louck and Shaffer 1960).

$\zeta_r$  must vanish for  $r < 0$  or  $r > n$ . These conditions are assured to be fulfilled by

$$u_0\zeta_1 + v_0\zeta_0 = 0, \quad (3.10a)$$

$$(u_1n + v_0)\zeta_n + (2a_2(n-1) + v_1)\zeta_{n-1} = 0, \quad (3.10b)$$

$$(2a_2n + v_1)\zeta_n = 0. \quad (3.10c)$$

Condition (3.10c) leads to  $2a_2n + v_1 = 0$  or

$$\alpha_1 + a_1 = \pm \sqrt{a_1^2 - a_2(2n + \ell)} \equiv \pm d(n, \ell). \quad (3.11)$$

$\alpha_1$  is real since  $a_2 < 0$ .

Remaining parameters  $u_1$ ,  $v_0$  and  $v_1$  are determined from (3.8b) and (3.8c) as

$$u_1 = \pm 2d(n, \ell), \quad v_0 = \varepsilon - a_1 \pm (\ell + 1)d(n, \ell), \quad v_1 = -2a_2n. \quad (3.12)$$

Accordingly, the recursion relation (3.9) can be cast into an eigenvalue equation for an  $(n+1) \times (n+1)$  matrix

$$W\zeta = (\varepsilon - a_1)\zeta, \quad (3.13a)$$

$$W = \begin{pmatrix} \mp(\ell+1)d(n, \ell) & -\ell-1 & 0 & \cdots & 0 \\ 2a_2 n & \mp(\ell+3)d(n, \ell) & -2(\ell+2) & & 0 \\ 0 & 2a_2(n-1) & \mp(\ell+5)d(n, \ell) & & \vdots \\ \vdots & & & \ddots & -n(\ell+n) \\ 0 & 0 & & \cdots & \mp(\ell+2n+1)d(n, \ell) \end{pmatrix}, \quad (3.13b)$$

where  $\xi = (\xi_0, \xi_1, \dots, \xi_n)^T$  is an  $n+1$  component vector. The double signs for the diagonal components of  $W$  are due to the double signs in (3.11). Since  $\varepsilon - a_1 = E$ ,  $W$  is nothing but the matrix representation of the system's Hamiltonian.

Note that  $W$  does not depend on the coupling  $b$ . This fact leads to a remarkable outcome of our model that the energy spectrum is also independent of  $b$ , provided that the r.h.s. of (3.4b) converges. The whole effect of  $b$  is absorbed into the wave functions. The cause of this result is traced back to the eigenvalue equation (3.2) and the reduction of the number of the control parameters that will be the generic feature of the inverse problem. Our method will also be applicable for  $p \geq 4$ . However, whether this non-dependence on  $b$  really holds, or, equivalently, whether the r.h.s. of (3.4b) always converges under the condition that  $\varepsilon$  is determined by the zeroth step equation (3.8), is an open question. Later on, we shall numerically inspect this convergence for  $p=3$ .

We readily see from (3.13a) and (3.13b) that the positive energy solutions will correspond to the lower sign of the diagonal components of  $W$ . This means that we should choose the minus sign for  $\alpha_1 + a_1$  in (3.11).

In passing, we note that the parameter  $b$  can be extended to complex number without spoiling the validity of the derivation of (3.9) or (3.13). In particular, the energy spectrum remains real for a complex  $b$ . In such a case, the model considered here is regarded as a member of the family of quantum complex potential models (Bender et al. 2001 and references cited therein).

For a given  $n$ , the eigenvalue equation is an algebraic equation of degree  $n+1$ , which yields real roots for  $\varepsilon$  provided that  $\ell \geq -n$ . Among them only the largest real one seems to allow  $L_{n,\ell}$ 's to share the common feature of the orthogonal polynomial system: the components of  $\zeta$  have alternating signs. Furthermore, only in this case the higher modes  $L_{(j+mp, k+m'p)}$  ( $m$  and  $m'$  are zero or positive integers) determined by (3.5) seem to render the series (3.4b) convergent. We have not proved this convergence but assume hereafter.

We label  $\varepsilon$  thus obtained for a given set of  $n$  and  $\ell$  as  $\varepsilon_{n,\ell}$ . These numbers will be related to the customarily used 'principal quantum number'  $N$  and 'approximate angular momentum quantum number'  $l$  by  $n=(N+l)/2$  and  $\ell=(N-l)/2$ ,  $-N \leq l \leq N$  (Louck and Shaffer 1960, Noid and Marcus

1977). Although we have two labels to discriminate the states, no actions exist to be related to them as in integrable systems. In fact, although  $\ell$  has been defined as the minimum value of  $k'-j'$  for the suffix appearing in the expansion (3.4b) of  $Y_{j,k}$ , our starting wave function  $\Phi_0$  already consists of an infinite number of angular momentum states.

The exact expressions of  $\varepsilon_{n,\ell} = E_{n,\ell} + a_1$  for the three lowest  $n$  are easily obtained by directly solving the algebraic equations derived from (3.13). They are given, for  $n=0, 1$  and  $2$ , by

$$\varepsilon_{0,\ell} = a_1 + (\ell + 1)d(0, \ell), \tag{3.14a}$$

$$\varepsilon_{1,\ell} = a_1 + (\ell + 2)d(1, \ell) + \sqrt{-3a_2\ell + a_1^2 - 4a_2}, \tag{3.14b}$$

$$\varepsilon_{2,\ell} = a_1 + (\ell + 3)d(2, \ell) + 2\text{Re}\left[-4a_2 + 4\sqrt{a_2^2 - 4((-3a_2\ell + a_1^2 - 7a_2)/3)^3}\right]^{\frac{1}{3}}. \tag{3.14c}$$

These solutions for the energies are assured to remain positive in the limit of large  $\ell$ . The state  $\Phi_0$  we constructed at the beginning should have the energy  $\varepsilon_{0,0} = 0$  and is identified as the ground state. We may be able to find the explicit form of  $\varepsilon_{3,\ell}$ , too by way of Ferrari's formula.

Unfortunately, it may be impossible to express  $\varepsilon_{n,\ell}$  as an analytic function of  $n$  and  $\ell$ , as is anticipated from the expressions (3.13a~c). Nevertheless, we can guess, from the structure of  $W$ ,  $\varepsilon_{n,\ell}$  to behave as  $\ell^{3/2}$  for large  $\ell$ 's. The large  $n$  behaviour (or, more important equi-energy contours in the  $n$ - $\ell$  space) is not known. The 66 levels for  $0 \leq n \leq 5$  and  $0 \leq \ell \leq 10$  are given in Table 1.

Equation (3.13) is equivalent to the Schrödinger equation of a particle hopping from site to site on an open linear lattice of length  $n$  with the probability amplitude  $\zeta_r$  for the particle to be on the  $r$ th site. In this interpretation, both of the 'potential'  $W_{rr}$  and the 'bond strength'  $W_{rr'}$  ( $r \neq r'$ ) are neither periodic as a regular lattice nor random as the Anderson model for a lattice containing impurities (Anderson 1958, Stöckmann 1999 and references cited therein). This view is parallel to the one presented by Fishman et al. for the kicked rotator model (Fishman et al. 1982) for understanding the dynamical localization (Casati et al. 1979). Owing to this aspect of  $W$ , the amplitude  $\zeta$  will not spread over

Table 1  $\varepsilon_{n,\ell}$  for  $0 \leq n \leq 5$  and  $0 \leq \ell \leq 10$ .

$n$	$\ell$										
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
0	0.0	1.8	4.2	7.0	10.2	13.7	17.5	21.6	26.0	30.6	35.5
1	4.7	7.8	11.3	15.0	19.0	23.3	27.8	32.6	37.6	42.8	48.2
2	11.6	15.6	19.9	24.4	29.1	34.0	39.2	44.5	50.1	55.8	61.8
3	20.2	24.9	29.9	35.0	40.3	45.9	51.6	57.5	63.5	69.8	76.2
4	30.1	35.5	41.0	46.8	52.6	58.7	64.9	71.3	77.9	84.6	91.5
5	41.3	47.2	53.3	59.5	65.9	72.5	79.2	86.1	93.1	100.2	107.5

the lattice nor localize randomly at a number of sites.

#### 4. Energy spectrum and quantum numbers

In order to see the degree of randomness of the system, we draw the distribution of the neighbouring level gap  $S$  in Fig. 3. The energy range is  $0 < \varepsilon < 400$ . Although the number of samples may not be large, they seem consistent with the Poisson distribution usually featured in uncorrelated or integrable systems as Berry and Tabor (1977) have shown within semiclassical theory. Their analysis requires the knowledge of the functional structure of the energy level as a function of actions. Our system is not integrable but the quantum states can be labelled by the well-defined ‘quantum numbers.’ One peculiarity is that there may not be an analytic expression of the energy as a function of the ‘quantum numbers’ as can be guessed from (3.14a)~(3.14c). Probably, the result of the semiclassical analysis is not straightforwardly applied to our system. Rather, our result exhibits the con-

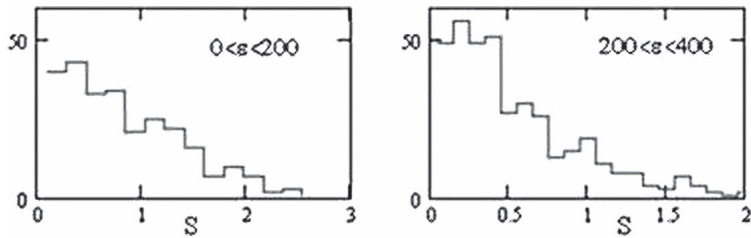


Fig. 3. Distribution of neighbouring level gaps for  $0 < \varepsilon_{n,\ell} < 200$  involving 270 levels (left panel) and  $200 < \varepsilon_{n,\ell} < 400$  involving 381 levels (right panel). The largest  $n$  and  $\ell$  are 23 and 53, respectively.

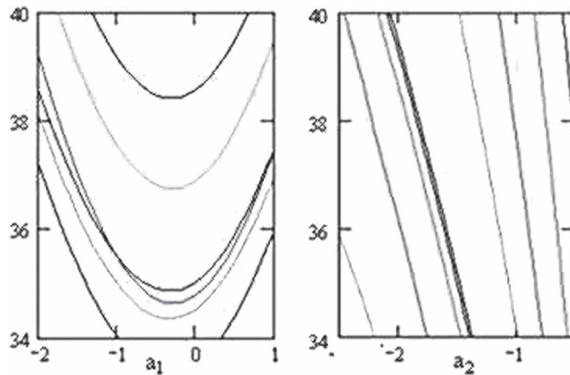


Fig. 4 Parameter dependences of the energy levels in  $34 < E_{n,\ell} \equiv \varepsilon_{n,\ell} + a_1 < 40$ . [Left panel]  $a_1$ -dependences for  $-2 < a_1 < 1$  and  $a_2 = -1$ . Quantum numbers are  $(n, \ell) = (2,5), (3,3), (0,10), (1,4), (1,8)$  and  $(2,6)$  from bottom to top at  $a_1 \approx 0.5$ . The levels  $(0,10)$  and  $(1,4)$  crosses at  $a_1 \approx -1$ . [Right panel]  $a_2$ -dependences for  $-2.5 < a_2 < -0.5$  and  $a_1 = -1$ . Not all levels are displayed. Quantum numbers are  $(n, \ell) = (3,1), (0,8), (1,9), (3,2), (4,0), (2,5), (1,8), (1,9)$  and  $(5,1)$  from left to right.

ceptual consistency with the random matrix theory (Wigner 1951, Mehta 2004): the Poisson and Wigner distributions are the direct reflections of the regularity and randomness of the Hamiltonian, respectively. We have seen in the previous section that our system is not random. Thus we arrived at the most significant conclusion that classical chaos does not necessarily mean quantal Wigner distribution.

In Fig. 4,  $a_1$ - and  $a_2$ -dependences of some energy levels in  $34 < \varepsilon_{n,\ell} < 40$  are plotted. The sensitivity to  $a_2$  is very high as compared to  $a_1$ . The absence of inter-level correlation may also be observed from a level-crossing occurring when  $a_1$  is varied. Although we have not surveyed wider parameter region, this is a rather anticipated result. The model parameter  $b$ , which is responsible for the classical chaos, does not contribute to the recursion relation (3.9) that determines the energy spectrum of the quantal system.

## 5. Wave function

The wave function is a superposition of an infinite number of eigenstates of the angular momentum. It is obtained by solving (3.5) step by step from low to high indices. Suppose  $j' \neq 0$ . Then the term most singular term at  $x=0$  on r.h.s of (3.5a) may be  $\sim j'/x^2$ . The solution will have a power series expansion as  $x^{-\ell'} \sum_{i=0} B_i x^i$  with  $\ell' = k' - j'$ , which causes the resulting wave function to be un-normalizable. Therefore we set  $j' = j = 0$ . Then writing  $k' = \ell + sp$ , dropping the suffix  $j'$  and re-writing  $L_{(j',k')}$  as  $L_{n,\ell+sp}$ , the equation to be solved is

$$\begin{aligned} L_{n,\ell+sp}'' + \left( \frac{\ell+sp+1}{x} + 2(\alpha' + \alpha_1) \right) L_{n,\ell+sp}' + \frac{(\alpha' + \alpha_1)(\ell+sp) + h}{x} L_{n,\ell+sp} \\ = - \frac{2b + \beta_1}{2x} L_{n,\ell+(s-1)p}' - \frac{\alpha_1(2b + \beta_1) + \alpha' \beta_1}{2x} L_{n,\ell+(s-1)p}. \end{aligned} \quad (5.1)$$

This is a linear differential equation with the  $b$ -term now playing the role of the source for  $L_{n,\ell+sp}$  ( $s \geq 1$ ). The general solution is given by a linear combination of a special solution and a solution of a homogeneous equation without the source term. The homogeneous equation has a same form as (3.8a) with  $\ell$  in (3.8a) being replaced by  $\ell + sp$ . Since  $\varepsilon$  has already been fixed by (3.9) and (3.10), the solutions of the homogeneous equation for (5.1) can not be of a finite power series. Therefore, in order for the wave function to be normalizable, the solution of (5.1) must be determined so as for the special solution to be a finite power series under the presence of the source term. This is done by appropriately choosing the boundary condition.

The wave functions for the excited states (i.e.,  $n \geq 1$  or  $\ell \geq 1$ ), including the time dependent phase factor, take the form

$$\Phi_{n,\ell}(\varphi^*, \varphi) = A e^{(2b+\beta_1)c_0 p} \sum_{s=0}^{\infty} \psi_{n,\ell}^{(s)}(\varphi^*, \varphi), \quad (5.2a)$$

$$\psi_{n,\ell}^{(s)}(\varphi^*, \varphi) = L_{n,\ell+sp}(x) c_{0,\ell+sp} e^{-iE_{n,\ell}t + \alpha(x) + \alpha_1 x}, \quad (5.2b)$$

where  $E_{n,\ell} = \varepsilon_{n,\ell} + E_0$  and  $A$  is the normalization factor. Remember that  $\alpha_1$  and  $\beta_1$  are also dependent on  $n$  and  $\ell$ . In particular, since  $\alpha_1$  can be negative and its absolute value can be arbitrarily large,  $\beta_1$  given by (3.7) is generally a complex number. Each of the real and imaginary part of  $\Phi_{n,\ell}$ , having a factor  $\cos(\text{Im } \beta_1 c_{0,p}/p)$  and  $\sin(\text{Im } \beta_1 c_{0,p}/p)$  respectively, can then have an infinite number of nodes in radial direction. The other zeros of  $\Phi_{n,\ell}$  are determined by the terms involving  $L_{n,\ell+sp}$  in (5.2).

Irregularity in the wave function is expected to feature quantum chaos. However, we have to notice that, irrespective of whether the system is classical or quantal, a mere uncorrelated superposition of base functions yields irregular structure of the compounded function with a Gaussian distribution for the amplitude (O'Connor et al. 1987, McDonald and Kaufman 1979). Concerning the present system, the results of calculations by (5.1) are depicted in Fig. 5 for  $n=3$  and  $\ell=5$  as contour maps of

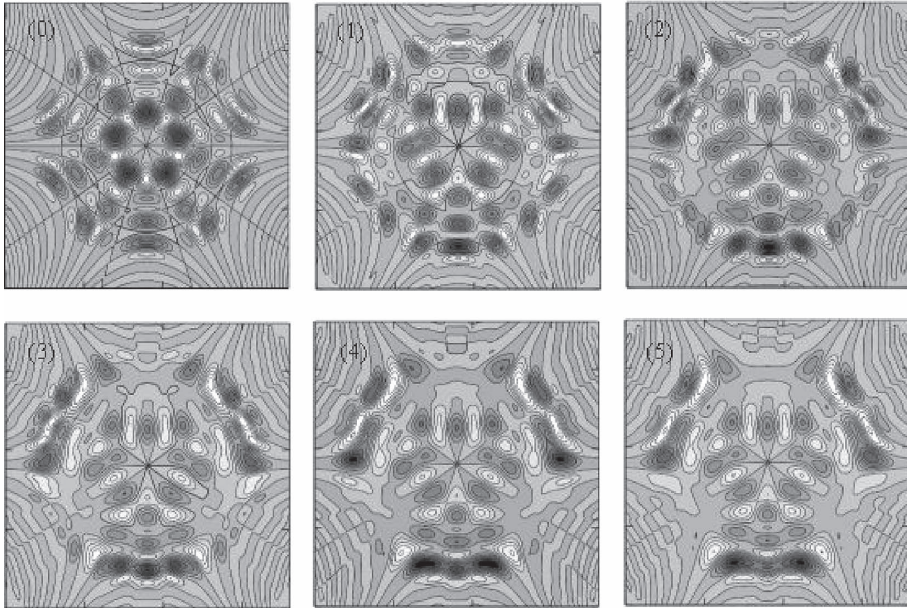


Fig. 5 Contour maps of real part of the wave function  $\text{Re}\Phi_{n,\ell}$  for  $n=3$ ,  $\ell=5$  ( $\varepsilon_{3,5}=45.862$ ) calculated in (5.2a) up to (from upper left to right)  $s=0$  [ $k'=5$ ], 1 [ $k'=5, 8$ ], 2 [ $k'=5, 8, 11$ ], (from lower left to right) 3 [ $k'=5, 8, 11, 14$ ], 4 [ $k'=5, 8, 11, 14, 17$ ], 5 [ $k'=5, 8, 11, 14, 17, 20$ ] in the region  $|q_1| \leq 2.8$ ,  $|q_2| \leq 2.8$ . Light and dark parts are positive and negative, respectively. Contours at peripheral region of each map denote zeros.



the real part of the wave function. We here chose such low quantum numbers since (5.1) involves no approximation and is free from the restriction posed on the semiclassical approximation. The calculations were performed up to the fifth step ( $s=5$ ), namely,  $k'=5, 8, 11, 14, 17$  and  $20$ . The approximate  $C_5$  symmetry observed in the 0th step calculation is gradually lost with the step of calculation and an approximate  $C_{3v}$  symmetry eventually emerges. The traces of the  $C_{3v}$  symmetry of the Hamiltonian are always observed in the peripheral region. Exact  $C_n$  symmetries are violated for all  $n$ , while  $R$  symmetry remains unbroken. At each step of calculations the wave function reveals an obvious pattern, but the final 3-D structure is complex with somewhat irregular pattern of contour and height distribution.

We notice that the pattern in the maps seems to converge as the calculation proceeds to higher steps. More quantitatively, we plot in Fig. 6 the integrations of the square of the absolute value of each term,  $\int |\psi_{n,\ell}^{(s)}|^2 d\varphi d\varphi^*$  with  $n=3$  and  $\ell=5$ , in (5.2) from  $s=0$  to 6. (For convenience, the term with  $s=0$  has been normalized to unity.) Obviously, the higher step contributions get less significant as  $s$  becomes larger. Remember that our principal arguments are based on the assumption that the expansion (5.2) converges. The behaviour of  $\int |\psi_{n,\ell}^{(s)}|^2 d\varphi d\varphi^*$  depicted in Fig. 6 supports the validity of this assumption.

We have seen that, in our model, the energy levels do not depend on the potential parameter  $b$ , i.e.,  $\partial E_{n,\ell} / \partial b = 0$ . According to the Hellmann-Feynman theorem, this differentiation is given by the integration on the r.h.s. of (2.9c). We numerically performed this integration by adopting the finite summations up to the  $s$ -th term in (5.2a) as the approximation to the true wave function :

$$D_{n,\ell}^{(s)} = i^3 \int (\varphi^2 \partial_* f - \varphi^* \partial f) \left| A \sum_{s'=0}^s \psi_{n,\ell}^{(s')}(\varphi^*, \varphi) \right|^2 d\varphi d\varphi^* . \quad (5.3)$$

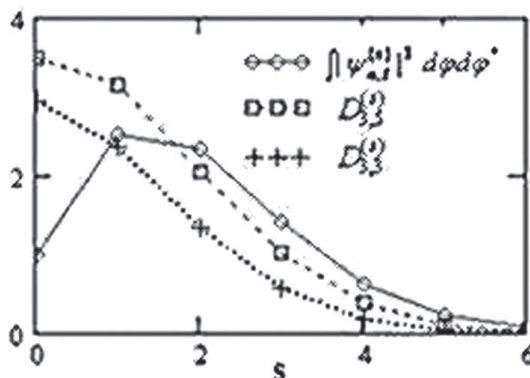


Fig. 6 Circles :  $s$ -dependence of  $\int |\psi_{3,5}^{(s)}|^2 d\varphi d\varphi^*$ . Squares :  $s$ -dependence of  $D_{3,5}^{(s)}$ . Pluses :  $s$ -dependence of  $D_{3,3}^{(s)}$ .

The Hellmann-Feynman theorem states  $\lim_{s \rightarrow \infty} D_{n,\ell}^{(s)} \rightarrow 0$ . The result is also shown in Fig. 6 for  $(n, \ell) = (3, 5)$  and  $(3, 3)$ . We see that  $D_{n,\ell}^{(s)}$  rapidly approaches zero with the increase of  $s$ . This is another support of the assumption of convergence of (5.2).

We have already calculated a classical and periodic orbit with the same energy as the quantum state with  $n=3, \ell=3$  and the result were shown in Fig. 2 Comparing Fig. 5 with Fig. 2, we see that the region of large amplitude of the wave function resembles the pattern of the region traced by the classical periodic orbit in Fig. 2. This feature reminiscent of the ‘scar’ in the correspondence between classical and quantum mechanics is explained in terms of semiclassical analysis of dephasing and cancelling effect of the paths that can not fulfil the generalized Bohr-Sommerfeld quantization condition. The footings to legitimate understanding of this phenomenon have been provided by Heller (1984), Bogomolny (1988) and Berry (1989b) within the semiclassical theory. (Their works were then followed by a large number of studies on the quantum scars, for which we do not cite references here because they are not directly relevant to our present problem. For scars in a smooth and bounded Hamiltonian system, see, e.g., Santhanam et al. (1997).) The semiclassical approximation is expected to be valid for large quantum numbers. However, regarding the self-cancelling of aperiodic bound motion as a universal quantal phenomenon, the appearance of a precursor of the ‘scar’ even at such small quantum numbers as ones taken here may be rather natural. We deem this as the third check of the validity of our calculation scheme.

## 6. Spontaneous symmetry breaking ?

The most striking phenomenon emerges when we take the limit  $b \rightarrow 0$ , in which the Hamiltonian restores the  $O(2) \sim U(1)$  invariance. In this limit, from (3.7) together with (3.11), the symmetry breaking factor in wave function (5.2) survives :

$$\Phi_{n,\ell}(\varphi^*, \varphi) \sim A e^{i\beta_1 c_{0,p}/p}, \quad (6.1a)$$

$$\beta_1 = 2\sqrt{2} |a_2| \left( a_1 + \sqrt{a_1^2 + |a_2|^2 (2n + \ell)} \right). \quad (6.1b)$$

The remaining factor generally yields complex azimuthal angle dependences. Owing to  $c_{0,p} = c_{0,3}$  on the exponent in (6.1), the symmetry  $U(1)$  breaks to  $C_{3v}$ .

We found this solution by allowing the  $U(1)$ -breaking factor  $\beta' = \beta_1$  in (3.5a) be nonzero even when  $b=0$ . In this case,  $\beta_1$  is related to the dynamical model parameters as given by (6.1b). We may call this phenomenon the spontaneous symmetry breaking.

More familiar solutions are obtained by requiring  $\beta_1$  be zero and solving (3.6) for arbitrary  $j$  and  $k$ . This is the equation that is derived by separating the variables for the radial and azimuthal degrees of freedoms. The arguments proceed in a same way as those given below (3.8) and result in the exactly same eigenvalue equation (3.13). Since the equation is separable, the infinite summation over the angular momentum variable in (5.2b) is not necessary to express the eigenfunctions.

To make the correspondence to the separable case more clear, we write down the eigenvalue equation in terms of the radial and azimuthal coordinates  $r$  and  $\theta$  as

$$\left(-\frac{\partial^2}{\partial r^2}-\frac{\partial}{r\partial r}-\frac{\partial^2}{r^2\partial\theta^2}+V(r)\right)\Phi=E\Phi. \quad (6.2)$$

As usual, separating the eigenfunction of the angular momentum, we next write  $\Phi=e^{im\theta}R(r)$  to obtain

$$\left(\frac{d^2}{dr^2}+\frac{d}{rdr}-\frac{m^2}{r^2}-V+E\right)R=0. \quad (6.3)$$

The energies are labelled by the principal and azimuthal quantum numbers  $n$  and  $m$ . Each level is generally doubly degenerated. The degeneracy two is insufficient to produce the complex azimuthal patterns of the wave functions expected to be observed in the case  $\beta_1 \neq 0$ . In order to construct a state with broken symmetry from the solutions of (6.2) and (6.3), we need infinite number of states with distinct  $m$ 's that are equal modulo  $p$  or states with distinct energies that add up to form states which are not the solutions of (6.2).

## 7. Summary and remarks

We formulated the problem of investigating quantum chaos as an inverse problem. We started with choosing a certain wave function to construct a bounded Hamiltonian with  $C_{3v}$  symmetry that shows the classical chaos. We then quantized the system and obtained exact expressions for the algebraic equation that determines the energy levels.

Exact expressions for the levels with small quantum numbers are obtained. Higher levels are calculated numerically. It turned out that the energy spectrum does not depend on the parameter  $b$  that governs the breaking of  $U(1)$  invariance and is responsible for the emergence of classical chaos.

In spite of chaos exhibited in the classical system, the eigenvalue equation for the quantized system involves no randomness and the level spacing seems to obey Poisson distribution. This is understandable by noting that the energy spectrum does not depend on  $b$  and, in the limit  $b \rightarrow 0$ , the system recovers  $U(1)$  and becomes separable.

Our classically chaotic quantum system is marked by the solvability and the Poissonian level distri-

bution, thereby providing a first counter example against the expectation that the level distribution of any classically chaotic system is Poissonian after quantization. These intriguing aspects of our model may be due to the peculiarity of the inverse method employed to construct the simplest class of potential in two dimension.

The iterative method to calculate the wave function of the excited states seems to converge rapidly as long as the model parameters and the low quantum numbers we adopted are concerned. Whether this convergence is assured in the whole parameter space is not known. In particular, the case with  $a_1 > 0$  may be problematic because the energy branch (3.14a) does not yield the correct energy  $E_0 = -a_1$  for  $n = \ell = 0$ . We also expect the feature of our model to persist for other  $C_{3v}$  symmetry with  $p \geq 4$  provided that the iteration method converges.

## Appendix

Here, we collect formulae that are used to derive (3.5) in the text. For brevity, we write

$$\eta_{j',k'} \equiv x^{-j'} L_{(j',k')}(x) \quad (\text{A1})$$

in (3.4b). Performing differentiations, we have

$$\partial_* \partial Y_{j,k} = \sum_{j' \geq j, k' \geq k} \left( \eta_{j',k'} + x \eta_{j',k}'' + (j' + k') \eta_{j',k'} + \eta_{j',k'} \frac{j' k'}{x} \right) c_{j',k'}, \quad (\text{A.2})$$

$$\partial_* \partial Q = \alpha' + \varphi^* \varphi \alpha'' + \frac{1}{p} \partial_* \partial c_{0,p} \beta' + \frac{1}{p} \partial c_{0,p} \partial_* c_{0,p} \beta'' + \partial_* \partial Y_{j,k} / Y_{j,k} - \partial_* Y_{j,k} \partial Y_{j,k} / Y_{j,k}^2, \quad (\text{A.3})$$

$$\begin{aligned} \partial_* Q \partial Q &= x \alpha'^2 + \alpha' c_{0,p} \beta' + \frac{x^{p-1}}{4} \beta'^2 \\ &+ (\varphi \partial Y_{j,k} + \varphi^* \partial_* Y_{j,k}) \frac{\alpha'}{Y_{j,k}} + (\partial_* c_{0,p} \partial Y_{j,k} + \partial c_{0,p} \partial_* Y_{j,k}) \frac{\beta'}{p Y_{j,k}} + \frac{\partial_* Y_{j,k} \partial Y_{j,k}}{Y_{j,k}^2}, \end{aligned} \quad (\text{A.4})$$

$$\begin{aligned} \partial_* f \partial Q + \partial f \partial_* Q &= (a_1 + a_2 x) \left( 2x \alpha' + \beta' c_{0,p} + \frac{1}{Y_{j,k}} (\varphi \partial + \varphi^* \partial_*) Y_{j,k} \right) \\ &+ 2b \alpha' c_{0,p} + \frac{1}{2} b \beta' (\varphi^2 \varphi^{p-1} + \varphi^{*p-1} \varphi^2) + \frac{b}{Y_{j,k}} (\varphi^* \partial Y_{j,k} + \varphi^2 \partial_* Y_{j,k}), \end{aligned} \quad (\text{A.5})$$

$$\begin{aligned} \partial_* f \partial Q + \partial f \partial_* Q &= (a_1 + a_2 x) \left( 2x \alpha' + \beta' c_{0,p} + \frac{1}{Y_{j,k}} (2\eta_{j',k'} + \eta_{j',k'} (j' + k')) c_{j',k'} \right) \\ &+ 2b \alpha' c_{0,p} + b \beta' c_{2,p-1} + \frac{b}{Y_{j,k}} \left( 2\eta_{j',k'} c_{j',k'} c_{0,3} + \frac{\eta_{j',k'}}{x} (k' c_{j'+p,k'} + j' c_{k'+p,j'}) \right). \end{aligned} \quad (\text{A.6})$$

In the above, summations over  $j'(\geq j)$  and  $k'(\geq k)$  are implied. (3.5) is derived by using identities

$$c_{j'+p-1,k'-1} = c_{j'+p,k'} / x, \quad \partial_x \partial c_{j',k'} = j' k' c_{j',k'} / x, \quad \varphi^* \partial_x c_{j',k'} + \varphi \partial c_{j',k'} = (j' + k') c_{j',k'}. \quad (\text{A.7})$$

together with (A.1)

\*This paper had been completed by April 20, 2011 but its publication was delayed due to March 11 earthquake in Japan.

### References

- Anderson P W 1958 *Phys. Rev.* **109** 1492  
 Belot G and Earman J 1997 *Studies in Hist. and Philos. of Mod. Phys.* **28** 147  
 Bender C M, Dunne G V, Meisinger P N and Simsek M 2001 *Phys. Lett. A* **281** 311  
 Berry M V and Tabor M 1977 *Proc. R. Soc. Lond. A* **356** 375  
 Berry M V 1989a *Physica Scripta*. **40** 335  
 Berry M V 1989b *Proc. R. Soc. Lond. A* **423** 219  
 Bogomolny E B 1988 *Physica D* **31** 169  
 Casati G, Chirikov B V, Izlaev F M and Ford J 1979 ‘Stochastic Behaviour of a quantum pendulum under a periodic perturbation’ in *Stochastic Behaviour in Classical and Quantum Hamiltonian Systems* Lecture Notes in Physics **93** 334 Springer Verlag (Berlin)  
 Cremers D and Mielke A 1999 *Physica D* **126** 123  
 Fishman S, Grepel D R and Prange R E 1982 *Phys. Rev. Lett.* **49** 509 ; Grepel D R, Prange R E and Fishman S 1984 *Phys. Rev. A* **29** 1639  
 Ford J, Mantica G and Ristow G H 1991 *Physica D* **50** 493  
 Ford J and Mantica G 1992 *Amer. J. Phys.* **60** 1086  
 Gaspard P, Rice S A, Mikeska H J and Nakamura K 1990 *Phys. Rev. A* **42** 4015  
 Groetsch C W 1999 *Inverse Problems* (The Mathematical Association of America).  
 Heller E J 1984 *Phys. Rev. Lett.* **53** 1515  
 Hénon M and Heiles C 1964 *Astron. J.* **69** 73  
 Louck J D and Shaffer W H 1960 *J. Mol. Spectroscopy* **4** 285  
 McDonald S W and Kaufman A 1979 *Phys. Rev. Lett.* **42** 1189  
 Mehta M L 2004 *Random matrices* (Elsevier Academic Press, Amsterdam, 3rd ed)  
 Noid D W and Marcus R A 1977 *J. Chem. Phys.* **67** 559  
 Noid D W, Koszykowski M L, Tabor M and Marcus R A 1980 *J. Chem. Phys.* **72** 6169  
 O’Connor P, Gehlen J and Heller E J 1987 *Phys. Rev. Lett.* **87** 1296  
 Park Y 2001 *Chaos, Solitons and Fractals* **12** 2161  
 Pechukas P 1983 *Phys. Rev. Lett.* **51** 943  
 Pomphrey N 1974 *J. Phys. B : At. Mol. Phys.* **7** 1909  
 Pullen R A and Edmonds A R 1981a *J. Phys. A : Math. Gen.* **14** L319  
 Pullen R A and Edmonds A R 1981b *J. Phys. A : Math. Gen.* **14** L477  
 Samarskii A A and Vabishchevich P N 2007 *Numerical Methodd for Solving Inverse Problems of Mathematical Physics* (Walter de Gruyter, New York)  
 Santhanam M S, Sheorey V B and Lakshminarayan A 1997 arXiv:chao-dyn/9704002v1  
 Sinai Y G 1970 *Russ. Math. Surv.* **25** 137

- Stöckmann H-J 1999 *Quantum Chaos* (Cambridge Univ. Press) Chap.2
- Takahashi K 2010 *Faculty of Liberal Arts Review*, Tohoku Gakuin Univ. **155** 109  
[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutu/kyoyo\\_155/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutu/kyoyo_155/index.html)
- Takahashi K 2010 *Faculty of Liberal Arts Review*, Tohoku Gakuin Univ. **156** 169  
[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutu/kyoyo\\_156/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutu/kyoyo_156/index.html)
- Weissman Y and Jortner J 1981 *Chem. Phys. Lett.* **78** 224
- Wigner E P 1951 *Proc. Cambridge Phil. Soc.* **47** 790
- Yukawa T 1985 *Phys. Rev. Lett.* **54** 1883





## 【研究ノート】

# 都会の隣人を愛しなさい(2)\*

吉 田 信 彌

## 第2章 都会の隣人は冷淡か？

### 1. ニューヨークの事件

隣人を自分のように愛しなさい、と新約聖書にある。しかし、都会の隣人はとかく冷たい。その冷たさを象徴するような事件が1964年にニューヨークで起きた。キティ・ジェノビーズ(Kitty Genovese)刺殺事件である。キティ(本名はキャサリン)は自分が経営するマンハッタンのバーから車で帰宅し、アパートへ歩く途中で突如刺された。助けを求めて悲鳴をあげたとき住人の一人が犯人を怒鳴りつけた。犯人は一旦彼女から遠ざかったが、再び彼女を襲い、殴り倒して悲鳴をあげる彼女を刺し続けた。それは35分間続いた。そのとき38人のアパートの住人が目撃者となったが、その中で警察に通報したのは1名だけであった。犯人は行方をくらまし、とうとう逮捕されなかった。

まさに人情紙の如し。いかにも薄情な事件ではないか、とアメリカ社会では議論が沸騰した。なぜ誰も助けの手を差し伸べなかったのか。助けに行かないのには、事件に巻き込まれたくないとか、自分に危害が及ぶかもしれない、という理由もある。しかしその一方で、人間として困っている人を助けるべきだ。せめて110番するくらいのことはしてもよいのではないのか。アメリカを創ったピューリタリズムは失われたのか。隣人愛はどこに行ったのか。と憤りと非難の声も止まない。

話題の事件にはさまざまな人がさまざまな説明をする。そのいくつかを紹介しよう。

一つ目は、道徳がいよいよ退廃した、という説明である。昔はこうでなかったのに、と徳が失われた現在を嘆く。昔はよかったとする尚古主義である。昔のほうがほんとうに道徳が高かったかは実は疑問なのだが、物は貧しくとも昔は心が清かったというような論はいつの時代もある。

次は、農業社会から工業社会へと社会が複雑になっていくにつれ、人間が人間らしさを失っ

---

\* 本稿は、前号(教養学部論集158号)に掲載された研究ノート(吉田, 2011)の続編である。

たという説明である。人間らしさを失うことを「疎外」という。この疎外論の祖は『資本論』を書いたマルクスである。マルクスは、人間の作った社会がだんだん人間から人間らしさを奪ってしまうので、共産主義革命によってそのような社会を転覆し、新しい社会を築くべきだ、と主張した。簡単に言えば、社会が人間を薄情にしたというのである。

疎外は難しい言葉である。もともとはヘーゲル哲学の言葉である。疎外によって失われる人間らしさとはどのようなものであるかという問題もある。疎外という概念の難しさ、共産主義の古さ、あるいは革命という血なまぐささに、なじめない人もいるだろう。しかし、それでも、おかしい社会によって人間がおかしくなってしまったのではないかという思いは、都市化が人間を変えていくのではないかという、第1章（吉田，2011）で指摘した不安と通じる。それゆえに、この都会の薄情な事件が人間性を喪失しつつある社会の問題ではないか、と考える人は多い。

社会がばらばらになってしまった、という説明もある。価値観や道徳が社会の構成員の間で一致しない。アメリカ建国当時のピューリタニズムで社会が一体化することはもはやない。いろいろな人がそれぞれの思いを抱き、お互いのつながりがもてない。そうになると他人に手を差し伸べるところか、興味さえ示さなくなる。社会の中に共通の価値観がなく、人が互いにばらばらである状態を社会学者デュルケームは「アノミー」と呼んだ。薄情な事件はそのアノミー状態にあることを示すという論である。

## 2. ダーレイとラタネの仮説

このように諸説が飛び交う中で、ダーレイとラタネは事件が起きたときにそこに居合せた人の数が問題ではないかと考えた（Darley & Latané, 1968）。その事件に立ち会っていたのが一人なら、助けるか助けないかはその人一人が責任を負う。しかし複数の人がいるなら責任は軽くなる。誰かが助けるだろうと、結局助けに向かわなくなる。そして助けなかったと責めを負うのは自分一人ではない。事件に居合わせた人の数が多ければ、責任はますます拡散し、援助へと行動を起こすことは少なくなる、とダーレイとラタネは考えた。

彼らはその考えを実験で証明しようと構想した。先述のような哲学的あるいは社会評論的な論議をしても、ディベートの練習にはなっても決定的な結論を得ることはできない。そこで、誰もが後から確かめることができる実験でもって確かな証拠を提示して、彼らの仮説の正しさを証明しようとした。

彼らの仮説は、助けを求める人がいるという状況に遭遇したときに、周囲にいる人の数が多いほど援助に行かなくなり、援助するにしても行動を起こすまでの時間が遅くなるという

のであるから、実験では何らかの援助を求めるようなトラブルが演出される。そのとき居合わせる人数の増減を操作する。それが実験の独立変数である。従属変数は援助する人の割合と援助の行動を起こすまでの時間である。

### 3. 方 法

彼らが実験に用意したトラブルは癲癇<sup>てんかん</sup>の発作であった。実験室に招かれた被験者は、同じように実験を受けた被験者（実はサクラ）の一人が癲癇発作を起こすという緊急事態に遭遇するように仕組まれた。

**独立変数** 癲癇発作が起きたときに居合わせる人数の条件は、2人（被験者と発作の演技をするサクラの2名）、3人（被験者とサクラのほかに1名）、6人（被験者とサクラのほかに4人）の3条件である。後述するように、条件の男女比などを細分化したが、独立変数の基本は被験者も含めた実験に居合わせた3種類の人数であった。

**被験者数** 2人条件の被験者数は13名、3人条件が26名、6人条件が13名であった。被験者はすべて女子学生であった。

3人が居合わせる条件では、メンバーの条件を変化させ、別途その影響を検討できるようにした。癲癇発作を起こすのは男子学生であるが、女子学生の被験者に対して、居合わせるのが女子学生の場合と男子学生の場合と病院の救急病棟をときどき手伝う医学部の教養過程の男子学生が含まれる場合との3つの条件を設定した。さらに男女差をみるために、被験者が男子学生で、居合わせるのが女子学生という条件を設定した。

被験者はニューヨーク大学の心理学受講生である59名の女子学生と13名の男子学生であった。総数は72名のはずだが、後に65名という記載がある。被験者の総数とその割振りの詳細は読み取りにくかった。有名な論文ではあるが、そうした読み取りにくい記述には注文をつけたい。

**手続き** 被験者は大学生活にある個人的なトラブルについて討論するというふれこみで、集められた。被験者は、廊下づたいに並ぶ個室に一人ずつ案内され、対面では個人的な打ち明け話をしにくいだろうから、討論者同士は互いに匿名にし、討論はインターホンを通して行う、との説明を受けた。

被験者を案内した実験者は「討論を外で聞いている人がいると討論がしにくいでしょう、討論の中身は後でうかがいます」と告げ、その場からは離れ、部屋の外の廊下には誰もいないと被験者が信じるように導いた。それは癲癇発作が起きたときに近くにいる実験者が対処してくれるだろうとの期待や予想を被験者に抱かせないためであった。実験者は不在で、そ

のとき居合わせるのは討論に参加した各部屋の人だけである、と被験者が思う状況にしておいて、そのときに癲癇の演技が始まるように仕組まれた。

インターホン討論では、一人ずつしか意見を述べられない。その間、他は聞き役である。喋っている人以外の人の声は聞こえない。2分くらいで自動的にマイクのスイッチは切れ交代する。一人ずつ自分の大学や大都市での生活の悩みなどを一通り順番に語り、次に各自の悩みに一人ひとりが順番にコメントし、最後はフリーに討論すると説明がされた。実際にはフリー討論編は実施されなかったのだが、告白編、コメント編、フリー討論編の3部構成の討論会であるとの装いがなされた。

告白編の口火を切るのは、やがて癲癇発作の演技をするサクラの被験者であった。それはどの条件でも同じであった。そのサクラは、自分がニューヨークと大学になじむのに苦労していること、そして非常に躊躇しながら、そして明らかに戸惑いながら自分が癲癇持ちであることを語った。その後順番に他の被験者が自分の悩みを告白した。告白した人数によって何人が部屋にいるか、つまりそこに居合わせた人の数がわかった。これが告白編である。

癲癇発作の演技開始は、コメント編の冒頭である。2人が居合わせる条件では、サクラの次に被験者の番となり、その後すぐコメント編に移った。3人条件では、告白編は発作を起こすサクラ、次にもう一人の被験者（実はこれもサクラ）が告白し、最後の告白者が被験者であった。この順番は一定であった。6人条件では発作を起こすサクラに続く、本物の被験者を含む5名の告白の順番はランダムにされた。告白編で真実の告白をするのは被験者1人であった。その告白内容はここでは問題ではない。他の告白はすべて録音であったが、インターホンを通して聞くので被験者はその声の主が部屋にいないとは気づきにくかった。

告白編で癲癇持ちである悩みを打ち明けたサクラに再びマイクが回り、コメント編が始まるところで、サクラは次のような発作の演技を行った。二言三言静かにこれまでの討論についてコメントし、次第に大きな声で支離滅裂になり、途切れがちに助けを求め、最後は息を詰まらせながら、演技の声を止めた。

台詞の声が消えるのはマイクのスイッチが入ってから70秒後であった。125秒後にはマイクが切換わるので、その部屋から音は一切聞こえなくなった。マイクが切換わることを被験者は事前知っていたので、発作の言葉が聞こえなくなり、マイクが切換わるまでの約55秒の間に物音がしないことは、発作を起こした人が依然として在室中であることを意味した。なぜなら、ほかの誰かが発作を起こした病人を運び出しても、病人が自ら部屋を出ても、その物音が聞こえるからであった。

**従属変数** 助けに行く人と行かない人の割合（援助率）とどれだけ早く助けに行くかが従属変数である。6分経っても部屋から出てこない場合は助けなかったと判定したので、発作

開始から被験者が部屋を出るまでの時間が重要であった。

部屋を出た被験者と6分間部屋の中に留まった被験者はその後どうするかというと、部屋を出た被験者は、外で待機していた実験の助手を見つけることができた。部屋に留まった被験者は助手から実験の終了を告げられた。どちらの場合も、助手が事情を説明し、被験者の感情を落ち着かせるようにした。

そして被験者は一定の質問紙への回答が求められた。質問紙には発作が起きたときに思ったことや感じたことを記入した。被験者の個人的な特性を調べるために、マキャベリズム、アノミー、権威主義、社会的望ましさ、社会責任などを測定する16の尺度にわたる調査票が用意された。被験者はそれに回答し、自分の簡単なプロフィールも報告した。

#### 4. 結 果

**演技の信憑性** 被験者が実験者に発作の勃発を伝えたときの様子、実験が演技であったと知らされたときの驚き具合と発作の最中に被験者がつぶやいた内容（マイクを通して録音されていた）の3点から判断して、被験者のほとんど全員が発作を本物とみなした。ほとんどと述べたのは2名の例外があったからである。この2名は先の被験者数には含めなかった。

**居合わせた人数と援助行動** ダーレイとラタネの原典にある FIG. 1 と TABLE 1 をここでは図 2-1 として示した。FIG. 1 の縦軸は助けた人の割合（援助率）、横軸は発作の始まりからの時間経過であった。居合わせる人数の3つの条件（2人=2 pers. 3人=3 pers. 6人=6 pers.）ごとに援助率の推移を示した。

居合わせた人数が増えるにつれ、援助行動が消極的になることが読み取れた。実験の終了

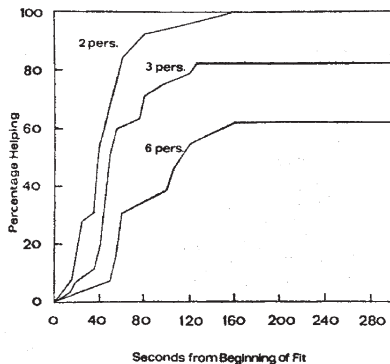


FIG. 1. Cumulative distributions of helping responses.

TABLE 1  
EFFECTS OF GROUPS SIZE ON LIKELIHOOD AND  
SPEED OF RESPONSE

Group size	N	% responding by end of fit	Time in sec.	Speed score
2 (S & victim)	13	85	52	.87
3 (S, victim, & 1 other)	26	62	93	.72
6 (S, victim, & 4 others)	13	31	166	.51

Note.— $p$  value of differences:  $\chi^2 = 7.91, p < .02$ ;  $F = 8.09, p < .01$ , for speed scores.

図 2-1. Darley & Latané (1968) の原典にある結果の図と表

までに発作を通知した人の割合は 2 人条件が 100%, 3 人条件が 81%, 6 人条件が 62% であった (図 2-1 の FIG. 1)。発作の終わらないうちに援助行動を起こした人の割合は、2 人条件では被験者の 85% であった。それが 3 人条件では 62%, 6 人条件では 31% であった (図 2-1 の TABLE 1)。

反応の早さの 1 つの指標に援助を開始するまでの時間の逆数を 100 倍した数値をとった。居合わせた人数が増えるに従い、数値は小さくなった (図 2-1 の TABLE 1)。つまり反応は遅くなった。

なお、援助行動をとった被験者は全員、発作から 3 分内に行動を起こした。発作開始から 6 分間を被験者に与えたが、もっと時間を与えたら助けに行きだす被験者が増えただろうとは考えられなかった。結果からすると 6 分までの必要はなかった。

**居合せたメンバーの構成と援助行動** 3 人条件では被験者が女性の場合と男性の場合を比較したが、男女差はなかった。居合せた (実際には声だけの出演だが) のが女子学生の場合と、男子学生の場合と、医学部の男子学生との条件の差もなかった。3 人条件だけの検討だが、グループの構成メンバーによる効果はみられなかった。

**援助の理由と非介入の理由** 実験が終了し、実験の仕掛けを被験者に説明した後に、被験者に援助行動をした理由、あるいはしなかった理由、発作が起きたときにどんなことが頭に浮かんだかなどを 15 のチェックリストなどで聞いたが、理由の手がかりは得られなかった。

被験者の言葉は少なかった。どの条件の被験者にも一貫した考えはない、との印象をダーレイとラタネはもった。居合せた人数によって行動が明白に異なる結果であったが、被験者自身は他者の存在は自分の行動に影響を与えなかった、と報告した。

**援助行動と個人的特性** マキャベリズムや権威主義などの 16 の尺度の得点と援助に行くまでの時間との相関を検討したが、両者の間にほとんど関係はなかった。態度や性格などの個人的な特性の差異によって援助行動を説明することはできなかった。

## 5. 考 察

### 5-1 責任拡散説

ダーレイとラタネの責任拡散説が結果をもっとも明快に説明した。居合せた人が多ければ、責任は拡散する。そのために人助けは行われにくくなる。

被験者にもグループの構成にも男女差が出なかったのは意外だったかもしれない。それは先行研究の結果と矛盾する。その点をダーレイとラタネは次のように説明した。けんかの仲裁、消火活動、溺れた人の救助は男性的な人助けである。腕力が必要であるし危険が伴う。



しかし通報は女性でもできる人助け（援助行動）である。この実験の救助とは、発作が起きたと誰かに通報することで十分である。したがって、男子学生と女子学生に差が生じなくとも不思議ではない。

人助けをしない冷たさを産業構造や都市化などの社会の変貌から説明する論がある。ダーレイとラタネの実験は、冷淡さを社会のせいにするそれらの論を否定する。もしそうならば、皆が援助行動をしないだろうし、周囲の人数によって影響されることはないはずである、と。

個人差要因、例えば権威主義的か、マキャベリズム的かどうかなどの態度や性格特性の差異によって援助行動が影響されることもなかった。少なくともこの実験で測定した個人差の指標と人助けとは関係がなかった。個人的な特性というよりその置かれた状況、つまりそのとき居合せた人数が主たる要因であった。

くだいていえば、責任拡散説は周囲に人が多いと人は徳をなくすという説である。徳の高さや信心の深さという個人の違いによって人助けをするかどうかが決まるのではない、と責任拡散説は説く。周囲に人が多くいれば、それだけいろいろな人がいるのだから、人助けをする奇抜な人（良きサマリア人）に巡り会える率は高まるのではないか。人数が多いほうが義侠心のある人の出現を期待できるのではないかと考えることもできる。ところが、実験の結果は、人数が多いほうが助けられる率は低くなった。隣人愛が状況に左右されることのない揺るぎない宗教心の発露であってほしいのは宗教家の理想かもしれないが、責任拡散説は、隣人愛はそのときの状況次第である、と教える。そしてその状況の中で決定的なのは周囲に存在する人の数である、と主張する。

## 5-2 行動と言語報告のずれ

誰かがやってくれるだろうと、人任せにしてつい安易な方向に流れる。日常生活でもよくあることである。しかし、この実験の被験者、とくに援助行動を起こさなかった被験者もそのように人任せにしたのだろうか。被験者自身はそれを否定した。他者がいようが、いまいが、あるいは何人いようと、それによって自分が助けるか助けないかは影響を受けなかった、と彼らは実験後に実験者に表明した。

ダーレイとラタネはこの援助行動を取らなかった被験者達との応答から、被験者が気にかけていたのは発作を起こした（と装われた）人であって、それ以外のそこに居合わせた人のことはほとんど考慮していなかった、と報告した。そして、その被験者達は発作を起こした人のことを気遣っていたことから、彼らは決して冷淡で無関心な人間ではなかった、と判定した。

もちろん、その被験者の言葉を鵜呑みにはできない。実験が終わって、実験の仕掛けがわ



かってからの述懐である。助けに行かなかった被験者は誰かが助けるだろうなどと正直に話していくかもしれない。そこに自己弁護的な言い逃れが入る可能性はある。しかし、被験者の言葉はそれほど計算されたものとは思えず、自分で自分の行動を説明できないようであった。

居合わせた人を顧みないのは助けに行った被験者も同じであった。助けに行った人も、行かなかった人もその理由を的確に述べることはできなかった。要するに、被験者達は誰もがよくわからないうちに行動していた。実験の結果は居合わせた人数が行動に影響したことを示すが、当人の意識にはそこに居合わせた人の数は入ってこなかった。

当人の行動とそれについての言語報告とが食い違うことは心理学では珍しくない。人は「言行不一致」(吉田, 2006)である。ニスベットとウィルソンは自分の心理過程についての本人の言語報告が必ずしも実態を明らかにするものでないことを示す優れたレビューを発表した(Nisbett & Wilson, 1977)。その論文にもダーレイとラタネのこの実験が引用された。ダーレイとラタネの研究は、援助行動(helping behavior)に関する責任拡散説という仮説の新しさが脚光を浴びたが、言語報告と行動のギャップを端的に示す例としても注目できる。

では、われわれは人助けをするにしろしないにしろ、その理由をわからないままに行動してしまうのだろうか。自分でも気づかないものに動かされてしまうのだろうか。その点についてダーレイとラタネはどう考えただろうか。

ダーレイとラタネの研究の出発点はキティ・ジェノビーズ刺殺事件の再発防止である。もし他人を助けない無関心が個人的な資質によるなら、それを矯正する方法が対策となる。時代や社会が非人間化を進めるならそれを防ぐことは容易ではない。しかし、援助行動を阻害したのはそのような要因ではなく、その場に居合わせた人数であった。そのときに何人の人がいるかは状況次第である。それは運任せと思えるかもしれないが、もしそういうものだとわれわれが知ったならば、それを克服して人を助けることができるのではないか。真の原因を知ることによってわれわれはわれわれの傾向性を克服し、キティを見殺したような事件を防ぐことができる、というのがダーレイとラタネの見解である。

## 文 献

- Darley, J.M. & Latané, B. (1968). Bystander intervention in emergencies : Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and social Psychology*, **8**, 377~383.
- Nisbett, R.E. & Wilson, T.D. (1977). Telling more than we can know : Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, **84**, 231~259.
- 吉田信彌 (2006). 事故と心理 なぜ事故に好かれてしまうのか 中央公論新社.
- 吉田信彌 (2011). 都会の隣人を愛しなさい 東北学院大学教養学部論集, **158**, 49-62.  
 <[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_158/pdf/kyoyo\\_158\\_04.pdf](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_158/pdf/kyoyo_158_04.pdf)>

【翻 訳】

## 社会学における個人主義リサーチプログラム

—— その発展, 現状, 問題点 ——

カール-データー・オブ 著

久 慈 利 武 訳

【梗概】ケルン大学社会学部での個人主義リサーチプログラム（IRP）の開始からその後の発展、プログラムの基本的考えの解説が提示される。周知のマイクロ-マクロモデル（コールマン・ポート）に基づいて、IRPの問題点が取り上げられ、議論される。適用されるマイクロ理論に関して、合理的行為理論の狭いバージョンの代わりに広いバージョンが採用されるならば、ほとんど問題のないことが語られる。マイクロ-マクロ関係（架橋仮説）が経験的關係の場合には、その仮説は法則ではなく、個別的な因果命題であること、IRPのマイクロ理論（例えば期待効用理論）が採用されることが語られる。本稿は、さらにマイクロ-マクロモデルの変種を取り上げ、集合概念が個人の特性によって再構成されうるという主張が語られる<sup>1</sup>。

### 1. 序論

社会学のIRP（以下ではIA）はGeorge C. Homansの「交換としての社会行動」と題する論文（1958）で基礎が敷かれた<sup>2</sup>。IAはその支持者が他のアプローチに比べて少数派であるものの、社会学では一つの理論的プログラムとして承認されているといっても過言ではない。社会科学のすべてのリサーチプログラム同様、IAもたくさんの批判を浴びせられている。IAに関する批判的な論文を起草するとき人が別な研究プログラムに賛成してプロフィールすることは性急すぎるように思われる。現行の膨大な批判に関して、IAの問題点を明らかにする一つのアプローチがなぜ頻繁に書かれるのか自問するであろう。他のすべての批判的な分析と本稿の違うところは、以下の詳論はIAの敵対者によってでなく、支持者によって

<sup>1</sup> 本稿はHans Joachim HummellがDuisburg-Essen大学を退職し名誉教授号が送られた席で私が行ったスピーチに基づいている。

<sup>2</sup> 個人主義的社会理論プログラムはさらに18世紀のスコットランド道徳哲学にまでさかのぼる。これに関して、詳しくはUdén 2001, Vanberg 1975: Kap. 1を参照。

起草されている点である。したがって、本稿では文献でこれまで論じられてこなかった問題点が取り上げられる。

まず、IA の歴史的な発展から始める。つぎの節では、続く IA への批判の根拠となる IA の基礎テーゼの解説が含まれる。

## 2. ドイツ連邦共和国における個人主義プログラムの開始とその後の展開

本節では、ケルン大学社会学研究所でのドイツ連邦共和国における個人主義プログラムの発展を通じて 70 年代の開始に目が向けられる。これはこれまで論じられてきたことがないので、本節は連邦共和国における社会学史への一つの寄与でもある。さらにここでは、その科学的業績がまだ知られていない二人の若い科学者がいかに、彼らに大きな個人的被害を与えることができたかもしれない極端な立場を提唱したかに関して一つの興味深い事例が取りざたされる。最後に、本節は彼らの若干の中心的な問題が語られるので、IA の批判者にとっても意味がある。

ケルン大学の社会学は 60 年代の初めに René König によって提唱された。König はそのときただ一人の社会学教授であった。多数の協力者がいた。Hummell と本稿執筆者 (Opp) もその中に数えられる。この社会学研究所は König が率いる複数の研究所<sup>3</sup>の一つにすぎない。

この時代における社会学理論の主要な構築者は Talcott Parsons と George Casper Homans であった。マルクス主義と質的勢力はまだ議論の中心に達していなかった。両者のアイデアはすでに研究者の間で集中的に議論されていた。論争は様々な研究所の社会学協力者やグループの間で繰り広げられた。René König はむしろ集合主義アプローチに関連して Emile Durkheim に追随するパーソンズ学派の支持者ないしは少なくとも、パーソンズ社会学に共感者であった。König は Durkheim に精通し、その立場を支持していた。共同研究者の間には、少数の逸脱者がいた。Paul Drewe, Franz Josef Stendenbach がそれに属していた。Rolf Ziegler については私は確信が持てない。少なくとも、彼は Homans によって提唱された個人主義説明プログラムに一定の共感を示していた。これは特に彼のハビリタツィオン (1972) によって確かめられる。それは数理社会学の基本著作に属し、個人主義研究プログラムへの貢献として読むことができる。

König はパーソニアンであったが、Homans の立場を全く無意味と見なしていたようには見えない。さらに König は彼の協力者の間に広い幅の立場を許した。したがって社会学の統

<sup>3</sup> 社会学ゼミナールと中産階級研究所の長も König が務めていた。

一した研究プログラムの意味での社会学のケルン学派は存在しなかった。方法論的個人主義の小さなサークルが発達することができた。

その後、一見したところ自分たちの研究に没頭していたふたりの助手が当時支配的な見方に真っ向から対決する一つの立場を信奉しさらに展開を試みた。われわれ二人は我々の立場の予想される問題点が明らかにされる一つのザッハリッヒな議論が展開されると考えた。我々はそれに賛成する十分な議論が存在するときには科学者は一つの立場を継承するという意見を持ち、我々の議論の方向は正しいと確信していた。それゆえ、我々は駆け引きで予想する仕方で我々のテーマを持ち出し、刺激的な定式化を避けようと努めた。我々は1971年の著書のタイトル「社会学の心理学への還元可能性」特に英文論文のタイトル「社会学なき社会学」が社会学者によって彼らの学問に対する誹謗と受け取られることは予想外のことであった。還元可能性は、我々が社会学を消滅させたがっていることを意味するものと人は信じた(Wurm 1974)。還元の日常的な意味は還元されるものが余計であることを示唆しているように見える。だが我々は「還元」の語でもって、Homans にならって前記の出版物ではっきり強調した「説明」の意味で思念した。社会学の心理学への還元表現は、社会学的マクロ命題のミクロ理論による説明と同義であった。説明は還元される命題が修正されうることを意味した。しかし明らかに同僚の多くは書物のタイトルだけしか読まなかった。今振り返ると、人は数多くの誤解を通じて我々のテーゼとの熱心な対決の中に自らを立たせているのである<sup>4</sup>。

人はIAのその後の展開を眺めるならば、たびたびの批判された初期にもかかわらず、「彼らが今では70年代に比べて比較的高度に受容されている」ことは明白である。これは我々のプログラムの仲間が新たなネガティブ性を保有しない用語で我々のプログラムを表現したり仕上げてきたためである。これはまずいわゆる「変換モデル」によって登場した(Lindenberg 1977; Lindenberg/Wippler 1978; Wippler/Lindenberg 1987)。Raub/Voss は、変換モデルは社会学理論の心理学理論への還元のアイディアの代わりに到来すべき一つの新しい概念である(1981: 11)と語る時、多くの仲間の意見を代弁している。だが、この新しい概念が内容的に我々のプログラムとどこで区別されるのか、Raub/Voss (1981: Kap 2)によって指摘された我々の概念の問題点が「変換モデル」によってどれだけ解決されるのかは不明である。変換モデルにおいては集合的出来事の説明が取りざたされる。さらにミクロ-マクロ関係(これはもはや相応規則ではなく変換規則と呼ばれる、今日では架橋規則について語られる)に

<sup>4</sup> 我々の1971年の著作を論じた後でRaub/Vossによる批判的結論は「社会科学理論の還元は是正もされないし、反証や排除もされないでむしろ現存する理論は保存される」と語る(1981: 82)。これはほとんど無意味な議論であろう。しかし今やその主張は我々の立場と対置され、著者は我々のテーゼと一致しない別な社会科学著作のテーゼに目を向けている。

において、社会学者が興味を示す出来事である社会学的出来事の説明が取りざたされる。期待効用理論のような心理学理論の使用や社会的コンテキストの中での個人行動に関する理論（とりわけ社会心理学者によって定式化され検証されているそれ）が大事である<sup>5</sup>。さらに我々の試みに対する Raub/Voss の批判は Lindenberg の変換モデルにも当てはまるのではないかと。二つの事例が挙げられる。すでにふれたように、社会学仮説の説明に変換モデルは使用される。ここでの社会学はどのように理解されるのか。Raub/Voss は我々が社会学の用語をどのように用いているのかが不明確だと批判しているのだが。また変換モデルの中で社会学仮説が修正されるべきことが承認されている。この修正がどのように遂行されるのか。Raub/Voss は我々がこれを十分に正確に遂行していないと批判しているのだが。我々の研究プログラムの中心テーゼは変換モデルに包摂される、ただしそこで用いられる用語は新しい研究プログラムの発見によって鼓舞されるものと我々は推察する。

否定的に設置した用語の使用と並んで、文章計算、述語計算の初歩的部分だけが、我々が高度の形式論理学を用いたというのは我々の議論のもう一つのセールス上の欠陥である。形式論理学は、我々社会学者の間ではほとんど知られていないので、我々はバーバルに定式化した方がよかった。人は我々の論文と著書（1971：13ff）にミクロ水準とマクロ水準をもついわゆるコールマンポートを見いだすであろう。コールマンとは別に、我々はそのミクロ水準とマクロ水準の分析の関係から出発している。それについては後でもう一度戻る。

さらに我々の出版物は大して影響を及ぼさないのではとは全く考えなかった。我々は我々の主任教授 René König が我々の作品に賛成しないだろうと予想していたものの、草稿を彼に提出した。それは 1971 年の著書の第一の複写であった。我々は 1966 年に二三の人にそれを配布していた。René König は賛成しなかっただけでなく、万事は社会学一般と何ら関係がないと述べた。彼がその草稿をこれ見よがしに紙くず箱に投げ入れたのを記憶している。

何ら議論がなかったのには失望した。我々の議論のどこが間違っているか熱心に探した。

---

<sup>5</sup> Lindenberg (1977) は、これが Hummell/Opp (1971) の考察とどのように区別されるのか、これがどこまで展開されているのか詳しくふれることなく、変換問題に関する自分の考察を繰り返している。彼は我々については単に 2 つの注で批判しているだけである。最初 (1977: 59 注 18) では、理論概念が導入される仕方が問題にされている。しかし、これは集合主義的説明の問題とは無関係で、むしろ理論概念の測定が取り上げられている。次 (1977: 64 注 28) では、彼は還元主義的アプローチは認知的要素を放棄しなければならないこと、集合現象は個人主義的に定義されねばならない（すなわち、ミクロ水準とマクロ水準の間には分析的关系が存在する）ことを主張している。二つの主張は正しくない。自明なことながら、IA においては、個人理論の様式はアプリオリには設定されない (Hummell/Opp 1971: Kap 2 におけるプログラムの定式を参照)。さらに経験的コーディネーション・ルールと分析的それ (Lindenberg の用語では変換ルール) の間に区別がなされる (Hummell/Opp 1971: 17)。最後に Lindenberg では、還元主義の立場では、個人主義仮説の一切の修正可能性が行われないう。これもまた正しくない (Hummell/Opp 1971: 82)。自明なことながら、個人主義理論は間違ふことがあり得る。それゆえ彼の変換モデルと我々の還元モデルの間にはどこに違いがあるかはっきりしない。



おそらく我々が見逃していた議論があった。我々はすべてが社会学でないことを知った。

しかしながら、我々は去らなかつたし、差別も受けなかつた。König は我々のアイデアを若気の過失ないしは短期の過失と見なした<sup>6</sup>。

我々を個人主義の立場を提唱するように駆り立てた議論とは何だったのか。我々がこの立場にどのようにして行き着いたか理解するには、多数のケルンの社会学者が科学理論の十分な知識を持っていたことを知る事が重要である。これは Hans Albert が当時経済学部私講師でいたことと関係する。彼の社会科学の問題についての経済学的分析は広く注目を浴びた。彼の論考と Karl Popper の論考はパーソンズ機能主義の問題点への注目に我々の研究を切り開いた。これに関して Carl G. Hempel (1959), Ernest Nagel (1956) による機能主義の議論構造の分析に出会った。この分析から出発するならば、パーソンズのアプローチではテスト可能で情報を持つ社会科学理論が扱われず、できるだけ明晰性を欲することは余計なこととし、比較的曖昧な教導仮説で貫徹される概念体系が扱われていることが研究成果として明らかになった。これは我々が機能主義に対する Homans の批判を受け入れたことを意味する。

パーソンズに比べて、ホーマンズの仮説と研究グラムは明快である。しかし我々はそのにも次の問題点を見いだした。研究プログラムのテーゼと公準がどのように進められるかが不明である。ホーマンズの分析はたいてい小集団で進められているので、そのプログラムが社会にも適用可能なかどうかという疑問が残る。さらに論じるなら、そのプログラムに賛成と反対どちらの議論が語られるのか。我々はこの問いや別の問いにこれまで存在するものよりもましな回答を与えようと努めてきた。

我々が機能主義や集合主義プログラムをこれ以上展開しようと努めてこなかつたのはどうしてか。我々には個人主義の立場の方が基本的にもっともなものに見えたから。社会変動、社会紛争、戦争、革命、経済成長のような社会現象は個人の行為の結果を表すという中心的考えは我々にはとても納得がいくものである。このテーゼを受け入れるなら、人が個人行為者の行為を説明する際に、社会現象が説明されるということももっともである。

---

<sup>6</sup> 今や私にとって予想外の結果が存在した。完成までもう少しに到達していた、個人主義の立場をその中でも表明していた博士論文提出することは、私にはほとんど有意味に思えなかつた。そのかわり、半年の間に新しい博士論文を書き上げた (1968)。これがそんなに短期で完成できたのは、博士論文の対象がケルンの犯罪に関する生態学的分布に関する長期の研究プロジェクトであり、そのリーダーが当時 König の助手の Fritz Sack であったことだ。取り壊された博士論文の基本的アイデアを私はハビリタツィオン論文で仕上げた (1970)。1967年11月私はケルン研究所を去り、エアランゲン・ニュルンベルグ大学社会学セミナーの研究助手として赴任した。その所長は Karl Gustav Specht であった。その理由は、ケルンにとどまっていたら、『経験的社会調査ハンドブック』(1969年刊行 全2巻)の編集に従事しなければならず、それは非常に消耗することであったからだ。ニュルンベルグでは私はベターな仕事の可能性をもてると思った。ハビリタツィオンがケルンでも可能であったかどうかの問いはもはや提起されない。

ここから出発するなら、次に人は人間の行為をどの理論を通じて説明することができるのかという疑問が浮上する。ここでも人がそれから出発することができる一般的にもっともな理論的アイデアが存在する。ここでもまたホーマンズのアプローチが明白であるように思える。ホーマンズが用いた行動理論は人間の行為がそれと絡んだ利益と損害に関連すると仮定する。これはまた今日の IA の支持者によって用いられる合理的行為理論の基本的仮定でもある。

ホーマンズ以来の IA の展開を眺めるならば、社会学にその立場が確立したと誇張なしにいえる。ほとんど概観できない数の具体的研究と一連の理論的研究が存在する。詳細に立ち入ることはこの紙幅では不可能である<sup>7</sup>。本稿の焦点はドイツ連邦共和国における展開にあるので、Hartmut Esser について集中的に議論された貢献に簡単に触れるべきであろう。Esser は合理的行為理論の新バージョン「フレーム選択理論」を定式化した (2001; Kronberg 2005)。彼の中心目標は理論的統合にある。彼は詳細な分析を通じて、機能主義、システム理論、シンボリック相互行為理論のような様々な理論的立場の基本的アイデアが彼の拡張された合理的行為理論や彼によって提唱される個人主義説明プログラムに決して矛盾せず、両立しうることを明らかにした。最後に Esser は社会的出来事の説明の手續きに取り組み、フレーミングモデルがマクロ現象の説明に用いられている社会学的説明モデルを定式化した。

すべての新たな展開がどのようなかは Esser の貢献が集中的に論じ批判している<sup>8</sup>。Esser の貢献に詳しくふれるには紙幅では不可能である。ここでその根拠を提示することはできないが私自身の立場は、Esser の立場は一連の欠陥を呈しているというものである。この文脈では、本稿の後半で取り上げられる問題点が Esser の立場では解決されないという点が特に重要である<sup>9</sup>。それにもかかわらず、Esser の論考は、比較的狭義の経済学的行動モデルでなく、広い合理的行為理論が用いられる場合の、IA の説明力を証明している。さらに彼は代替理論アプローチのたくさんの理論的アイデアが IA と両立しうるという確信を持っている。

人間の行為はそれと結びついた報酬、費用に左右されるというホーマンズの基本的仮定から出発する合理的行為理論のさらなるバージョンがフレーム選択理論のほかにも存在する。社会学の事例では、R. Boudon の認知主義モデル (1996)、Esser のモデル同様フレームを中心要因に含む Lindenberg の弁別モデル (1993)、V. Vanberg の進化主義の代替肢 (2002)、Hedström の DBO 理論 (2005) がある。これまでのところ、各バージョンの違いに関する

<sup>7</sup> 読者はすでに存在する次のオーバービュー論文を参照すべきである。Diekman/Voss 2004; Hechter/Kanazawa 1997; Voss/Abraham 2000.

<sup>8</sup> たとえば、Etzoldt 2007, 2008; Lüdeman 1996; Greshoff/Schmank 2006; Kron 2004; Kronberg 2008; Opp 2004a; Rohwer 2003.

<sup>9</sup> 人は Esser による変換ルールの試み (Esser 2000: 13ff), さらに以下で取り上げられる問題への試みを比較する。



詳細な議論や総合の試みは不在である。

### 3. 個人主義プログラムの基本的考え

社会学における IA の仮定と公準がどんなものかという問いは文献によってまちまちであり、また往々にして明確に答えられていない<sup>10</sup>。それゆえ人がこの立場を批判する前に、まずこの立場の基本仮定がどのような内容であるか押さえておくことが重要である。もっとも頻繁には、IA は集合的出来事が個人行為の所産であるという仮定によって特徴づけられる。それによれば、集合的出来事が個人行為者の行為によって説明されるべきことが要求される。個人主義、集合主義的社会理論の多数の貢献の詳細な批判的分析を行った Viktor Vanberg は、個人主義社会理論の系譜は、「社会的対立、不統合も社会秩序、統合も個人行為の相互的からまりの中で成長するので、個人行為の結果として説明されうる (1975: 13)」の上に成り立っているとみている。Boudonによれば、方法論的個人主義原理は「社会学者が相互行為システムに巻き込まれている個人ないし個人行為者を自己の分析の論理的アトムと見なす方法ルールに従わねばならない(1982: 52f)」ことを意味する。James Coleman はかれの気に入った説明立場を「システムパーツの行動に依拠することによってシステムの行動を説明すること (1990: 2)」と特徴づけている。

人はあれこれの IA の定式を、すでに Homans によって定式化されたプログラムと比較するならば、今日でもまた Homans によって定式化されたプログラムが提唱されているのが明らかになる。このことがまず以下で略述されるべきである。前記の 1958 年の論文が社会学における IA の最初の中心的文書とみなされべきだが、Homans はここでは彼の論文をほんの暗示的に定式化しているだけである。その論文の末尾で、Homans は社会的交換に関してこれまで定式化された仮説に言及している。「交換の力学に関する諸命題が我々が集団構造と呼ぶ静態のもの、実生活の研究者が語る集団構造に関する命題をいかにして生成することができるかを知って驚く (1958: 606, 597)」。これはまさに IA の基本的考えである。個人行為（ここでは交換）に関する仮説は集合体ないしその特性に関する仮説の定式化のために使用されうる。さきの Vanberg, Boudon, Coleman の引用もこの仕方理解されうる。

Homans は彼の立場を彼の論文「小集団リサーチの戦略」<sup>11</sup>のなかで語っている。Homans が主張するところでは、我々は経済学の戦略、つまり集団に関する命題を個人に関する文章

<sup>10</sup> Kincaid は正しくも次のように述べている。「個人主義と全体主義は移ろう意味合いを持つ悩ましい教義である (1996: 13)」。このプログラムの様々なバージョンは特に次を参照。Udén, 2001; Albert 2005.

<sup>11</sup> 前記の論文の 5 年前に、1953 年 9 月にあるシンポジウムに参加した時の寄稿。1988 年著作第 16 章に再録されている。

の一般体系から引き出すべきである。これは還元主義の立場である。「私は小集団リサーチの諸命題は行動の一般心理学から演繹しうることに気づくであろうと信じているので、自分を究極的心理学還元主義者（恐ろしいフレーズ）と呼ぶ（1988：271）。」

我々はこの言明の若干の含意を観察する。

(1) 説明が関わっていることが大事である。説明される出来事は小集団の特性から社会構造にわたる。それゆえ、集合体とその特性の生起の説明が関わっている。

(2) 説明する仮説が個人の行動に関する一般命題であることがいっそう重要である。それゆえ、集合的出来事に関する仮説が個人行為者に関する一般的仮説によって説明されることが大事である。

(3) Homans は集合体が実在するとか、個人が社会的実在の最終的要素であるかどうかに関しては何も語っていない。社会的世界の究極的構成要素は個々の人々であると主張する J.W.N. Watkins の語っていることを述べるときにこのことは明白になる（1967：61）。

これに関して Homans は次のように語っている。

この争点は何が本当に究極的か、何が本当に実在するかに関する議論で解決されうるとは思っていない。一つには、私は社会制度の実在を否定する立場に戻るつもりはない。多くの理由で、我々はしばしばそのアクトが個人の意思決定の複雑な連鎖の所産であることを知っているときでさえ、製造企業のような社会組織をそれ自身の権利を持つ社会的行為者として扱う。問題は個人が究極的実在であるかどうか、社会行動が諸個人の行動以上の何かを含むかどうかではない。問題は常に、社会現象がどのように説明されうるかである（1967：62）。

IA は集合体とその特性について語ったり、従って集合体に関する仮説を定式化することを可能にする。そのような命題を説明しようとするときに、これは IA に現れる。さらに、この引用文は Homans の目的が集合的出来事を説明することにあつたことを示している。

(4) Homans は、人が集合的出来事に関する仮説が個人行為者に関する一般的仮説によって説明されうるとア priori に想定していない。彼の研究プログラムはむしろ一つの仮説である。引用文の中のある箇所が重要である。つまり我々が個人行動に関する入手可能な仮説を手にするときに、集合的命題は説明されうる。別な箇所で、このことはいっそう明白となる。方法論的个人主義 (IA) と方法論的社会主義の区別は抽象的議論では達せられないと彼は述べている。

未来のある時点で一般的な社会学命題が発見されることが予想される。すべての社会集団、集積に当てはまり、社会現象の説明に大きな力を持ち、心理学命題から引き出されない一般的な社会学命題（1967：63）。

言い換えれば、そのときに IA は反証されうる。

(5) 先の引用文のある箇所、Homans は、「究極的心理学還元主義者」という表現を「恐ろしいフレーズ」と呼んでいる。実際社会学では「還元主義」という表現は罵り言葉である。また社会学を心理学に還元するという要求は社会学者に寒気を催させる。これは Homans が希求したことではないように思われる。彼はこの表現で自分が思念していることを明らかにしている。還元では説明が取りざたされ、心理学は心理学者によって定式化され、経験的に検証された個人行動に関する仮説を指す（1967：39f）。社会学は集合体とその特性に関する命題を指す。Homans は社会学者であるから、彼がその説明に関心を示す集合命題は社会学の仮説であろう。

この基本的考えは今からどのように詳しく把握されるのか。Homans ともうひとりの IA 支持者はまず一つの説明テーゼを提示する。

説明テーゼ：集合体に関する仮説は個人に関する理論によって説明されうるだろう。

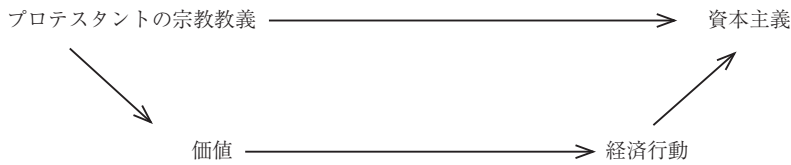
集合体に関する仮説、同じ意味での命題は一般的な意味で集団に関するなにか（家族とか社会システムの均衡）が述べられるときに存在する。それに対して、各人（消費者や政治家）に関する命題は個人命題である。「ある人物の社会階層が高ければ高いほど、彼が処罰をされることはまれである」は個人命題である<sup>12</sup>。それはどんな条件下である出来事が生起するかを述べる時空に縛られない命題つまり一般命題である。

集合的特性を個人行動に関する理論によって説明することは、集合命題が個人理論と付随的仮定から演繹されることを意味する。これについては後にふれる。説明はまた演繹の際に、説明される命題が修正されるものも含む。つまり説明されるべき集合命題がある条件下でのみ妥当するという付随的仮定と理論から引き出されるものも含む。これに関してもまたもう一度ふれる。

社会科学には多数の集合命題が存在する。IA の支持者は検証可能な集合命題を説明するこ

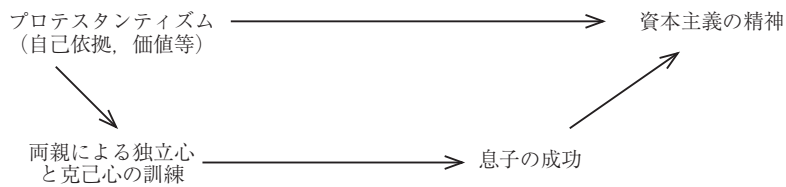
<sup>12</sup> しばしば個人命題は複数のおのおのの個人、つまり個人のカテゴリーを指すことがある。したがって、「人々の社会階層が高ければ高いほど、彼が処罰をされることはまれである」は、各人に関する何か主張されているので、個人命題である。それに対して、例えば犯罪率に関する命題は決して個人命題ではなく集合命題である。というのは、分析単位は広い意味での集団であるから。

1A



出典 Coleman 1990 : 5,8

1B



出典 McClelland 1961 : 47

図 1 集合命題と個人命題の関係

とを求める。人が社会科学に見いだす集合的なものに関する同様な命題は個人理論と付帯的仮定から引き出すことは重視されない。

先だっの営為とそれに続く営為では、次の区別が該当することを強調しておくことが重要である。一方では個人主義アプローチないし個人主義プログラムが大事である。他方では、合理的選択、つまり IA の枠の中で使用される個人理論が係争になっている。この区別は重要である。なぜなら、研究プログラムと個人理論は別々に論じられうるものだから。つまり、IA は生産的であり得るが、用いられる理論は問題をはらむことがあり得る。個人主義プログラムは別の個人理論で実現されうるし、合理的行為理論よりもうまく実現することができる。次のことは、重要な点である。説明テーゼはある個人理論では設定されない。合理的行為理論は個人個人を非常にうまく説明するが、IA は機能しないということが考えられる。使用された合理的行為理論がマクロな出来事ないしマクロな仮説を説明し得ないことが現時点で証明されるべき場合、まずいちど IA が反証される。

集合命題と個人命題の関係をもっと詳しく眺めることにする。集合命題が個人命題によって説明されるべき場合、問題はまず二つの命題が異なった現象を指すことにある。一方には集団ないし集合体が触れられ、他方には個人が触れられている。ミクロ理論による集合特性の説明の際には、両水準の概念が相互に結びつけられねばならない。これは図 1A に示される事例によって例証される。Coleman (1990 : 8) は Max Weber のテーゼ「プロテスタンティズムは資本主義の発達に寄与する」という集合命題から出発する。この命題の説明に使用さ

れる個人理論は「価値が経済行動に影響を与える」ことを述べる。集合命題が個人命題を介して説明されるには、個人理論と集合理論の概念間の関係が樹立されねばならない。この事例では、Colemanによる記述の変数間の関係がすべて経験的な性質のものである(矢印によって示される)ことである。従って説明は、プロテスタンティズムは、プロテスタントの宗教がある価値観念の変化を導き、さらにこれが各個人の経済行動に影響を与えたために、資本主義の発展に寄与したという風に進む。上記の行動様式が資本主義の発達に導いた。

図1Bではこの関係が詳しく定式化されている。この図は McClelland の著作 *Achieving Society* (1961: 47) からの抜粋である。ミクロ水準とマクロ水準の関係はしばしば架橋仮説と呼ばれる。この関連で重要なのは、ミクロ-マクロスキームについての上の描写の中に、架橋仮説が経験的な因果仮説であることが想定されていることである。これについてもなおもう一度ふれる。

IAの支持者は、集合命題が個人命題によって説明されうることを主張するだけでなく、むしろそのような説明が着手されるべきことを要求するものである。従って、次のような説明公準が提示される。

説明公準：集合体に関する仮説は個人に関する理論によって説明されるべきである。

これは「人は自殺すべきでない」という規範のような道徳的要求でなく、次の技術的命題である。「個人理論の使用はより好ましい説明に導き、好ましい説明は科学の目標である」。これがどの程度当てはまるのか。IA支持者の説明公準にとって最も重要な議論と我々の考えるものは以下に解説される。

(1) ミクロ-マクロ説明は純粋なマクロ説明よりも深い説明を与える。その理由はあるマクロ関係が妥当するのはなぜか、あるマクロな出来事が起こったのはなぜかを知ることにあたる。人は集合的出来事に導いたプロセスを個人理論に基づいて知るときに初めてマクロな説明に満足する。例えば、人がマクロ水準で「国家による抑圧増大の際に、抗議が増大すること」を確認するならば、なぜ国家による抑圧(マクロ水準)がたとえ抑圧が一般的に経費がかさむものであっても、個人が初めて頻繁に抗議するように導くのはなぜかを知るときに、初めてその説明に納得するであろう。

(2) 例えば、合理的行為理論のような現行の個人理論は比較的詳細に出来事を説明することができる。つまり、この理論に基づく説明の情報内容は比較的大きい。そこでマクロなアプローチは一般に革命の説明と取り組む。しかし人が合理的行為理論を用いるならば、革

命のたくさんの具体的な属性を詳細に説明することができる。例えば、1989年の東独革命がなぜ武力なしで進んだのか、なぜSED政府が退陣し、抗議者が抑圧されなかったのか、なぜ1989年10月9日に抗議者が立ち上がったのか。

(3) 合理的行為理論の使用（他の個人理論の使用でもかまわないが）のおそらく最も重要な帰結は、個人主義的説明の際に、マクロ仮説が通常は修正されるということであろう<sup>13</sup>。「大集団では、集合財の自発的な準備は見込みが薄い」という仮説は一定の条件下でのみ妥当する。私はこの指摘に後で立ち返る<sup>14</sup>。

(4) IAに賛成の議論として、集合主義的プログラムはこれまで法則命題を提示してきていないことがさらに述べられる。それゆえ、マクロ命題の説明の際に、マクロ法則を用いることが可能でない。したがって、純粋なマクロ説明はアドホックである。なぜなら人は個人理論を使用するから。

(5) 合理的行為理論の独立変数は様々な種類の制約のような具体的な誘因を指す。これは実践するものによって変更される。人がある目標（例えば、少ないエネルギーの使用、もっと多くの環境に優しい行動）を達成したいならば、人が個人の誘因を変更する場合にもっとも容易に達成される。たとえ人が自分が個人主義アプローチを使用している自覚がほとんどなくても、これは政治においてもしばしば起こっている。人は一般的に「IAは集合主義アプローチよりも実践活動に適合的である」ということができる。

(6) さらに、集合主義アプローチには反対に、IAには賛成に、これまでとり扱われてきた議論よりもそれはおそらく確かな（納得がいく）一つの議論が述べられる。「集合主義プログラムの支持者自身がその仮説を個人主義的には説明している」。集合主義者はマクロ仮説の解釈の際に、個人水準にさかのぼっている。しかしながら、これはたいていマクロ関係が信憑性を持たせられるべき場合に、系統的な仕方ではなく、むしろアドホックに現れる。

さらに、集合主義者はまたIAの基本的アイデア、すなわち集合現象は個人行為によって引き起こされることを容認する。これは一つの事例によって例証される。Talcott Parsonsはパーソナリティシステムと社会システムを区別した。両システムは密接に互いに依存している。社会システムは定義上各行為者からなる。そこで、Parsonsは自己の立場を次のように要約している。

<sup>13</sup> これに関してすでにMalewski 1967がある。

<sup>14</sup> これは個人理論がIAの支持者によって基本的に問題のないこと、批判に曝されることのないものと見なしていることを意味しない。例えば、個人理論は集合的出来事の説明に使用される際に、説明項から経験的に虚偽の被説明項が生じる場合には反証される。



可能な限り単純な用語に換言すると、社会システムは少なくとも物理的ないし環境的側面を持つ状況の中で互いに相互行為しあう複数の諸個人からなる。その行為者は満足を最適化する傾向の観点から動機づけられ、（その中にはお互いも含まれる）彼らの状況との関係は、文化的に構造化され、シンボルの共有の観点から定義される（1951：5f）。

換言すると、互いと相互行為しあう諸個人は自分の行為にレリバントな一定の制約（物理的環境的側面を持つ状況）下におかれる。さらに彼は自己の効用を最大化（満足を最適化）しようとする。制約には彼が文化的に構造化されシンボルの共有を獲得する自己の状況に関する情報も含まれる。これは合理的選択理論と両立しうる。しかしながら、Parsonsにおいては、社会システムに関する仮説の演繹のために個人理論の系統的使用が欠けている<sup>15</sup>。

我々はIAのもう一つのテーゼ、再構成のテーゼに転じることにしよう。IAの多くの支持者がすでに挙げたテーゼ「集団は一定の属性を持つ諸個人の集合に他ならない」と結びつく。これは「集団ないしその特性を指す概念の詳細な意味分析はこの概念が個人ないしその関係的特性ないし絶対的特性を指すことを明らかにする」というものである<sup>16</sup>。したがって、ひとは集合概念を社会学の文献から引き出すことができる。人はTalcott Parsonsが社会システム概念、それゆえ集合概念をどのように用いているか、つまり定義の際に、個人やその特性にどのように言及しているか探求できる<sup>17</sup>。多くの集合概念において、個人とその特性に彼が言及しているかどうかは不明である。この事例では、概念の意味を再構成する以外に何ら余分なものはない。つまり、個人への言及が存在するかどうか探求されるだけである。この困難に照らして、定義テーゼでなく再構成テーゼについて語る事が重要である。より詳しくは再構成テーゼは次のように定式化される。

再構成テーゼ：その対象が集合的およびその特性である概念の意味分析は、それが個人およびその特性を指すことを明らかにする。

再構成テーゼもまた、説明テーゼ同様検証されうる。その際、人は集合概念が個人に言及

<sup>15</sup> マルクス主義においても、我々は個人主義プログラムのよき描写と見なすことができる発言を見いだす。「すべてのものが自己の意識的に欲した目的を追求する際に歴史は作られる（Engels 1966[1888] 212f.）」

<sup>16</sup> 絶対的特性はある人物の所得のような一位の述語である。関係的特性は、少なくとも二つの客体が同時に帰属する複数位の述語（例えば person a は person b と相互行為する）である。

<sup>17</sup> これは実際には正しい。「個人が互いに相互行為しさらなる特性を共有するときに、社会システムが存在する（1951：3ff.）」



しているかどうかに基づいて分析されるように進める<sup>18</sup>。

我々は本節で IA の大半の社会学の支持者が今日の時点で提示している IA のプログラムを考察してきた。このテーゼをこの紙幅で検証することは不可能である。ここでは IA から選抜された著作の代表例のなかで、これまでなされたテーゼと議論がどれだけ受け入れることができるか再構成されねばならない。そのような分析が存在する限り、これまでのテーゼから出発することは有意味であるように思われる。IA の多数の変種をここで述べたプログラムと比較し違いを論じることは紙幅では不可能である。またこれは今後の仕事にとって興味深い問いであろう。

上に上げたテーゼは IA の支持者によって承認されているという主張は、IA の支持者間に意見の違いが存在することを排除しない。これは例えば、使用されるべき合理的行為理論のバージョン、質問紙データが IA の仮説のテストによってどれだけ引き寄せられるべきかが該当する。上記のすべては研究プログラムの具体的な形成の問いである。しかし本稿では、このプログラムの基底にあるテーゼが問題にされる。

#### 4. 社会学における個人主義プログラムの若干の問題点

我々は今から我々の注意を社会学における IA の最も重要な今日の問題に転じる。我々はまず次の問を尋ねる。「どちらが可能性のある問題なのか」。図 1 に述べられたマイクロ-マクロ説明の基礎モデルから出発するならば、図 2 は図 1 を含みそれ以上に次の可能性のある問題を含む。

(1) まず、使用されているマイクロ理論が問題とされうる。2つの問題が論じられる。

- 現行の探求成果から出発すれば、その理論は正しいか。
- この理論がたとえば価値のような社会学に関係するすべての出来事を説明できるか。

(2) 次に、マクロな命題は次の問題に取り組むことができるか。文字が含まれる矢印の図はマクロ仮説の独立変数と従属変数の因果関係を指す。

- マクロ命題は実際に因果関係を指すのかそれとも単に相関関係をさすのか。また個別命題が問題とされているのか法則が問題とされているのか。
- 法則が問題とされている場合にはそれは妥当しているのか。
- マクロ命題の説明はどのように詳述されるのか。マクロ水準に問題がある場合、問題は IA の問題ではなく集合主義の立場にある。

<sup>18</sup> これに関しては、Hummell/Opp 1971 : Kap 4 参照。

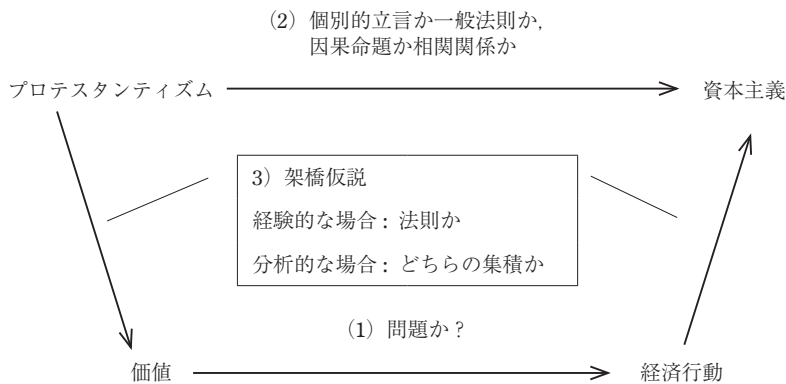


図2 ミクロ・マクロ説明の可能性のある問題

(3) 最後に、架橋仮説問題が提示される。基礎モデルの記述の中で、我々はまずマクロ水準からミクロ水準へ、ついでミクロ水準からマクロ水準へ進む矢印を見いだす（図1、2参照）。しかし架橋仮説がそのような経験的なものであるだけでなく、分析的なものでもあり得ることは疑いがない。犯罪率が決して各個人の犯罪性の作用でないので、ここではむしろ論理的ないし分析的關係が取りざたされている。

架橋仮説が経験的なもの場合には、それが個別命題か法則命題が取りざたされているかが尋ねられる。個別因果命題が存在する場合、この個別命題がそれから引き出されるどの理論が用いられるかが次に問われる。この場合、原因は初期条件と一緒に被説明項に作用する。架橋仮説が法則命題の場合には、用いられる法則はどっちかが尋ねられる。

架橋仮説が分析の場合には、ミクロ水準からマクロ水準への集積がどのように達成されるかが尋ねられる。

#### 4.1 個人理論

IAの批判者は、合理的行為の理論をこのアプローチの問題部分と見なしているように思える。しかしながら、この理論の批判の大部分は誤解である。もっとも普及していると思われる異議は次のものである。この理論は人間が合理的に行為すると仮定しているが、これは事実と一致しないことは明白だ。この議論において合理的で何が思念されているかがまず明確でない。この概念は多数の意味で用いられる。たとえば、人が計算をするという意味、人が（全知全能の第三者の目から見て）客観的に自己の目的の実現にもっとも効率的な手段を使用することを意味する。合理的行為の理論は人間の行為は効用と費用によって条件付けられ、人は自らの目からその状況の最善のものを選ぶ、というだけしか主張していない。人が

客観的に効率的に行為するとか、計算するということは決して仮定されていない<sup>19</sup>。計算することは行動であって、人が計算するときには理論で説明される。これは簡単に言うと、複数がまな板に乗っている場合である (Fazio 1986 ; Esser 2001 のフレーム選択の理論参照)。

以下では我々の注意をもっともしかたも熱心に惹く二つの異議が論じられる。

- (1) この理論は間違っている。
- (2) この理論は重要な社会学に関連する出来事を説明することができない。

(1) 人は合理的行為の理論が特にいわゆる異例を通じて反証されうることにはほとんど疑いを挟まないように思われる。これは合理的行為の理論のある仮定を否定する研究結果である (Tversky/Kahneman ; そのまとめとして Gilovich et al. 2002 ; Plous 1993 ; Thaler 1992)。その異例の一例は sunk costs である。それでもって、過去に生じた行為の一定のサックコストが現在の意思決定の際には考慮されるべきでないということが思念されている。そこで人物 P はオペラ興行の入場券を購入した。つまり彼は一定の費用を被っている。人物 P が辛辣な批判を読み興行を訪れるのを取りやめることを優先したとしよう。過去に費用がすでに支払われているので、合理的行為理論の支持者が言うように、興行を訪れることは非合理的である。つまりサックコストは考慮されるべきでない。この理論から、P の場合入場券が無駄になることが帰結する。多くの人物はそのような場合には、興行を訪れるだろう。なぜなら、彼らは入場券の代金を支払っているから。彼らが入場券をまだ入手していないなら、家にとどまるだろう。つまり描かれた状況では、効用は最大化されていない。サックコストが意思決定の際にしばしば考慮されることが一般的に通用するので、これは合理的行為理論に反する。

ここには実際に合理的行為理論の反証が存在するのか。この質問に対する一般的な回答は困難である。なぜなら、この理論には様々なバージョンが存在するから。人が客観的効用の最大化、完備情報、堅い誘因が持ち出される狭義のバージョンに目を向けると、サックコストの現象は合理的行為の理論に違反する。これは人が広いバージョンを採用した場合にも当てはまるか。ここでは、個人の知覚 (認知信念)、実際に存在する選好 (どんな種類の選好がこれを常に可能とするか) が持ち出される (主観的効用確率理論の使用)。そこでは公正

<sup>19</sup>「経済的アプローチは意思決定ユニットが最大化する彼らの試みを常に自覚しているとか、彼らの行動の系統的パタンの理由をイーフォーマティブな仕方でも口頭で述べることができるということは仮定していない (1976: 7)」ことを Gary Becker は強調した。Becker は同じ見地を代表するものとして Milton Friedman を挙げている。また Herbert Simon の「制約のある合理性」のアイデアはこの見解に合致する。「合理性は全知が不足しているときに制約されている。全知の欠如はだいたい、選択肢のすべてを知ることができない、当該の外生的出来事に関する不確実性、結果を計算できないことの 3 つである (1979: 502)。」

規範のような内面化された規範への抵触（違反）が社会行動の説明のために持ち込まれる費用と結びつけられる<sup>20</sup>。サックコストに関しては、ひとは広いバージョンでは知覚されたコストから出発する。過去に生じたコストが行為者によってコストと見なされるならば、これは決して理論の広いバージョンに違反しないのである<sup>21</sup>。

しかし我々は合理的行為理論への異議が存在するということから出発する。そのような状況には様々な反応が可能である。最善のものは理論を修正するものである。狭い新古典派モデルからの転向はそのような修正の試みの一つである。もう一つの可能性は、その理論を放棄し、もうこれ以上用いないことである。人がもしさらなる議論から反証された理論を排除しようと思うなら、使用されうる社会学理論、社会科学理論は一切存在しないだろう。そのようなラディカルな選択はもっとましな理論が存在する場合か、ある理論が反証されただけで、正しい説明を可能にするものが一切存在しない場合にのみ意味を持つ。したがって、IAの支持者は「合理的行為理論は多数の正しい新種の説明を可能にし、もっとましな理論が見つかるまで、問題があっても、かくも長く使用されてきているのだ」と主張する。

(2) 合理的行為理論はすべての社会学的出来事を説明するのにふさわしいか。理論の従属変数は行為である。だが認知的信念（確率）と選好（つまり価値表象）の説明も興味深い。これは理論の独立変数である。一つの頻繁な異議申し立ては、独立変数を説明する付属理論（二次理論）を欠いているというものである。この異議には次のように対応される。

一つの議論は、別の社会学的アプローチは同様にそのような理論を処理することができない。したがってここでは人はIAが別な社会学的アプローチと中心的な欠陥を共有していることを確認しなければならない。

指名された問題がどのように答えることができるかを吟味することは有意義なことであるように思われる。一方で、合理的行為理論の被説明項は認知と選好が持ち込まれるまで拡張されうる。その際、行為概念も非常に広い意味に用いられる。Max Weberの用語を用いれば、それは外部の所作と内部の所作を包摂する。

<sup>20</sup> 合理的行為理論の狭いバージョンと広いバージョンの特徴に関して次を参照。Opp 1991, 1999. 広いバージョンの提唱者には次のものが属する。Boudon (z.B.1983), Esser (z.B.1999), Goldthorpe (1998), Hedström (2005), Hirschleifer (1985), Simon (z.B.1983). 無意識な心理過程の作用が把握されている心理学の新たな展開 (vgl.z.B. Wilson 2002) は合理的行為の広いバージョンと密接な関係にある。

<sup>21</sup> 広いバージョンに対する標準的な異議は、それがアドホックな仮定に門戸を開く、それはトートロジーだということである。両主張は正しくない。その理由は、科学一般でそうように、誘因の種類、それゆえ初期条件はアドホックに想定されることは許されず、経験的に発見されねばならないからである。さらに、個人の実際の状況から出発し、その変数は大半の社会学者によって、適合的なものと見なされる理論がどれだけ、分析的かあるいはトートロジー的か尋ねられるべきである。詳しくは、Opp 1999.

認知的信念に関しては、「認知の拡張，縮小は当該の認知の効用と費用にかかっている」という仮定が語られる。たとえば，人が罰の確率を誤って少なく見積もった場合，彼がこの仮定に基づいて犯罪を犯し，うまくいくはずの予防対策を失念するならば，この査定はコストの働きをする。この謝った認知の遵守はこの場合高いコストと結びつく。それに対して，同調する人間にとって，その認知はコストの働きをせず，この場合にはかなり誤った信念が存在すると予想するだろう。またある態度ないし選好の変更ないし遵守は効用ないしコストと結びつく。たとえば，人がある人物を非常にネガティブに査定していながら，他方で彼がその人がポジティブに査定する多くの特性を持つことを確認するなら（認知不協和），その人物に対するネガティブな態度はコストの働きをする。従って，態度の変更が期待される。

人が合理的行為理論のそのような拡張に疑惑で対峙するなら，別な社会心理学理論を用いる選択肢もある。選好の説明に関しては，Martin Fishbein/Icek Ajzen の確証された理論がある。また古典的条件付けのような学習仮説も選好の説明に用いることができる。認知の説明に関しては，何ら個別の十分に確証された理論というものは存在しない。ここでは，合理的行為理論の被説明項を拡張する，認知不協和理論かすでに挙げた Hartmut Esser のフレーム選択の理論が視野におかれる。

これまで個人主義プログラムの提唱者は行為（外的所作）の説明にあまりに自己限定してきた。合理的行為理論がどこまで選好と認知的信念の説明に使用できるか，現行の社会心理学理論が IA の中にどこまで取り込めるかに関する詳細な議論や研究が不足している。また様々な社会心理学の議論と合理的行為の理論の統合がこれまでほとんど着手されてこなかった。それゆえ合理的行為理論の独立変数の説明に関して，欠陥が存在することが確かめられねばならない。

#### 4.2 マクロ仮説は相関関係か個別の因果立言か因果法則か非因果法則か

マイクロ-マクロ分析の基礎モデル（図 1）から出発するなら，マクロ立言は因果仮説でなければならない。その場合一方で，「東側の別の国の解放は DDR1989 の革命に影響を与えた」とような個別の因果立言が取りざたされる。しかし他方で，マクロな立言は「集団が大きくなればなるほど，集合財が準備される確率が少なくなる（Olson 1965）」という法則的立言も可能である。

マクロ仮説がマイクロ-マクロモデルによって説明される場合，変数の別の変数への直接の効果が語られている因果立言が取りざたされるということはある得ない。我々は最初の事例を眺める。「政治家ゴルバチョフが実際に DDR（東独）革命の一つの原因であったのか」。このマクロ立言の一つの説明は，「政治家ゴルバチョフは DDR の国民の間の（政治行動へ



の個人の準備を高める) 一定の誘因を変えた」ということのなかにある。これは政治家ゴルバチョフが個人水準に一定の影響を持った(それが今度は革命の生起に寄与した)ことを意味する。つまり、政治家ゴルバチョフは決して直接の因果効果は持たないが媒介変数に働きかけて、DDRの革命の生起に間接的因果効果をもった。

集団の大きさ仮説をみる。M. Olsonの議論は次のように再構成される。

大きな集団では、集合財の準備への個人による貢献のための誘因が比較的小さい。これは個人水準で、かような貢献が供給されない、従って集合財は準備されないことに導く。一方で、ある大きさの集団では、集合財の準備への個人の影響は極端に小さい。これはOlsonが繰り返し強調したことである。他方で、貢献の供給はコストが伴う。したがって、個人は何ら貢献を供給しないだろう。したがって集合財は準備されない。これは集団の大きさが集合財の準備に何ら独自の直接的因果効果を持たないことを意味する。むしろ集団の大きさは貢献の給付の一定の誘因と関連している。またここにも間接効果が存在する。「集団の大きさは個人的誘因を介して貢献の給付に影響している。」

集団の大きさ仮説はなおもう一つの理由で決して因果法則ではない。

先の段落で述べられたこの仮説の説明の際に、この仮説は集団の大きさと個人の誘因の関連に関する一定の仮定とされた。だがこの仮定は何ら法則的立言ではない。したがって、集団の大きさが決して貢献給付を緩和しない事例が存在する。たとえば、個人が共同行為の影響を自らに帰属したり、あるいは別な理由で自己の影響を過大に評価するときには、大きな集団においても知覚される影響力は特に高い。さらに、ある大きな集団において政治的起業家にとって誘因が貢献給付を別な確率にする選択的誘因を供給することがある。そのような状況では、集団の大きさは集合財の準備の確率と負ではなく正の相関をするであろう。マクロ仮説はそれ故因果立言でもなければ、法則的立言でもなく、個別な立言である。

上記の考察から引き出される結論は、マクロ立言は決して因果立言ではないというものである。むしろミクロ-マクロスキームが明らかにするように、間接的影響関係が取りざたされている。これは一見するとありそうもないものにみえる。東ヨーロッパの解放が東ドイツ革命の原因でないというのか。人が説明のミクロな部分を特に重視するときにはこれに賛成するだろう。しかし人がマクロ水準の関係がどのように生起したかを示すときに、マクロ立言は説明される単なる相関にすぎないことが明らかになる。基礎モデル内のマクロ変数間の矢印(図1)は基本的には一つの線で置き換えられる<sup>22</sup>。

このテーゼは、現にあるマクロ法則が追放せしめられることによって覆される。それに対

<sup>22</sup> ここでは、Lazarsfeldの意味での解釈が取りざたされている。つまり変数Xと変数Yの関係が「変数Xが変数Yに影響を与える変数Zに作用する」ことによって説明されている。

して、IA の提唱者は「これまでのところ、そのような法則は発見されてきていない」と主張する。この主張は確かに当たっている。マクロ仮説はそれゆえ個別的立言である。

このテーゼが正しいならば、集合主義的アプローチの提唱者の予想される次の議論に、これは反対するものである。「より深い説明を実現するために、ひとはマクロ仮説を別なマクロ仮説によって説明することができる」。これは集合主義プログラムの一つの目標であるに違いない。マクロ仮説が個別の因果的立言であるといっぺん仮定することにしよう。周知の Hempel-Oppenheim の説明スキーム<sup>23</sup>では、原因は初期条件で、作用は被説明項である。十分な説明に到達するためには、法則が欠けている。これはマクロ水準でのマクロ仮説の十分な説明は可能でないことを意味する。人は単にアドホックに進み、法則の代わりに、多くの状況で誤っている経験的な一般化<sup>24</sup>を用いる。

#### 4.3 架橋仮説は経験的なものか分析的なものか

すでに明らかにしたように、架橋仮説は常に因果仮説であるという基礎モデル (図 1) の前述の仮定は正しくない。IA に関する文献では架橋仮説の種類は通常は論じられない。たとえば、プロテスタンティズムと価値との関係が示すように経験的な種類のものか。これは Max Weber がプロテスタンティズムの倫理の働きについての彼の分析において詳しく証明したように、正しい。予定説に基づく救済の不確信は心理的緊張とつながり、それは職業上の成功が救済のシグナルであることに導く。プロテスタンティズムの教義のある要素はある価値観の発展を帰結する心理過程を進行させた。さらにマイクロ水準での価値はプロテスタンティズム宗教に含まれる命令と同一であることがある。ここにはそれゆえ分析的関係が存在する。経済行動から資本主義への、それゆえマイクロ水準からマクロ水準への移行はどうか。無数の多様な個人行為者の経済行動は我々が資本主義と名付けるものと同一か。それが当てはまらない場合に、マイクロ水準からマクロ水準への移行に関する経験的仮説はどのように語られるのか。この問いにはこれまで答えられてきていない<sup>25</sup>。

<sup>23</sup> Hempel-Oppenheim の説明スキームに関してはもはや見逃すべきでない一つの文献が存在する。その際、十分な説明には法則ないし法則的立言が必要であることが争われている。この論争に立ち入ることは紙幅が許さない。説明スキームに賛成する議論は、法則がなければ説明される出来事の原因がどれであるか明白でないことにある。つまりそれは選択基準を欠いているのである。法則だけが説明される出来事の前にあるいは同時に生起する多数の現象のうちのどれが原因と見なされるかに関する情報を与える。人は法則を放棄するなら、人は現象の原因を正しく同定できるのかと自問する。H-O スキームへの批判者はこの問いに得心のいく回答を何ら与えていない。

<sup>24</sup> 経験的一般化 (「投票率の低さは与党に有利に働く」) のもとに、一般的に定式化されている立言を解する。しかしそれはある条件下でのみ妥当する。

<sup>25</sup> ミクロ-マクロ関係のそのような不明瞭さの別な例を我々は Coleman (z.B.1987, 1990) にも見いだす。分析的架橋仮説と経験的架橋仮説はすでに 70 年代初めに取り上げられている。Hummell/Opp (1971) では、コーディネーション・ルールが用いられている。Lindenberg 1977; Raub/Voss 1981 も参照。この議論は忘れ去られてしまったように思われる。英語圏では、私の知るところでは、似たような議



分析的架橋仮説と経験的架橋仮説の区別はマクロ仮説の具体的説明とその経験的検証の際に中心的意味を持つ。分析的關係が存在する場合、何ら理論は使用されず、何ら経験的な考察も実行される必要はない。しかし、経験的關係が存在する場合、これがどちらの種類のものかそれがどのようにして検証されるのかが尋ねられる。

#### 4.4 分析的マイクロ-マクロ関係の際に集積ルールはどのように働くのか

架橋仮説が分析的である場合、マイクロ水準からマクロ水準への集積がどのように遂行されるべきかを知ることが重要である。犯罪率の場合には単純である。各個人の行為が加算され国の人口のような大きさで引き出される。ここで分析的關係が取りざたされているような、個人の経済行為から資本主義というマクロ属性に人はどうやって到達するか。

ここ (IA) には、マイクロ特性がどのように集積されるかをはっきりと一般的仕方で述べる何ら一般的な方法論的ルールは存在しない。集積は具体的研究において、研究者に固有と思える仕方で起こる。しかしすでに述べたように、その場合、集積の種類は一般的仕方で語ることはできない<sup>26</sup>。

そのような集積についての方法論発達の出発点は Lazarsfeld/Menzel による属性分類であった<sup>27</sup>。それによれば、集合属性は単純な数学的操作（たとえば、平均）によって構築される。この実行は、集積はおそらく一般に非常に単純なので議論は余計に思えるという推論を暗示する。一つの事例の分析がこのテーゼに賛成を示す。佐藤は 1970 年に日本で導入された法律（高齢者が費用なしで医療を受けられる）を議論している。この方策は医療患者の膨大な増加とそれゆえ健康な人の劇的な費用上昇を引き起こした。この法律は 1980 年に撤回された。集合的属性の構成概念「医療給付への需要」は次のように発見された。各高齢者のオプションのゲーム論的分析は、健康な患者の効用の高まり（それゆえ協力でなく裏切り）がベターな選択肢であったことを明らかにした。この状況にはすべてのシナリオが見いだされたので、単純な総計を通じて需要の高まりが生じた。この集積はゲーム理論分析に典型的なものである。ある利得構造がたとえば協力（すべてのプレイヤーが協力する）が一定の結果に導く。一つの均衡が起こるならば、これはプレイヤーの誰一人、相手の所与の行動の際に自分の行動を変える誘因を持たないことを意味する。集合結果として、すべての行為者の均衡

論が存在しない。

<sup>26</sup> Boudon (1980) の中に個人行為がどのようにマクロな結果を引き起こすかを示す興味深い多くの事例を我々は見いだす。事例と一般的種類の分析は Raub/Voss (1981), Esser (1993: 85ff) にも存在する。だが集積の際に人がどんな種類の研究プログラムで、どんな仕方で行くかを詳細に示したマイクロ-マクロ関係の一般的方法論は不在である。集合的事実の説明に関する一般的な手続きに関しては、議論の現状をまとめた Diekmann/Voss (2004: 21f) 参照。

<sup>27</sup> 個人主義プログラムの観点からの議論に関して Hummell/Opp 1971: 35ff 参照。

戦略の組み合わせに数を数えるベクトルが生じる (Diekman/Voss 2004: 23)。つまり、プレイヤーがナッシュ均衡戦略を選択することが予想される。集積は一定の戦略を選択するプレイヤーの数を単に数えあげることから生じる。集合的結果は分析的関係を意味する。均衡はすべてのプレイヤーが一定の仕方で行動することを意味する。

同じく、IA に普及したエージェント・ベーストモデルないしシミュレーションが登場する (z.B. Hedström 2005: Kap. 4)。個人の水準では一定の選好を持ち、多様な制約を課せられる (例えば、様々な人物と相互行為することができる) 行為者から出発し、次にそのような制約ないし選択肢と選好が行為者の活性化にどのような作用を及ぼすかが分析される。手続きはすべての諸個人 (ないし一部) にとって行動変更が予測される点にある。一定の行動手本 (居住区の個人の分布) ないし時間の経過につれての行動の変化 (医療給付への需要の変化) が生じる。よく知られた例は、隣人の肌の色の一定の選好が完全な分離に導く Thomas Schelling (1971) のセグリゲーション・モデルである。分離はその場合、各人の空間の分布である。

IA の著作で用いられている集積ルールに関するメタ分析が仮定されている点が重要である。その際、IA の中心的内容の仕事から出発し、個人属性がどのように集積されるかが解析される。次の段階で、方法ルールとしてのこの集積が一般にどのように定式化されるか追求される。この分析結果がいわゆる職人芸的な理論的経験的分析の際の方法論的道具箱として使用される。しかし結果は、集積が非常に単純なのでそのような方法論は必要ないということがあり得る。

#### 4.5 経験的な架橋仮説は法則かそれとも個別命題か

架橋仮説が経験的仮説であると仮定しよう。我々はまずマクロ水準からミクロ水準への移行を眺める。どのマクロ要因がどのミクロ要因に因果的に作用するかを我々はどこから知るのであるのか。例えば、大きな集団において成員は自分の貢献が集合財の準備にミニマルな効果しか持たないことを我々はどこから知るのであるのか。同一の問いはミクロ水準からマクロ水準への移行の際にも生じる。例えば、ある行為の制裁行使 (ミクロ水準) は社会秩序という集合財の生起に寄与すること、つまり一定の規範が制度化されることを我々はどこから知るのであるのか。経験的架橋仮説がどんな種類のものかを一般的仕方で詳しく述べている論述は何ら存在しない。架橋仮説が個別的な因果の主張である具体的な説明問題に関する論述では、架橋仮説はたいていアドホックに導入されている。プロテスタンティズム (マクロ水準) がある価値観 (ミクロ水準) を変化させたという主張は一つの個別的因果命題である。だが我々は Coleman のなかに、この個別的因果の主張に賛成するどんな法則ないし理論が用いられているかに関

する詳細な実行を何ら見いだすことができない。これは宗教の種類が初期条件に属し、個人の価値観が被説明項であるがゆえ、知ることが大事である。

それゆえ、一般的に次のことが尋ねられる。個別的な架橋仮説ではどちらの理論が引き合いに出されるのか。さらに次のことが尋ねられる。架橋仮説は法則であり得るのか、もしそうであればこれはどのように語られるのか。

この問いにはこれまで一般的仕方で答えられてきていないし、その答えは紙幅を超えるので、以下では事例に基づいてほんの若干の思索だけが持ち出される。我々は架橋仮説は一般に何ら法則ではなく、個別的な因果の主張ないしは経験的一般化であると推測している。これはすでに挙げた集団の大きさが集合財の準備に及ぼす影響に関するそれに当てはまる。この効果はすでにふれたように、ある条件下でのみ妥当する。この事例や他の多くの事例では、ミクロ水準の従属変数は二種類のものである。知覚（確率）つまり信念ないしは選好。換言すれば、マクロ要因の誘因、すなわち合理的行為理論の従属変数への影響を説明している<sup>28</sup>。

すでにふれたようにここでは期待効用理論の拡張版が用いられている。現行の社会心理学理論を持ち出すことも可能である。東欧の解放（マクロ水準）の DDR 市民の知覚された影響の増大への作用は、刺激汎化に関する単純な学習仮説（人は似たような状況の作用を一般化する）によって説明される。ハンガリー、ポーランドにおける抗議が圧政の変更に作用したとき、これはそれらの国だけでなく、DDR にも一般化される。これは、知覚された影響力がどのようにして共同での抗議を引き起こしたかを説明する。もう一つの仮説が個人的に知覚された影響力の上昇を説明するに違いない。ここでは、認知不協和の理論が用いられる。ある人物が集団が成功すると信じているが成員の貢献が不必要だと信じるときには不協和である。高い集合的影響はそれゆえ高い個人的影響力に導く。

ミクロ水準からマクロ水準への移行の際にも、同様のことが当てはまる。ミクロ水準では行為、例えば規範の意味での集合財の準備への個人的貢献が説明されるべきで、マクロ変数が制度化つまり規範の受容（承認）である場合、行為者の態度が説明される。ここでは、例えばすでにふれた Fishbein-Ajzen 理論が用いられる。

一般的には、経験的な架橋仮説は何ら法則命題ではなく、個別的な因果の主張ないし経験的な一般化であると想定することはもっともであるように思える。この説明に、IA においてミクロ理論として個人水準で引き出される個人理論が使用されうるのであろう。このテーゼ

<sup>28</sup> これは一方で DDR における 1989 年秋の抗議の説明によって例証される (Opp et al. 1993)。もう一つの別な例がある。Hedström (2005: Kap 3) は、人物 A が人物 B の誘因を変え、今度はこの誘因がさらに人物 A の行動に影響する仕方で相互行為過程を説明している。人物 A の代わりに、団体行為者をいれてもよい。

が正しいかどうかは、IA に関する現行の著述の詳細な分析が登場しなければならない。その試みはこれまで存在していないものである。

架橋仮説が何ら法則でないとするれば、これはマクロ水準とミクロ水準の関係は一定の条件下でのみ妥当することを意味する。これは集団の大きさ（マクロ水準）と集合財の準備に対する個人的に知覚された影響力の関係に関する仮説にも当てはまる。これが何ら法則でないとするれば、これはこの関係が常に妥当するわけではないことを意味する。大きな集団ではしばしば（例えば革命期）自己の影響力の過信の意味での誤った知覚が起こる。つまり、集団の大きさが知覚された影響力と正の相関をする。たまたまその状況は正しくも知覚される。これは ADAC のような利害集団の成員に妥当する。ここでは成員は彼の年間の貢献を通じて自らが連邦政府の通商政策に影響を与えることができると信じていない。マクロ変数がどのような作用をするかは理論の使用を通じて発見される。

これがもしそうなら、次の帰結をもたらすだろう。架橋仮説の可変性がマクロな従属変数の値もまた状況に応じて変異しうることを導く。従って、マクロな独立変数とマクロな従属変数の相関もまた、マクロな独立変数の当該のミクロ変数への作用に従って変異する。図 3 はこの事態を例証する。我々は図 1 の基礎モデルから出発する。まず我々はマクロ変数がどのように相関しているか未定であると仮定する（図 3A）。今集団の大きさが知覚された個人の影響力を高める状況（マクロ変数のミクロ変数への効果が正である）が生じる。さらに個人の影響力が集合財の準備（ミクロ仮説）に正の効果をもつ。そこから、分析的な集積が生

大きい集団において個人の影響力が高く知覚されるならば (3A)、マクロ水準上の関係は正である (3B)



大きい集団において個人の影響力が低く知覚されるならば (3C)、マクロ水準上の関係は負である (3D)



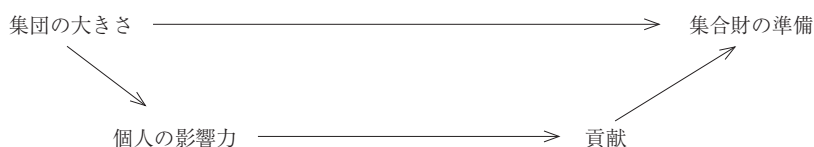
図 3 マクロ-ミクロ関係が異なるごとにマクロ仮説が変化する

じる。集合財が個人による貢献給付の正の関数である。グラフのすべての関係が正ならば、集合水準では相関も正でなければならない。これは図 3A が 3B を含意することを意味する。

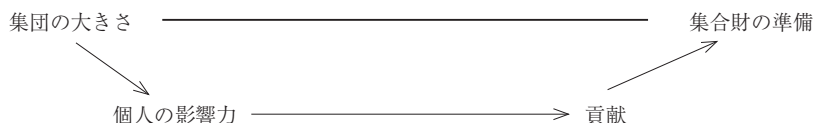
いまから図 3C を眺めることにしよう。再び我々はマクロ水準にどちらの相関が存在するか未定と見なす。いま集団の大きさが知覚された影響力に負の効果をもった。残りの関係のすべては 3A と同じとする。従って、マクロ関係は負であるに違いない (3D をみよ)。図 3B と 3D を比較すると、マクロ水準にある関係はマクロな独立変数のマイクロな独立変数への作用の種類に左右されることが非常にはっきりする。

上の事例はマクロ法則が存在するという仮定が非常に疑わしいことを明らかにした。その理由は、マクロ水準にある関係がマクロ変数がマイクロ変数にどのように作用するかに常に左

基礎モデル



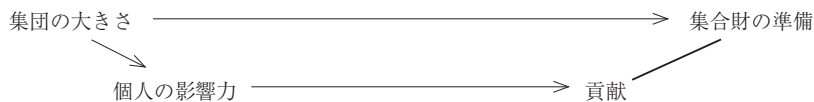
変種 A



変種 B



変種 C



変種 D

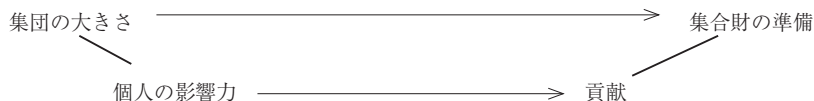


図 4 ミクロ-マクロ関係の基礎モデルの変種

右されるからだ。マクロ-ミクロ関係は何ら法則ではないので、この関係は状況次第で変異する。したがって、マクロ関係もまた状況次第で変異するに違いない。

#### 4.6 基礎モデルの変種についてのまとめ

上記の考察から、図 1 の基礎モデルはほんの一つの可能なミクロ-マクロ説明にすぎないことが明白になった。図 4 は集団の大きさの仮説を用いてあり得る変異を示した。まず基礎モデルがもう一度提示される。マクロ命題は相関であって因果命題ではないところの修正された基礎モデルが変種 A として登場する。マクロ仮説の独立変数とミクロ理論が分析的関係にあるとき、我々は変種 B を獲得する。変種 C では、分析的架橋仮説はミクロ水準からマクロ水準への関係を指す。変種 D では、二つの架橋仮説が分析的種類のものである。ミクロ水準での関係を別として、すべての関係が経験的かあるいは分析的という二つの極端なケースは変種 A と D である。すべての変種において、ミクロ理論は唯一の法則的命題である。

図 4 のモデルは比較的単純である。すべての関係が一つの独立変数と一つの従属変数だけからなっている。実際の研究では具体的な仮説は複雑になっている (z.B. Opp 1992)。だが基礎モデルの多様な変種はミクロ水準とマクロ水準のどの関係が確証されうるかを明らかにする。

#### 4.7 再構成テーゼは必要か

これまでの議論に基づいて再構成テーゼは余分ではないかという推察がなされうるだろう。個人主義プログラムはミクロ-マクロ説明が可能な場合に実現される。その際、図 4 が示すように、架橋仮説が分析的なものないしは経験的なものでありうる。実際には IA に依拠するものの大半は、二つの水準間のなんらかの関係がそれが経験的か分析的かと独立に設定されうる説明に満足している。再構成テーゼが妥当するならば、これは架橋仮説が分析的であることを意味する。それゆえ、再構成テーゼは余計なのか。

しかしながら、前節の我々の議論が妥当するならば、再構成テーゼの妥当性が前提視される。経験的架橋仮説の説明の際に、ミクロ水準におけるのと同じ個人理論が使用されうる。例えば、人が個人理論を通してミクロ水準からマクロ水準への関係に関する架橋仮説を説明したい場合、マクロ特性が個人主義的に再構成できる場合に限ってそれは可能である。その理由はミクロ理論の従属変数は個人行為者の特性であるから。例えば、人が喫煙者への負の制裁行使 (ミクロ水準) がどうにか禁煙の規範の制度化 (マクロな水準) に導くことを前提とするなら、禁煙規範の制度化の際に個人行為者の特性が取りざたされるときに限って、個人理論が使用されうる。換言すれば、ミクロ水準からマクロ水準へ架橋仮説を説明するのに



個人理論が用いられる場合には、再構成テーゼが必要なのである。

マクロ水準からミクロ水準へ関係が扱われている経験的架橋仮説に上記のことは当てはまるのか。我々が集団の大きさ（マクロ水準）が知覚される影響力（ミクロ水準）に及ぼす作用を眺めよう。ここでは認知的信念（ある出来事の知覚）に対するマクロ変数の作用が取り上げられている。知覚の対象が集合的ないしその特性（集団の大きさ）である場合、マクロ変数が個人主義的に再構成されることは必要ない。その理由は、知覚の対象が de-aggregate される必要のない任意の対象であり得るから。一般的には次のことがいえる。一定のミクロ-マクロ説明の際には、再構成テーゼの妥当は不要である。しかしながら、マクロ特性の説明の場合には、集合特性が個人主義的に再構成されることから出発する。

## 5. 総括と今後の課題

これまでの考察は個人主義プログラムの支持者の議論を確認する。これは一連の問題点を明らかにする。本稿の対象は集合主義の立場ではないものの、これまでの議論は集合主義の立場の一連の問題点をも明らかにする。しかしより重要なのは、これまでの議論がアプローチの統合の可能性を明らかにする点である。一つの前提は、マクロの立場の提唱者がマクロな出来事ないしマクロな出来事間の関係を引き起こす個人主義水準のメカニズムを探求すべきことに異議を唱えない点である。この立場の帰結はそのようなメカニズム、それゆえミクロ-マクロ関係が明確にモデル化されることである。

現行の立場は若干の方法上の問題が存在する。ずっと過去にさかのぼり現在まで続く広範な論争には本稿では立ち入ることはできないが、Karl R. Popper と Friedrich A. Hayek のような著者に関する、17世紀とそれ以前の方法論的個人主義に関するやや哲学的な論争<sup>29</sup>。さらには、George C. Homans の著作によって解き放たれた社会学における還元主義に関する前記の論争。その間に社会学や限られた科学には IA の観点から仕事をしたり具体的な説明問題を扱ったもはや無視できない数の理論的、経験的考察が存在する。挙げられた古い論争のテーゼと議論が挙げられた理論と研究の新たな展開によってどれだけ検証され反証されるかを吟味することも重要で興味深い課題であろう。

理論構築と研究の現在の地点から出発するなら、個人主義アプローチの豊穡性に関してどんな一般的総括が下されるか。IA の支持者はこの質問におそらく次のように答えるだろう。IA は一連の問題に取り組むことに異議を唱えるものはいない。それにもかかわらず、IA は

---

<sup>29</sup> たくさんのこの仕事は次に収録されている。O'Neill (1973), また議論に関しては Vanberg (1975)。



他のアプローチに比べて一連の強みを示す。例えば IA は、たくさんの非常に多様な社会的出来事を説明するために用いられる一般的で、情報にとみ、経験的に中身のある検証可能な理論（群）を系統的に使用する唯一のアプローチである。さらに、理論と経験的研究が統合される。合理的行為理論に基づく説明がそのなかで検証される、多数の経験的なりサーチ（実験から質問紙にわたる）が存在する。上記の特質は IA がその説明給付の点で他のアプローチを凌駕していることを示している（z.B.Opp 2004b）。上記の判定は社会科学の目標は経験的に検証可能な説明にあるという前提に由来している。この目標が認められないか多数の中のひとつとしてしか認められないなら、個人主義アプローチの豊穡性に別な判定を下すであろう。

#### 文献一覧

- Albert, G. 2005 “Moderater methodologischer Holismus. Eine weberianische Interpretation des Makro-Mikro-Makro Modells.” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 57 : 387-413.
- Becker, G.S. 1976 *The Economic Approach to Human Behavior*. Chicago : Chicago University Press.
- Boudon, R. 1996 “The Cognitivist Model. A Generalized Rational-Choice-Model.” *Rationality and Society* 8 : 123-150.
- Coleman, J.S. 1987 “Microfoundation of Macrosocial Behavior.” in : J.C. Alexander et al. (Hrsg.) *The Micro-Macro Link*. Berkeley : University of California Press. S. 153-173.
- 1990 *Foundation of Social Theory*. Cambridge, Mass : Belknap.
- Diekman, A./Th. Voss 2004 “Die Theorie rationalen Handelns. Stand und Perspektiven.” in : Dies. (Hrsg.) *Rational-Choice-Theorie in den Sozialwissenschaften*. München : Oldenbourg. S. 13-32.
- Esser, H. 1993 *Soziologie. Allgemeine Grundlagen*. Frankfurt a.M. : Campus.
- 1999 *Soziologie. Spezielle Grundlagen*. Bd.1 : Situationslogik und Handeln. Frankfurt a.M. : Campus.
- 2001 *Soziologie. Spezielle Grundlagen*. Bd.6 : Sinn und Kultur. Frankfurt a.M. : Campus.
- Etzort, C. 2007 “Neuer Entwicklungen in der Handlungstheorie. Ein Kommentar zu den Beiträgen von Kronberg und Kron.” *Zeitschrift für Soziologie* 36 : 364-379.
- 2008 “Über die Unüberwindbarkeit festgefahrener Frames. Eine Entgegnung auf Clemens Kronbergs Erwiderung.” *Zeitschrift für Soziologie* 37 : 271-275.
- Fazio, R.H. 1986 “How Do Attitude Guide Behavior ?” in : R.M. Sorrentino/ F.T. Higgins (Hrsg.) *The Handbook of Motivation and Cognition : Foundation of Social Behavior*. New York : Guniford. S. 204-243.
- 1989 “On the Power and Functionality of Attitudes : The Role of Attitude Accessibility.” in : A.R. Prakanis et al. (Hrsg.) *Attitude Structure and Function*. Hillsdale. N.J. : Erlbaum. S.153-179.
- Friedman, M. 1953 *The Methodology of Positive Economics*. in : M. Friedman (Hrsg.) *Essay in Positive Economocs*. Chicago : University of Chicago Press. S. 3-43.

- Gilovitch, Th./D. Griffin/D. Kahneman (Hrsg.) 2002 *Heuristics and Biases : The Psychology of Intuitive Judgement*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Goldthorpe, J.H. 1998 “Rational Action Theory for Sociology.” *British Journal of Sociology* 49 : 167-192.
- Greshoff, R./U. Schimank (Hrsg.) 2006 *Integrative Sozialtheorie ? Esser-Luhmann-Weber*. Wiesbaden : VS.
- Hechter, M./S. Kanazawa 1997 “Sociological Rational Choice Theory.” *Annual Review of Sociology* 23 : 191-214.
- Hedström, P. 2005 *Dissecting the Social. On the Principles of Analytical Sociology*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Hempel, C.G. 1965 *Aspects of Scientific Explanation and other Essays in the Philosophy of Science*. New York : Free Press.
- Homans, G.C. 1958 “Social Behavior as Exchange.” *American Journal of Sociology* 63 : 597-606.  
 ——— 1967 *The Nature of Social Science*. New York : Harcourt, Brace & World.  
 ——— 1974 *Social Behavior. Its Elementary Forms*. New York : Harcourt, Brace & World.  
 ——— 1988 [1962] *Sentiments & Activities. Essays in Social Science*. New Brunswick : Transaction Books.
- Hummell, H.J./ K.-D. Opp 1968 “Sociology without Sociology. The Reduction of Sociology to Psychology : A Program, a Test, and the Theoretical Relevance.” *Inquiry* 11 : 205-226.  
 ——— 1971 *Die Reduzierbarkeit von Soziologie auf Psychologie. Eine These, ihr Test und ihre theoretische Bedeutung*. Braunschweig : Vieweg.
- Kincaid, H. 1996 *Philosophical Foundations of the Social Sciences*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Kron, T. 2004 “General Theory of Action ? Inkonsistenzen in der Handlungstheorie von Hartmut Esser.” *Zeitschrift für Soziologie* 33 : 186-205.
- Kronberg, C. 2005 “Die Definition der Situation und die variable Rationalität der Akteure. Ein allgemeines Modell des Handelns.” *Zeitschrift für Soziologie* 34 : 344-363.  
 ——— 2008 “Zur Interpretation und empirischen Widerlegbarkeit des Modells der Frameselektion. Eine Erwiderung auf Christian Etzrodt.” *Zeitschrift für Soziologie* 37 : 266-270.
- Lazarsfeld, P.F. 1955 “Interpretation of Statistical Relations as a Research Operation.” in : P.F. Lazarsfeld/M. Rosenberg (Hrsg.) *The Language of Social Research*. Glencoe, Ill : Free Press. S. 115-125.
- Lindenberg, S. 1977 “Individuelle Effekte, kollektive Phänomene und das Problem der Transformation.” in : K. Eichner/W. Habermehl (Hrsg.) *Probleme der Erklärung sozialen Verhalten*. Meisenheim am Glan : Hain. S. 46-84.  
 ——— 1993 “Framing, Empirical Evidence, and Applications.” *Jahrbuch für Neue Politische Ökonomie*. Bd. 12 : 11-38.
- Lindenberg, S./R. Wippler 1978 “Theorienvergleich : Elemente der Rekonstruktion.” in : K.O. Hondrich/J. Matthes (Hrsg.) *Theorienvergleich in den Sozialwissenschaften*. Darmstadt und Neuwied : Luchterhand. S. 219-231.
- Lüdemann, Ch. 1996 “Der eindimensionale Akteure. Eine Kritik der Framing-Modelle von Siegfried Lindenberg und Hartmut Esser.” *Zeitschrift für Soziologie* 25 : 278-288.
- Malewski, A. 1967 *Verhalten und Interaktion*. Tübingen : Mohr.
- McClelland, D.C. 1961 *The Achieving Society*. New York : The Free Press.
- O’Neill, J. (Hrsg.) 1973 *Modes of Individualism and Collectivism*. London : Heinemann.
- Olson, M. 1965 *The Logic of Collective Action*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Opp, K.-D. 1968 *Zur Erklärung delinquenten Verhaltens von Kindern und Jugendlichen. Eine ökologische Analyse der Kinder- und Jugenddelinquenz in Köln und eine Kritik des kriminalekologischen*

- gischen Ansatzes.* München : Verlag des Deutschen Jugendinstituts.
- 1970 *Soziales Handeln, Rollen und soziale Systeme. Ein Erklärungsversuch sozialen Verhaltens.* Stuttgart : Enke.
- 1979 *Individualistische Sozialwissenschaft. Arbeitsweise und Probleme individualistisch und kollektivistisch orientierter Sozialwissenschaften.* Stuttgart : Enke.
- 1991 “Das Modell rationalen Verhaltens. Seine Struktur und das Problem der weichen Anreiz.” in : H. Bouillon/G. Andersson (Hrsg.) *Wissenschaftstheorie und Wissenschaftslehre. Festschrift für Gerard Radnitzky aus Anlass seine 70. Geburtstages.* Berlin : Duncker & Humblot. S. 105-124.
- 1992 “Micro-Macro Transition in Rational Choice Explanations.” *Analyse & Kritik.* 14 : 143-151.
- 1999 “Contending Conceptions of the Theory of Rational Action.” *Journal of Politics.* 11 : 171-202.
- 2004a “Review Essay. Hartmut Esser : Textbook of Sociology.” *European Sociological Review.* 20 : 253-262.
- 2004b “Die Theorie rationalen Handelns im Vergleich mit alternativen Theorien.” in : M. Gabriel (Hrsg.) *Paradigmen der akteurszentrierten Soziologie.* Wiesbaden : VS. S. 43-68.
- 2007 “Review Essay. Peter Hedström : Dissecting the Social.” *European Sociological Review* 23 : 115-122.
- Opp, K-D./P. Voss/C. Gern 1993 *Die volkseigene Revolution.* Stuttgart : Klett-Cotta.
- Parsons, T. 1951 *The Social System.* Glencoe, Ill. : Free Press.
- Raub, W./T. Voss 1981 *Individuelle Handeln und gesellschaftliche Folgen. Das individualistische Forschungsprogramm in den Sozialwissenschaften.* Darmstadt und Neuwied : Luchterhand.
- Rohwer, G. 2003 “Modelle ohne Akture. Hartmut Essers Erklärung von Scheidungen.” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 55 : 340-358.
- Sato, Y. 2006 *Intentional Social Change. A Rational Choice Theory.* Rosanna, Austraria : Trans Pacific Press.
- Simon, H.A. 1979 “Rational Decision Making in Business Organization.” *American Economic Review* 69 : 493-513.
- 1983 *Reason in Human Affairs.* Stanford : Stanford University Press.
- Thaler, R.H. 1992 *The Winner's Curse. Paradoxes and Anomalies of Economic Life.* New York : Free Press.
- Udéhn, L. 2001 *Methodological Individualism. Background, history and meaning.* London : Routledge.
- Vanberg, V. 1975 *Die zwei Soziologien. Individualismus und Kollektivismus in der Sozialtheorie.* Tübingen : Mohr.
- 2002 “Rational Choice vs. Program-Based Behavior : Alternative Theoretical Approaches and Their Relevance for the study of Institutions.” *Rationality & Society* 14 : 7-54.
- Voss, T./M. Abraham 2000 “Rational Choice Theory in Sociology : A Survey.” in : S.R. Quah/A.Sales (Hrsg.) *The International Handbook of Sociology.* London : Sage. S. 53-83.
- Wippler, R./S. Lindenberg 1987 “Collective Phenomena and Rational Choice.” in : J.C. Alexander et al. (Hrsg.) *The Micro-Macro Link.* Berkeley : University of California Press. S. 135-152.
- Wurm, W. 1974 *Abschaffung der Soziologie? Behaviorismus als Ideologie.* Darmstadt und Neuwied : Luchterhand.
- Ziegler, R. 1972 *Theorie und Modell. Der Beitrag der Formalisierung zur soziologischen Theoriebildung.* München : Oldenbourg.

## 【訳者後記】

訳出した論文は、ドイツ社会学会機関誌『社会学年報 *Zeitschrift für Soziologie*』38 巻 1 号 26～47 頁 2009 年掲載の *Das individualistische Erklärungsprogramm in der Soziologie. Entwicklung, Stand und Probleme* である。最初にお断りをしておきたい。原題に忠実に訳せば、「個人主義的説明プログラム」であるが、邦題では「個人主義リサーチプログラム」と訳した。本文中では、オブは IRP (Individualistic Research Program) IA (Individualistic Approach, Individualistischen Ansatzes) で通しているからそのようにすることにした。

訳者は 1988 年に在外研究でオランダ、西ドイツ (当時) を訪問する際にオブに手紙を出して、彼が在籍していたハンブルグ大学を訪れて以来今日まで知己の仲である。訳者が読んだ最初のオブの著書はフンメルとの共著である。訳出したこの論文はそのフンメルの名誉教授称号授与の席でのスピーチをもとにしたものだそうである。

訳者自身、拙著『現代の交換理論』(新泉社 1988 刊) 第 6 章で「個人主義リサーチ・プログラムの最近の展開—オランダ、西ドイツに絞って」で、ホームズ (米)、フンメル/オブ、オブ、リンデンバーグ、ラオブ/フォス、ウィプラーの個人主義リサーチ・プログラムの展開を追ったことがある<sup>30</sup>。その後も大学の紀要に、リンデンバーグ、エサーの個人主義リサーチ・プログラムの最近の展開を発表している (拙稿 1994, 2003)。訳者の論文から 20 年以上が経過したが、個人主義リサーチ・プログラムは、現在ではマイクロ・マクロ・リンクの社会学的説明モデル、その個人理論が合理的選択モデルとして展開されている<sup>31</sup>。従って、オブのこの論文は自分と関心の所在が一致するところから非常に興味深く読んだのである。

個人的経歴回顧の部分 (第 2 節) は、自分がドイツの社会学界で個人主義的説明アプローチを牽引し一貫してその中心にいたという自負とドイツ社会学界の同じアプローチをとるライバルへの牽制 (リンデンバーグ、ラオブ・フォス、エサー、彼らは基本的には同じアプローチをとりながら、オブのアプローチを不完全なものとして批判しており、その批判に 30 年も後になってオブは反論しているのである)、ケルン大学での学位論文指導教員であったルネ・ケニツヒとの確執 (個人主義説明プログラムの内容をあつかった学位論文をデュルケミアン・パーソニアンで個人主義説明プログラムに無理解なケ

<sup>30</sup> 訳者はそこでは、リンデンバーグ、ラオブ/フォスによるオブ批判に荷担して、オブを批判している。この訳文でのオブの反論に必ずしも承伏できない感想を持っている。拙稿(1988, 1992)参照されたい。

<sup>31</sup> 上記のオランダ、ドイツの学者以外では、フランスの Boudon、スウェーデン人の Hedström、合衆国の Coleman、Hechter とその弟子、ノルウェー人の Elster が代表的人物である。訳者は 2004, 6 年にコールマン『社会理論の基礎』の監訳書を上梓している。



'05. 3. 10 オランダ フローニンゲン 左はリンデンバーグ

ニッヒが受理しそうになかったので、半年間で仕上げたケルン市の青年の非行の調査データ分析論文に差し替え、博士学位を授与され、自ら差し替えた論文は転出先のエアランゲン・ニュールンベルク大学に教授資格論文として提出し、33歳でハンブルグ大学教授に就任している)。ドイツ社会学界の個人主義説明プログラムはケルン大学が中心で、自分のほかに、フンメル、エサー、リンデンバーグがおり、彼らの実質的師は社会学講座のケニッヒではなく、経済学講座の(当時私講師)ハンス・アルバートであったことを告白している。個人的経歴回顧の部分は、これまで自分の経歴を語るものなかった彼が、憤りを抑えながらさりげなく自慢を吐露している珍しい箇所である。個人主義説明プログラムの部分(第3, 4節)は、1979年刊行の『個人主義社会科学』をその後の30年間の彼およびアプローチ全体の研究進展をふまえて書き換えたものである。個人主義説明プログラムの骨子、それに浴びせられる批判内容、批判に対するプログラムの擁護という構成は『個人主義社会科学』と同じであるが、その間に個人主義説明プログラムはマクロ・ミクロ・マクロ説明モデル(マクロ次元とミクロ次元の二水準説明モデル)と名称を改めている。

個人主義説明プログラム批判者の批判の論点は3点にまとめられる。(1)ミクロ次元での個人理論として合理的選択理論を採用することへの非難。(2)マクロ次元での集合理論が因果命題なのか、相関関係命題なのか不明なこと。個別命題なのか法則命題なのか不明なことへの批判。(3)ミクロ次元とマクロ次元の架橋問題。マクロ-ミクロ・リンクでの架橋問題の解決(彼の表現では経験的な架橋仮説問題)とミクロ-マクロ・リンクでの架橋問題の解決(彼の表現では分析的な架橋仮説問題)の問題。一般的には他の学者は前者を架橋問題(照応問題)、後者を変換問題(集計問題)と呼び、架橋問題





'95. 3. 24 三重大 拙研究室

を狭義にとらえているが、オプは後者をも架橋問題とし、広義にとらえている<sup>32</sup>。

個人主義説明プログラムの問題は、ノモロジカル（法則定立的）説明スキームとメカニズムに基づく説明スキームの論争とも関わるが、その問題についてはオプは05年の論文<sup>33</sup>で重点的に検討し、自己の考えを披露しているので、この論文では触れていない<sup>34</sup>。またミクロ次元の説明モデル、合理的選択理論（行為モデル）で合理性を広くとるか狭くとるか、厚くとるか薄くとるか、経済学と社会学の合理的選択理論家のあいだで態度が異なっているのだが、この論点についても、99年の論文で取り上げているので、この論文では大まかにしか触れていない。05年の論文は、Hedström/Swedberg 編著（1998）<sup>35</sup>に刺激されて執筆したことを断っている。99年の論文はGreen/Shapiro 共著（1994）<sup>36</sup>の政治学での合理的選択理論批判に対するOppの応答の観がある。マクロ仮説

<sup>32</sup> 架橋問題をオプのようにとらえることには異議がある。変換問題と架橋問題はリンデンバーク、エサーのごとく、分けるべきである。なぜなら、変換規則にも分析的それと経験的それがあるので、オプのようにすると紛らわしくなるからである。

<sup>33</sup> 文献一覧に載っていないオプの2005年の論文はExplanation by mechanisms in the social sciences. Problems, advantages and alternatives *Mind & Society* 4: 163-178.

<sup>34</sup> オプはヘンペル流のノモロジカル説明スキームとメカニズムに基づく説明スキームの両立可能性を主張する。メカニズムに基づく説明スキームを採用するものは一様にヘンペル流のノモロジカル説明スキームの代替肢として主張しているだけに彼の立場は少数意見である。リンデンバークも当初（1977）はヘンペル流のノモロジカル説明スキームを採用していたが、ウィプラーとの共同作業（1987）を通じてコールマン流のメカニズムに基づく説明スキーム（コールマンボートによるマクロ・ミクロ・マクロリンクの図式）に乗り換えているが、自身の立場の変更、前者の立場の放棄については一言の断りもない。メカニズムに基づく説明スキームがノモロジカルな説明スキームに翻訳できるというオプの主張に対する所見を明らかにしてほしいものである。

<sup>35</sup> P. Hedström/R. Swedberg (eds.) 1998 *Social Mechanisms. An Analytical Approach to Social Theory*. Cambridge University Press.

<sup>36</sup> D. Green/I. Shapiro 1994 *Pathologies of Rational Choice Theory. A Critique of Applications in Political Science*. Yale University Press.

とマイクロ仮説の経験的架橋仮説の事例は、04 年の論文からの再掲である。

最後に訳者とオプとの関わりに触れることにする。訳者がオプの論文、著作に最初に接したのは、彼がフンメルと共同で著した『社会学の心理学への還元可能性』(1971 年刊)である。その部分訳を 1983 年の紀要に掲載した。1984 年の紀要に掲載した「方法論的個人主義・心理学主義批判の検討」の論文をまとめるにあたって、前述の 1979 年刊の『個人主義社会科学』に依拠している。それ以来オプの社会学の方法論関連の論文は欠かさず目を通してしている。

オプとはドイツでも日本でも何度も会っている。1988 年に在外研究で渡欧した際、オランダのユトレヒト大学で講演講師として来学した彼に最初にあったのを皮切りに、その次の週 1 週間は、彼の当時の勤務先ハンブルグ大学のゲストハウスに泊めてもらい、議論した。1995 年に、日本を訪れた夫妻を三重県の伊勢鳥羽に案内した。東ドイツの消滅のきっかけになったライプチヒの月曜礼拝、体制プロテスト運動参加者に聴きとり調査を行うため、1993 年以来旧東ドイツのライプチヒ大学に移っていたオプの研究室を 1998 年に訪問した。2001 年にはライプチヒ大学で開かれた日欧合理的選択研究者集会で、2002 年には福岡での日欧合理的選択研究者集会で、2004 年にはオランダ・フローニンゲン大学での日欧合理的選択研究者集会で旧交を暖めている。

1937 年生まれの彼は、ライプチヒ大学を 2002 年に定年退職し、2006 年以来現在までアメリカ・ワシントン州立大学連携教授 (Affiliate Professor) である。著書は 26 冊、論文は 150 本をくだらないだろう。2008 年に彼の 70 歳の誕生日を記念して、友人、旧同僚、教え子の 21 人の寄稿した 17 本の論文からなる論文集<sup>37</sup>が刊行されている。

解説に出てきた拙稿の出典は次の通りである。

拙稿 1983 「H.J. フンメル/K.-D. オプ著 社会学なき社会学—社会学の心理学への還元 (翻訳)」『三重大学教育学部研究紀要』第 34 号 pp. 67-86.

拙著『交換理論と社会学の方法』(新泉社) 第 7 章に再録 pp. 196-242.

拙稿 1984 「方法論的個人主義・心理学還元主義批判の検討」『人文論叢 (三重大学人文学部研究紀要)』第 1 号 pp. 17-31.

拙著『交換理論と社会学の方法』(新泉社) 第 6 章に再録 pp. 170-195.

拙稿 1988 「最近のオランダ・西ドイツ社会学界における個人主義のリサーチ・プログラム展開の動向」『人文論叢 (三重大学人文学部研究紀要)』第 5 号 pp. 135-158.

<sup>37</sup> A. Diekmann/K. Eichner/P. Schmidt/T. Voss (Hrsg.) *Rational Choice : Theoretische Analysen und empirische Resultate. Festschrift für Karl-Dieter Opp zum 70. Geburtstag.* VS Verlag.



拙著『現代の交換理論』（新泉社）第6章に再録 pp. 129-172.

拙稿 1992 「集合理論と個人理論の連結の課題—特に架橋の問題と変換の問題に関して」  
『人文論叢（三重大学人文学部研究紀要）』第9号 pp. 85-107.

拙稿 1994 「社会学におけるモデル構築の課題—抽象性と実在性のアポリアをいかにして解決するか」『人文論叢（三重大学人文学部研究紀要）』第11号 pp. 1-18.

拙稿 2003 「架橋仮説と社会的生産関数のヒューリスティック—リンデンバーグによる合理的選択理論の拡張」『人間情報学研究』第8号 pp. 31-62.



## 正誤表 (ERRATA)

教養学部論集 154 · 156 · 157 号について以下のように訂正があります

Nr. 154

Tilesius und Japan (Teil 1)

Frieder SONDERMANN

S. 119	8. Zeile von oben	<i>Cnuper</i> → <i>Clupea</i> <i>hippmia</i> → <i>hippuris</i>
S. 121	12./13. Zeile von oben	<i>exocitus</i> → <i>exvitus</i> [?]
S. 122	5. Zeile von unten	<i>Scamber</i> → <i>Scomber</i>
S. 123	12. u. 20. Zeile von oben	<i>Chox</i> → <i>Esox</i>
S. 124	4. Zeile von oben 4. Zeile von oben 5. Zeile von oben	<i>Tuffilago</i> → <i>Tussilago</i> <i>Tsua</i> → <i>Tswa</i> [?] <i>Figu+ra zeigt daß mangelhafte</i> → [gehört wohl hinter "aus der Stadt" vom 30.10.]
S. 124	3. Zeile unter 65. 5. Zeile unter 65. 15. Zeile unter 65.	<i>haba</i> → <i>faba</i> <i>Tuffilago</i> → <i>Tussilago</i> <i>Oniso</i> → <i>Onisci</i>
S. 124	11. Zeile von unten	<i>Spülwürmer</i> → <i>Spulwürmer</i>
S. 126	Mitte	"... so vollendete ich die Zeichnung heute." → [Anmerkung : s. Abb. in Langsdorff Bd. I, 16 und Kupfer bei S. 205]
S. 127	2. Zeile von unten	S. Tab. XI. → S. Tab. XI. [!]. Anm. : Vielleicht ist "Krusenstern-Atlas Tab. LXI, Fig. 1" gemeint.
S. 128	Mitte 5. Zeile von unten	<i>Amberfisch</i> → <i>Umberfisch</i> <i>Amberfische</i> → <i>Umberfische</i>
S. 129	13. Zeile von unten 10. Zeile von unten	<i>inaequicanda</i> → <i>inaequicauda</i> ; <i>sesquicandata</i> → <i>sesquicaudata</i> ( <i>Chlomis</i> ) → ( <i>Chemosis</i> ) ; <i>Chaetadon</i> → <i>Chaetodon</i>
S. 131	Mitte	<i>Exocadill</i> → <i>Crocodill</i>
S. 132	Mitte	<i>Sparus dentes</i> → <i>Sparus dentex</i>
S. 133	5. Zeile von oben	<i>Trigula</i> → <i>Trigla</i>
S. 133	11. Zeile von oben	<i>nakken</i> → <i>nakten</i> ; <i>Stächelbauche</i> → <i>Stächelbauche</i> [!=Stachelbäuche]
S. 133	3. Zeile unter 18. Jenner	<i>oder was</i> → <i>oder Sonne</i>
S. 133	Zeile 20. Jenner	( <i>Clupea Thrissa</i> ) → ( <i>Clupea Thrissa</i> ) [?]
S. 133	Zeile unter 20. Jenner	<i>cruentes</i> → <i>cruentus</i>
S. 134	2. Zeile unter 27. Januar	<i>Amberfische</i> → <i>Umberfische</i>
S. 134	Mitte	<i>cenentus</i> → <i>cruentus</i>
S. 136	1. Zeile oben 2. Zeile von oben 2. Zeile von unten	<i>Triebetange</i> → <i>Treibetange</i> <i>nachgebildet</i> → <i>doch abgebildet</i> <i>Vulkanfelsen Gewölle</i> → <i>vulkanischen Gerölle</i>
S. 136	1. Zeile von unten	<i>Zoogr.</i> [?] → <i>Zwertg[ang].</i> [?]
S. 137	Zeile unter 15 Februar	<i>20 kühle</i> → <i>2<sup>o</sup> kälter</i>

S. 137	3. Zeile unter 18. Febr.	<i>Sterseher</i> → <i>Sternseher</i> <i>Sterrekippfer</i> → <i>Sterrekyyker</i>
S. 137	4. Zeile unter 18. Febr.	<i>Vranoscopus</i> → <i>Uranoscopus</i>
S. 137	1. Zeile unter den 21.	<i>Cricius</i> → <i>Ericius</i>
S. 137	2. Zeile unter 22 Febr.	<i>Frigla</i> → <i>Trigla</i>
S. 137	4. Zeile von unten	<i>es</i> → <i>sie</i>
S. 138	1. u. 2. Zeile von oben	<i>verracosa</i> → <i>verrucosa</i> <i>obstipata L.) n.sp.</i> → <i>L.) obstipata n.sp.</i>
S. 138	7. Zeile unter 24 Februar	<i>unziemliche [?]</i> → <i>nüzzliche</i>
S. 138	1. Zeile über 25. Febr.	<i>Rhinobatas</i> → <i>Rhinobatos</i>
S. 138	Zeile 27. Febr.	80 → 8°
S. 138	4. Zeile unter 28. Febr.	<i>Fris</i> → <i>Iris</i>
S. 138	1. Zeile unter 3- Mart.	<i>Makar</i> → <i>Macar</i> ; <i>Klippplebers</i> → <i>Klippklebers</i>
S. 139	1. Zeile von oben	3.6. → 36.
	2. Zeile von oben	<i>den</i> → <i>dem</i>
	7. Zeile von oben	<i>Comonbuk</i> → <i>Comonbuk</i>
S. 139	Mitte	<i>Chimara</i> → <i>Chimaera</i>
S. 139	Zeile: den 13. Mart.	<i>Opus</i> → <i>Apus</i>
S. 139	2. Zeile von unten	<i>Quitewürmer</i> → <i>Tintenwürmer</i>
S. 140	1. Zeile unter ... 21. Mart.	<i>Seerauche</i> → <i>Seeraupe</i> ; <i>Slava</i> → <i>flava</i>
S. 140	vorletzte u. letzte Z. unten	<i>Gastero-peus</i> → <i>Gastero-steus</i>
S. 140	letzte Zeile	<i>vel.</i> → <i>vol[gus]</i> .
S. 141	2. Zeile von oben	<i>Scolopeadia</i> → <i>Scolopendra</i>
S. 144	4. Zeile unter den 18. April	<i>beyden Mündungen</i> → <i>beyden blauen Mündungen</i>
S. 144	5. Zeile von unten	<i>H.D.</i> → <i>H.D</i>
S. 146	3. Zeile vor Textende	<i>war</i> → <i>waren</i>
Nr. 156		
Tilesius und Japan (3. Teil)		Frieder SONDERMANN und Günther STERBA
S. 64	6. Zeile von oben	<i>Nachlass, Nr. 11 Dieser</i> → <i>Nachlass, Nr. 11). Dieser</i>
S. 65	3. u. 4. Zeile von oben	<i>ti-efen</i> → <i>tie-fen</i>
S. 76	Bibliographie Nr. 1	<i>Paradisiaceae</i> → <i>Paradisiacea</i>
S. 83	Bibliographie Nr. 82	(1831). → (1831), S. 1-70.
S. 84	Bibliographie Nr. 91	Guilielmo → Guillelmo
S. 84	Bibliographie Nr. 93	<i>veneri</i> → <i>venerei</i> ; <i>delineavit</i> → <i>delineavit</i> ; <i>Assumpto</i> → <i>Assumto</i> ; <i>Guillermo</i> → <i>Guillelmo</i> ; <i>Baumgaertner</i> → <i>Baumgaertner</i> ,

Errata und Ergänzungen zur Bibliographie in "Tilesius und Japan (3. Teil)"  
(meist Hinweise von Dr. De Bersaques, aber ohne Autopsie)

---

Nr. 15 zur näheren Bestimmung → zur nähern Bestimmung

---

Nach Nr. 79 :

Tilesius, W.G. : Von den Bestandtheilen und den davon abhängigen Heilkräften der aus der Manna gezogenen Arzneimittel. In : Archiv des Apothekervereins im nördlichen Teutschland, 1830 ...

Tilesius, W.G. : Ueber Arzneimittel gegen Cholera. In : Archiv des Apothekervereins im nördlichen Teutschland, 1830 ...

Am Ende von Nummer 82, ergänze : S. 149-216.

---

Nach Nummer 86, ergänze :

Tilesius, W.G. : Die Angaben der ältern Chemiker und Aerzte werden zum Theil von den neuern wahr und richtig befunden und verbessert. In : Archiv der Pharmacie, 53, 1 (1835) S. 212-223.

Tilesius, W.G. : Ueber einige Mittel gegen Syphilis. In : Archiv der Pharmacie, II. Reihe, Bd. \_, 1835, S. \_.

Tilesius, W.G. : Heilkräfte der Aschenlauge. In : Archiv der Pharmacie, 55, 2 (1836) S. 539.

---

Am Ende von Nummer 87, ergänze : S. 167-200.

---

nach Nr. 88, ergänze :

Tilesius, W.G. : Bemerkungen über einige russische Volks-Arzneimittel. In : Archiv der Pharmacie, 73, 1 (1840) S. 101-116.

---

S. 91, vor Anhang :

Unsere zahme Hausziege und Ziegenbock und wer ihre Stammältern gewesen. In : Isis (Hg. : Oken) 1835, 10.H., Sp. 868-893 und 11.H., Sp. 934-944.

---

Nr. 157

Tilesius und Japan (4. Teil)

Frieder SONDERMANN und Günther STERBA

---

S. 48 Text 3. Zeile von unten

Sankoku → Sangoku

---

S. 49 3. Zeile von unten

japanischen → japanische

---

S. 50 letzte Zeile von unten

和漢三才図 → 和漢三才図会

---

S. 51 Mitte

(B1) 白鷺 → (B1) 白鷺

---

(3) いか化して 鷺 → (3) いか化して 鷺

---

S. 54 4. Zeile von oben

Japanischkenntnis → Japanischkenntnisse

---

154 号は

〈[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_154/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_154/index.html)〉

156 号は

〈[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_156/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_156/index.html)〉

157 号は

〈[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_157/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_157/index.html)〉

で公開中です。





平成 23 年度 東北学院大学学術研究会評議員名簿

会 長 星宮 望  
評 議 員 長 菅山 真次  
編 集 委 員 長 菅山 真次  
評 議 員  
文 学 部 [英] 遠藤 裕一 (編集)  
[総人] 佐藤 司郎 (編集)  
[歴] 辻 秀人 (編集)  
経 済 学 部 [共] 越智 洋三 (編集)  
[経] 泉 正樹 (会計)  
[共] 佐藤 滋 (編集)  
経 営 学 部 菅山 真次 (評議員長・編集委員長)  
松岡 孝介 (会計)  
折橋 伸哉 (編集)  
法 学 部 黒田 秀治 (庶務)  
白井 培嗣 (編集)  
木下 淑恵 (編集)  
教 養 学 部 [人] 吉田 信彌 (編集)  
[言] 伊藤 春樹 (編集)  
[情] 乙藤 岳志 (庶務)  
[地] 金菱 清 (編集)

東北学院大学教養学部論集 第 159 号

2011 年 8 月 15 日 印刷 (非売品)  
2011 年 8 月 22 日 発行

編集兼発行人 菅 山 真 次  
印 刷 者 笹 氣 幸 緒  
印 刷 所 笹氣出版印刷株式会社  
発 行 所 東北学院大学学術研究会  
〒980-8511  
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
(東北学院大学内)

---

---

# FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 159

August, 2011

---

---

## CONTENTS

### Articles

- Cees Nooteboom lesen 3) “Rituale” ..... YOSHIMUCHI Senji ..... 1
- Classical Chaos and Quantum Mechanical Solvability in Inverse Problem  
..... TAKAHASHI Koichi ..... 45

### Study Note

- You Shall Love Your Neighbor in Your City (2) ..... YOSHIDA Shinya ..... 67

### Translation

- Karl-Dieter Opp : Das individualistische Erklärungsprogramm in der Soziologie.  
Entwicklung, Stand und Probleme ..... KUJI Toshitake ..... 75